

創刊大正十三年 通卷八一八号

川柳塔

白川協加盟



No. 818

西尾 栞 追悼特集号

七月号

西尾 栞追悼句会

西尾某名譽主幹の遺徳を偲んで左記により追悼句会を開催します。ごぞつてご参加ください。

と き 7月23日(日) 正午開場・午後1時締切

ところ 八尾グランドホテル△元ジバング日本海V

〔八尾市八尾北5丁目1001〕
電話(0729) 9413591

交通便 近鉄八尾駅下車・送迎バスがあります。

おはなし 西田 柳宏子

兼題と選者(各題2句)

「アンパン」 黒川 紫香 選

「髭」 小松原 爽介 選

「仕合せ」 藤本 静港子 選

「温泉」 磯野 いさむ 選

「旅」 橋高 薫風 選

会費 1000円

懇親会 5000円(同会場で開催・予約制)

川柳塔社

川柳塔まつり

本社と地方同人との交流を活発にするイベントとして今年度から次の要項で「川柳塔まつり」を実施します。

- 平成七年度同人総会 10月1日(日)
- 各賞表彰式 同日午後1時から
- 記念句会 表彰式に続いて行う。
- ところ 大阪市立労働会館
- 前夜祭(懇親会) 9月30日(土)
午後6時から、なにわ会館で開催

新刊

谷垣史好句集

谷垣史好著 橋高薫風序文
B6判・148頁 定価500円

送料240円

史好川柳の珠玉 五百四十句を収録

編集・発行 川柳塔社

西尾 栞先生

橘高 薫風

巖といういかめしい本名に比べ、雅号の栞は如何にもやさしい。枝折に通じるころ、虚子の句と思つが「敲いても敲いても水鶏許されず」のような、枝折戸を叩く水鶏のいた八尾の在所を想起する水鶏庵の庵主であつた。

私が川柳をはじめて程なく、最初に接した句集は水谷鮎美著『美をぶらす』で、そこには「いづもやで父たり夫たり子たり」という句があり、十七音字で何と多くのことを言ひ得ているかと感心したものだ、家族の様子を具体的に表わすと頭ほど光らぬ父でありにけり
張り替えた障子の中に母います

最後の最後の味方は妻なりき

意見する儂がまだまだ遊びたし

よふきいときやと妹ついでに叱られる

栞先生のこのような句になる。先生は親

思い、家族思いの人であつた。自然を賛

美し、人間の性善を信じて自らも実践、

句に移された。それ故、先生の句はすべ

て温かでふくよかだ。

川柳の出発が麻生路郎先生指導の阪大川柳会で環境拔群であつた。上達せぬ筈はない。自ら述懐しておられるが、「六角堂幾何学的に暮れて行き、路生」には昭和初期としての斬新さに啓発されたそうだ。以来川柳生活六十有余年、その作品において、その選句において、路郎門

の三傑に挙げられる大きい存在だった。元旦や我れ泰山の如く座す
一步出ずれば吾れ旅人となる心
温泉や座り羅漢に寝る羅漢
牛の瞳に人間何をあわてとる

美容院から戻りあわてまいことか

虞や虞や汝を如何せん四十八

あの晩の風邪よと女嬉しそつ

あほくさとも言わず炬燵を猫は出る

先生の句の幅と奥行きはこのように闊

達で、鑑賞者に笑顔で語りかけてくれる。

丸いお顔をかしげ、やさしい目とおち

よほ口で、「ほな、薫風さんの健康に乾

杯ノ」と盃を挙げて下さるとき、男の私にもと思つほど和顔愛語そのものの先生だった。

哀 悼

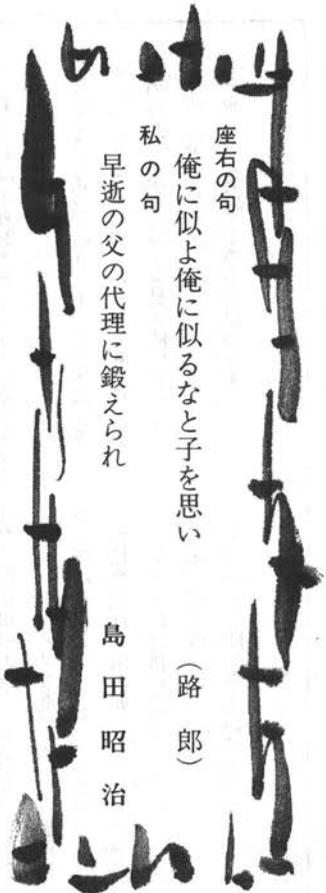
南無菊花 義 礼 信を棺に入れ

足弱の師なり天女に手を引かれ

閻魔にも和顔愛語を説き給い

目の限り菜の花の黄が師の浄土

波の音よき思ひ出を繰り返し



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

早逝の父の代理に鍛えられ

島田昭治

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 西尾 葉先生

橘高薫風 …… (1)

「戦後五十年と私」

田中正坊 …… (2)

川柳塔 (同人吟)

橘高薫風選 …… (4)

自選集

東野大八 …… (40)

川柳の群像 土井文蝶

高杉鬼遊選 …… (44)

■古川柳 柳籠裏二篇研究 (二十六丁)

西田柳宏子 …… (46)

水煙抄

金村青湖 …… (50)

秀句鑑賞 「同人吟」

同人吟 …… (48)

水煙抄

田中透太・弘津柳慶・芳地理村 …… (73)

〈同人特集〉 戦後五十年と私

小林トメ子・寺井東雲・藤村宏子 …… (74)

渺湖抄

小出智子選 …… (79)

茴香の花

西出楓楽選 …… (82)

「戦後五十年と私」

田中正坊

一昨年、私は共に学窓を巣立って激動の時代を生き抜いた同期生の合同文集を編み、私も一文を草した。卒業五十年を記念して刊行したもので、戦後五十年より三年早いわけだが、私の今までの歩みが簡潔にまとめられていると思うのでこれをそのまま再録し、「戦後五十年と私」の企画に参加したい。

愛別離苦 六十代と二十代

七十年の人生をふりかえると、それぞれの年代にそれぞれの思い出があるが、何といっても、私にとっていちばん事が多かったのは二十代と六十代であった。

満二十歳の昭和十七年に卒業して新聞社に入社、社会部に勤務していたが、同十九年に召集されて軍隊生活を送った。戦後は復員して記者生活にもどるとともに、新聞社労組の役員をつとめていたところ、同二十五年、全国に吹きあれたレッドパージの風で解雇され、一介の失業者となった。

翌年、教育出版社に就職、結婚もして以来三十年、平凡な市民生活がつづくこととなるが、かえりみると、卒業―就職―召集―復職―失業―再就職―結婚と目まぐるしいばかり

追悼

西尾 栞先生を偲ぶ

(84)

西尾

仲川たけし・東野大八・山田良行・磯野いさむ・去来川巨城
小松原爽介・北畑金治・工藤甲吉・月原宵明・恒松町紅・田口虹汀
黒川紫香・高杉鬼遊・渡邊蓮夫・宮西弥生・板尾岳人・西田柳宏子
栞五十句

(97)

「塔」

佐治千加子選

(98)

一路集「旅」

垂井千寿子選

(98)

「従」

黒川紫香選

(99)

初歩教室「傘」

吉岡美房

(100)

各地柳壇(佳句地十選/森田 文)

橘高薫風

(102)

大空のころろ

橋高薫風

(115)

六月本社句会

橋高薫風

(116)

柳界展望

橋高薫風

(120)

七月各地句会案内

橋高薫風

(141)

■編集後記

橋高薫風

(142)

座右の句

人恋し人煩わし波の音

(栞)

私の句

連休に老いを案じて鉢合せ

上田 登美子



の二十代ではあった。

私が還暦をむかえた昭和五十七年、妻がガ
ンで入院・手術をうけた。青天のへきれきで
あった。私はただちに職を辞して看護に専心
したが、翌年春、妻は不帰の客となった。一
男は研究者、一女は教師としてそれぞれの道
を歩みはじめ、あいっいで結婚し、息子はニ
ューヨーク州の研究所に在籍、娘は小学校教
師をつとめながら二男一女の母としてけんめ
いに生きている。

さて私は、年金者生活のつれづれなるまま
に知人が経営する出版社に再々就職したが、
二年間つとめただけで退職、昭和六十二年に
亡妻の両親の媒酌で再婚し、体験した者だけ
にしかわからぬ不自由な、独居老人の生活
から解放されて今日にいたっている。

ここで特記しておきたいのは、今は亡き白
岩文衛君のてびきで、川柳を知ったことであ
る。文字とおりの六十の手習い、スイスイと
上達するわけではないが、身につけた技能を買
われ、『川柳塔』の編集者として結構、忙しい
日を送っている。川柳を心の友とし、生涯
一編集者としてすごせることをありがたい
と思っている。

七十一あといくばくの余命表

この八月で、私は満七十三歳の誕生日をむ
かえる。なすべきことは忠実に果たしながら
出処進退を誤らぬようにしたいと思つ。

川柳塔

橘高薰風選

大阪府 靱山 隆

青森県 田中 叶

サティアンに一本もなし鯉のぼり

抜けた歯に切株ひとつ残らない

はしご酒よくぞご帰還されし傘

腕時計右の腕にはよう嵌めぬ

夢と風かさなりあえば詩を孕む

税務課の書簡は殿といかめしい

堺市 桑原道夫

子らと居て禽の水輪のはてしなし

春愁やこの世の舌のありどころ

転居してすぐの七色唐辛子

雨傘の雫も中年くさきかな

父子の夜ドライアイズと華やげり

五月呆けプールの水を見ている

水のないプールの端に立つ五月

妻の手に触れたし触れてみたい初夏

満月に一本の綱張ってあり

薬屋の灯が消え街の一区画

みな胸にしまいサビオを巻いた指

ダンボールたたむ家でも会社でも

広島県 藤解静風

オウム騒動 政治はしばし放つとかれ

サティアンを観光にする平和ぼけ

見えない振りで見ている昼の月

どの辺りからあの世だろうか空深し

肩書きがないと肩書きこわくない

生命線そろそろ力尽きる頃

竹原市 小島 蘭 幸

サティアンの真上の月も美しい
妻よりも敵しい長女だと思つ

ステッキがひとつポツンと置いてある

みんな眠つたら あんぱんを食べる

十六歳はまだ蕾だと言つておく

連戦連敗バレ一部は皆美しい

岡山市 川 端 柳 子

追憶やとところどころが補修され

あてもないけれど時計の螺子を巻く

右手左手結んで開いても孤独

どうかしましたかと薫風が訪ね来る

すでに過去 汗に流れた氷水

富士山の深い悲しみすき通り(オウム教)

弘前市 佐 治 千加子

原爆症の兄がかじつていたトマト

原爆二世 兄のひとり子双耳無し

失語症 石より白き白き闇

棺ゆらり此岸はげしき花嵐

祈りひたすら桜花沈黙の飛散かな

流水去つてやさしい手紙書いてます

守口市 森 川 まさお

原爆ドーム鳩も鴉も肥えている

重い歴史 鳩は遠くへは行かず

慰霊塔 忘れな草も供えられ

五十年 今日ヒロシマ花祭

なんのその白い雨降る花祭

公園に重い臉の仏さま

和歌山市 堀 畑 靖 子

思い出をじんわりあぶりだす夕日

相棒とみつづけている同じ夢

うぬぼれやさんをたててるかすみ草

めんどりが歌う夢などみています

気がねなく使えるお金欲しい主婦

花が咲く鬼門封じの南天に

和歌山市 田 中 輝 子

孤にこもりきのうの坂を想うなり

傲慢な山を崩してきた月日

可愛くない花もまじつている花屋

人という文字に涙の溜れるまで

その先は聞かず一途に下る川

優しさの欠片あつめをする遙か

和歌山市 木 本 朱 夏

恋をするたびに死んでもいいと言つ

品行方正あなたには匂いが無い

手の届くところに欲しいものがあり

ビニールの傘のかるさで捨てられる
亀になつたちちを時々見忘れる
トイレから出てきた顔を盗まれる

竹原市 岩本笑子

車椅子 笑えることもあるんだよ

他人から見ればハンディかも知れず

生きてやる生き抜いてやる車椅子

雨のち雨りハビリさえもゆつくりと

ラディッシュの主張はサラダからこぼれ

難問解決 夫の寝言まで変わり

町田市 竹内紫鏑

用のない身でキャンパスの緑訪う

万歩効果か階段下りる朝の音

動く歩道で別れ昇天した老師

余技にさえ元研究者グラフ書く

江戸医者のような作務衣でキーボード

実験の微臭で育ち化学技師

岸和田市 岩佐ダン吉

ベレー帽 僕の鏡が笑つてる

被災地の柳よ僕も無事だった

グムの水減つてる心まで寒い

妻が待つラストスパートしてやろう

裏切りがこわく一人で立つている

核を抱く地球と僕にある不安

鳥取市 武田帆雀

東京の子が檜山へ連れに来る

筍は境界線が好きらしい

天二物ああこの人に攻めが欠け

灰皿がいつもきれいなのが取り柄

私のサティアン菊を挿す処

ライバルが静かに息を吹きかける

草屋根を見付けて星が降りて来る

沖に出て男はみんな点になる

キリストの絵に欠けているおとうさん

青畳嗅ぐと高ぶるものがある

和歌山市 牛尾緑良

朝顔と同じ空気を深呼吸

切り札があつて胡坐を組んでいる

五百羅漢 明日のポーズを考える

花の名をひとつ覚えて満ち足りる

善人の面も日毎に色褪せる

富田林市 池森子

曲り角だろわか春が重くなる

一点を守りつづけた座り胼胝

背を押してくれたがんな風ひとつ

五月雨は帰らぬ人の音で降る

愛されたかたちに残る風の紋

松原市 小池 しげお

西空が綺麗で快く訣れ

帽子掛け勤が不思議なほど当り

お返しは妻と合意の塩昆布

絶好調のうちにとどめをさして置く

毛穴まで滲みる法話を聞いている

海南市 三宅 保州

耳鳴りが今も鳴りやまない戦後

一心不乱になると止まっている時計

星の瞬きは含羞かもしれぬ

免許証だけが私の証明書

身のほどを忘れています試着室

弘前市 高瀬 霜石

木偶の靴 雲百態を友とする

ひとを恋う胸に流れている小川

一心不乱 右も左も無い軍手

空青し臓器をひとつ失つて

砂漠ニテ死ス出稼ぎのかたつむり

弘前市 肥後 和香子

饒舌な黒猫となり夜があける

桜シャワー全開にしてよ四十五歳

にっと笑ってぼたり椿よ万華鏡

墓石のちらしはそつと四つ折りに

狂うことこわくないですか八重桜

五所川原市 斉藤 荔

久しぶり金魚を売りにきたおじさん

ふれあいの農園開き虫も来て

手の跡がついて私の鍬になる

母の日の母はりんごの授粉中

菜の花が炎になつて村祭り

弘前市 浅田 隆樹

おトイレのスリッパ酔うて居間にいる

一日の終りに今日も歯をみがく

夜深く妙に覚めてる一升びん

親不幸せめてともした絵ロウソク

悲しさに慣れていつでもニコニコと

鳥取県 乾 隆風

婿入りの古いとんびが蔵にある

同輩はサラブレッドを連れてくる

この齡になつても三角は嫌だ

おとなりの園に南瓜が這うて行く

食欲がなくなつてから見舞い籠

米子市 林 荒介

鉛筆は残り時間をまだ知らぬ

本箱で音を殺している父等

公園の裸像に長い雨期がくる

川幅を確かめている竹とんぼ

逃げ道に用意しておくメモ用紙

米子市 政岡 日枝子

卯の花でピアノの上が夏になる

芸がないので筍などを湯掻して

捨ててゆく名ばかり増える住所録

昼からの楽器は少し浮かれすぎ

火の用心 噂大きくなってゆく

米子市 澤田 千春

歳月や朝の鏡にゆれ動く

たちはだかった岩と身の上話する

身の内に他人の声がしてならぬ

大きな心もらつて寺の門を出る

納得をするまで回り道をする

鳥取県 江原 とみお

春よ春情け傾きやすきかな

春昼に自業自得の爪をきる

しつかりせい時折り己抱き起す

直情の川に溺れたのはむかし

フルコース水が一番うまかつた

出雲市 富田 蘭水

読書する心の海が風ぐひろさ

よく笑う嫁で一家が持てている

花ことば信じてなるかこんな世を

心まで緑に染める大連休

季節感 女するどく早変わり

富山市 舟渡 杏花

かぞえ唄 残りの旅が見えてくる

千鳥足がつづく門灯ある限り

面いくつ割る名人の膝小僧

そばの里 嫁さんが来るふれ太鼓

ことのはずみで白紙に付いた黒い染み

豊中市 安藤 寿美子

ふりかえる日々はいずれも貧しくて

大丈夫やろと地下鉄へ降りる

貧しいと言わずシンブルな暮し

いい覚悟 喪服の帯をきつく締め

朝のコーヒー遺影と二人で飲んでます

大阪市 西出 楓楽

ペアエプロン男を上げているつもり

自分に毒づいて暑さがなおつる

思い出し笑いをてれるわけがあり

円満に同居 大した役者なり

コーヒーを濃く入れアガサ・クリステイ

羽曳野市 吉川 寿美

夏つばき幾度春を病みぬける

冷蔵庫クスクス笑う無精卵

かきたてるものあり真摯に向い合う

晩学へ蝶もとんぼも来て遊ぶ

他人の眼に女ひとりの破れ傘

八尾市 片上英一

でむしは欣喜雀躍 梅雨に入る

「さあ主婦にもとろ」大阪暮色です

はらわたでじつくり思案 寒海鼠

尼さんと向い同士の力餅

知恵蔵を枕にちよつと昼下り

藤井寺市 吉岡美房

牡丹寺悟りに遠き人の群れ

四つ角で美味いうどんを思い出す

太つてるだけで幸せそうに見え

止つたらこける暮しで息が切れ

やせ蛙やつと出番が来たようだ

高槻市 川島諷云児

生意気な影だ私を叱咤する

追伸に追伸重ねている未練

自適には遠いが好きに生きている

念を押すクギは一本あればよい

一徹な男に降りる駅がない

松原市 玉置重人

梅雨しとどでんでん虫はマイペース

目を入れるまでは謙虚なグルマです

花粉症 耳鼻科の長い待ち時間

冗談の下手な男の靴すべり

我が町も満更でない万歩計

吹田市 栗谷春子

春とてもしようことなしの夕べかな

丁字屋を出れば小やみになっていた

麦とろの元祖でむかごの味も知る

珍しいもの皆うれし入院も

手術後の瞳 五月の空上等

尼崎市 春城年代

無造作に大事な今を食べちらす

男と女 罪のかけらと泥んこに

新緑に踏み入る恋を見ていたり

雨の緑をいとしとおもう恋を遂げ

心静かな余生があればよしとする

尼崎市 春城 武庫坊

目を閉じて摺むと風の尻尾だけ

祖父の道 通らぬように矢印を

タンゴ鳴る憂さを晴らしたリラの雨

花道を飾る下絵がまだ描けぬ

大正の血はまだたぎる世紀末

西宮市 亀岡哲子

地の底のマグマの上でトテチテタ

柳家小さんに似た小父さんの解体屋

家壊し壊し近くにみる六甲

とんからり四軒残り隣組

ステッキはイギリス製です骨を症

砂川市 大橋 政良

操りの糸ジレンマに落ちてゆく

死が一步近づくと日めくりをめくる

四捨五入こんな妥協で今日終る

回り道 仏に逢えるかもしれぬ

上ばかり見てる男と手を組まぬ

弘前市 小寺 花峯

頬杖をついた机で過去に遭う

道連れにした酒つばの数多し

間借りする庭の草花よく伸びる

ジョーカーを使いそびれた窓際で

妻が振る旗の色合いしかと見る

弘前市 蒔 苗果林

草の芽の朝の歎声きき歩き

心はもう大きな蓮の葉の真上

子沢山 竹の子好きなのは夫

たっぷりもちよっぴりもよし早苗水

のっぼさん就職 高所恐怖症

黒石市 相馬 一花

斗酒なお辞さずと舌がもつれ出す

星影のワルツで帰る軽い靴

好きですとっかかり吐いた力水

年金に爪を研いでる所得税

少年の好きな言葉は『よく遊べ』

横浜市 菱田 満秋

野次馬にカメラ向けられVサイン

毎朝の鳥の来ない日の不安

災害の見舞いへ揃いの作業服

電話機は娘のものとなりにけり

出ていった妻を息子が許さない

静岡県 蘭田 猿杵

良し悪しは別に過去の日なつかしい

長老の棺は花で埋められる

思い遂げ初夏爽やかな心なり

サリンより無害ですよと汽車の煙

ハンカチを貰っただけの女です

(前月分) 七尾市 松高 秀峰

正直が過ぎてこの役降ろされる

友と吹く口笛リズムが蘇る

どの顔も本音を見せぬポスター貼り

久方に父母と語らう春祭

仏様 似た顔揃う日向ぼこ

七尾市 松高 秀峰

潮時を上手に抜ける友の酒

浮き沈みあるから人生面白い

家よりも車を選ぶ若夫婦

貧乏を笑い話にクラス会

好きな人 嫌いな人とわかる猫

蜆にはまだ描き得ぬ海の青

唐津市

田口虹汀

夢でよかつた妻が冷たくなつていた

武士道健在 菖蒲湯家に有る限り

祥月の母が好んだ柏餅

順番に逝けば祝つて貰へたに

唐津市

山口高明

隣の娘写つて居たぞお立ち台

フライデーされぬ程度の夫でよい

物言わぬ奴が割り込むへア談義

見る方が辛い大根役者だね

お仕事が優先子供欲しがらず

唐津市

仁部四郎

迷信の製造元はテレビショー

倒産を治すに賄賂効くと言う

自分史の前書きに母 跋に父

春の乱 平成七年視界ゼロ

ブーメランになるとは知らぬ軽い嘘

唐津市

久保正剣

火の糸で寡婦とあやとりするスリル

客足が途絶えた頃に謎の客

鉢合せして合鍵を見比べる

オウム教 立小便にも気をつかい

割れ鍋の蓋にはなれぬギヤルの群

北九州市 梅田宣司

日めくりの一枚ずつに生きている

御しやすい一人にされている笑顔

子の家の夕餉 明治の胃が惑い

ふるさとが二つになった若夫婦

真つすぐに歩いて運のない男

香川県

木村あきら

花時計 蝶もすかさず寄つてくる

札束で攻めると城はすぐ落ちる

秒読みになつて命を大切に

喪が明けて紅香水に用がで

寺の梵鐘 大東亜戦に征つたまま(大戦五十年回顧)

香川県

工藤吟笑

人生の疲れ笑顔の裏にある

執念が石になるほど石磨く

投げた石 波紋いまだに付きまとい

蓋開けて見たら味方は誰も居ず

生涯を賭け残つたは深いシワ

香川県

成重放任

今日もまた同じ仕事で黄昏る

八十路坂 人に話せぬこの元氣

応援の親がきばつた演武会

真に受けた今更ジョークとも言えず

教科書に無い生き方が好きになり

香川県 川崎 ひかり

金脈があるから掘ってみたくなる

口封じ効き目たしかな論吉どん

野心みな捨ててゆれてる野の一樹

その時はにっこり出来るケイコする

合掌を解けば個性のある十指

松山市 白石 春嶺

台風の卵 雨で羽根を付け

暑かろう水子地藏の飴が溶け

永谷園の茶漬に飽きる妻の留守

廃屋の木かけて瘦せた梅が熟れ

じつくりと睨む庭師の石の位置

松山市 宮尾 みのり

千客万来 少し片付け下手な家

郷土料理そなたたいそなお惣菜

OLの花と言われたのは昔

ことぶき退社という花道で幕を引く

初物のひと口のせる皿を選び

今治市 越智 一水

こころの杖に好きなことばをひとつ持ち

百姓をしていて老妻パンを食い

孫膝に仏を守る灯を点し

海上のアルプスなるか青海島

錦帯橋 歴史たたえられたはずまい

高知県 赤川 菊野

淋しさと背中合せのこの自由

ハチキンも鳴子のリズムに浮かれだし

妻の吹く笛もだんだん細くなり

自分史に近道などは書いてない

六十路坂まだ一灯を追いにつけ

西条市 片上 明水

派手好きな母でまだまだ要らぬ杖

何処からか蝶が来て止む春の雨

地味と派手 気にせず済んだ京の旅

一枚ずつ春物を買う老夫婦

先着の列にわたしと妻が居る

下関市 石川 侃流洞

八十歳へ母の健在言う自慢

老人ホームへ母を頼んで気が重い

母の日へ父には付録賜りもの

神様もお齡 見落しされた絵馬

その場しのぎの句でも皆勤する句会

広島市 森田 文

おそく来て短い春がかけ抜ける

さみしくて詩にこころを重ねて見

檜の枕 森のはなしで眠らせぬ

手を出せばそこに手がある絆かな

コーラスへハミングだけの出席す

竹原市 時 広 一 路

一つ笑うと次の笑いが待っている

生命線くつきりビール喉に沁む

草一本抜いてあげましょ無人駅

なすことの無い一日よ川流る

男女同権さあて貴方のお宅では

柳井市 弘 津 柳 慶

味方から意外な奴が足を取り

連休を邪教終日こき使い

半壊の瓦礫を踏んで踏み歩き

どの駅も春 春の人集め

父さんの酒に一家のまあるい輪

竹原市 森 井 菁 居

意のままに事が運んで目が覚める

荒削りながら若さで勝っている

前向いて歩け歩けと風光る

欲張ってみるか退職後のプラン

病院で同級生と遇う五十路

竹原市 石 原 淑 子

かたぶつを育てた母はジョーク好き

一笑に付せない事の多すぎて

母の日や夫からもらったアレセント

嵐さえ味方につけて生きる術

大切に笑い袋と好奇心

廿日市市 林 野 甞 光

余念なく明日の仏に手を合わす

二の足は踏まぬぞそれをもう忘れ

目が眩むほどの器量にまだ会えぬ

てのひらでクルミ転がしまだ色気

さみだれに春のコントを持ち歩く

広島県 田 村 新 造

数珠つなぎ戦友がやられていた街道(興安嶺逃亡記)

興安嶺夜が淋しい九人連れ

手を振って別れた匪賊元仲間

匪賊にでもなるか兵士のなれの果て

大正の男の美学戦友自決

倉敷市 田 辺 灸 六

五十年歩いて戦後まだ残り

憂鬱な顔は出来ないピエロ役

貧乏神に好かれて離れない男

再出発 悲しい過去は引きずらぬ

老ゆるほど人の情けが身に沁みる

倉敷市 小 野 克 枝

本心をさらすと温い風に逢う

皺の顔集め少女の瞳に戻り

男児誕生 二度といくさはしてならず

やりくりの苦労は知らぬ風の人

落日の微笑 命をありがたう

岡山県 矢内 寿恵子

何を捨て何を拾うた世紀末
かなしみを刻んで時を越えていく

千姫のほむらが燃える花霞

灯を問うて命を問うて風挽歌

背骨のきしみは永年勤続賞

松江市 舟木 与根一

成金の田圃の苗は伸び悩み

均等法からは外れた力瘤

跡継を如何にとやせん段々田

晩酌が入ると語りべが愚痴る

指名手配まだ日本は広がった

松江市 柳楽 鶴丸

奥の細道を川柳の目で歩く

美人薄命 神話になりそうだ

上手下手よりも好きだからうたう

六十路のリズム マイペースで困る

弱いようでもとても強い妻がいる

出雲市 園山 多賀子

不本意に問わず語りが多くなる

武者人形這い這いも出来初節句

それぞれの心眼で見る抽象画

年輪と言う雅語もある皺が増え

やさしさに飢えないように花の種

出雲市 吉岡 きみえ

五月晴れとろり夢みるひるの月

トンネルを出れば救いの手もあろう

笹舟にわたしの罪はのせきらぬ

兄弟の気性 兎と亀に似る

暗い話よそうよ花は真つ盛り

出雲市 岸 桂子

雨止んで昨日が残る水たまり

ある時の仕種 父に似 母に似る

米作るプロ一人減り二人減り

当てにせぬ子からときどき来る浮輪

火を飲んだ経験がある口車

出雲市 竹治 ちかし

父がしたようなくしゃみをして目覚め

善人の歩幅を真似てつんのめる

少し彩付けると増して見える白

酒を飲むことも務めとする暮らし

無で生まれ無で還るのに欲がある

出雲市 久谷 まこと

明日の夢 今日の子報に混ぜてある

嘘少しまぜるとみんな寄って来る

クロスする意見親子の学歴差

育児書をはみ出している元氣な児

親の丈 追いつけ追い越せ不肖の子

出雲市 尼 れいじ

雷がオドロオドロと寝れぬ夜
厨房があくびしている共稼ぎ

ゴッホの絵 飾りまだまだ燃えてます
ピクチャーレールに靴下二足干してある

良い友を見つけて暮れる花いちもんめ

島根県 小 砂 白 汀

竹藪に濾された風のさわやかさ
雑然と整理のできている書齋

ほととぎす葉わさび竹の子風薫る
生きんかな薫る五月のあるかぎり

虫干しのつもり菜園打ち返し

島根県 藤 原 鈴 江

傷心を仏にすがり立ちあがり
歳重ね少し命が惜しくなり

さんさんと輝く春日明るすぎ
目ざめれば今日の命のすばらしさ

日々多忙遊びも多忙生きんかな

島根県 佐々木 鳳 笙

茫洋の海から届く亡父の唄
ふと亡母の眉を思わす観世音

明治には仕え昭和の嫁に媚び
憎しみが隣り合わせて潜む愛

一夜明けて私のいない句を捨てる

島根県 堀 江 正 朗

人の道 光なくしてから分かり
戦盲の飲み過ぎ妻のせいにして

胸張った意見も妻がそばに居て
妻伊川よ人の流れは変っても

相づちの打てない話題 笑顔して

島根県 堀 江 芳 子

反論をすると生き生きする夫よ
散髪を手柄のようにもどつて来

点滴の長さ考えてる長さ
小言のみこんだ笑顔はゆがむかな

わびしさが走って後を言いそびれ

島根県 西 村 黙 光

お点前へひときわ映える青畳
家が建ちやつと己を取り戻す

大の字で天井仰ぐありがたさ
乾杯へ新築音頭取らされる

情報の渦に真実見失う

島根県 両 川 洋 々

癌告知されたが負ける俺じゃない
被災地の蟬もひっそり殻を脱ぐ

オウム教に殉じてお前散るのかい
酒だ女だ僕の人生喜劇だね

ハルマゲドンそれまで俺は酒を飲む

総会を動かす議案書も作る

真剣な姿を誰も見てくれぬ

マンションで飼えない犬の写真買う

次男坊恋した娘連れて来た

好感度 基本にすれば二重丸

機械では出来ぬ卵が安過ぎる

城跡の桜カラオケ聞き飽きた

ばんやりとしてたら二疋また肥えた

人生のゴール テープはまだ見えぬ

コップ酒 桃色話よくはずむ

不用心ですが裏口開けておく

ペットです用心棒になりません

せっかいが過ぎて火の粉をまた浴びる

めん鶏にせかせかされて落着けぬ

幸運をつかむ両手はきれいです

鳥取市 西原 艶子
岩原 喬水
倉吉市 米田 幸子

ふじ寺のふじにゆらゆら藤娘

隣は田圃 五月の音が活発だ

寿命とは言いたくないよテレサ・テン

冗談の一つも言って下さいな

パチンコのネオンに我が家 薄明かり

米子市 金山 夕子

回り舞台順番通りにはゆかぬ

群のなかのすばしこいのを標的に

走り続けどこまでいくか鬼の面

群はなれ孤独に生きる父の影

旅帰り変らぬ街に溶けこんで

掌が広くて皆を包みこむ

やり直した数が額に刻まれる

女とてまさかの時の意地はある

親ゆずりの脳を磨いているところ

群衆に俺に似たのが一人いた

天災も人災も見て桜散る

大将が居なくて雑魚が群れている

順番が来たからゆっくり立ち上がる

被災地を見てから夜も眠れない

激励をしながら新居見て帰る

米子市 青戸 田鶴
米子市 田中 亜弥
米子市 菅井 とも子
米子市 川上 より子

頬擦ればルリ草の青冴えわたる

良き人の家族まるごと絵に入れる

母なきのちの友があじさい花便り

忘れな草 娘はカギ置いて嫁していた

高レベル廃棄物 議事堂地下へ如何かと

寒いので小さい鈴の群に

米子市 野坂 なみ

群を出てときに自分の顔でいる

ちりぬるを風の手紙に札を言う

小机に座ればそこが書齋です

フィクションがもう現実を越えてゆく

鳥取市 小谷 美ツ千

死ぬほどの想いを風よ忘れたか

切っ先はいつも私に向けられる

淋しさに慣れ頬杖はもうつかぬ

風に吹かれて指の隙間で嘆くなり

雨有情 男に気持ちかけすぎる

鳥取県 土橋 螢

戦争を知らぬおとこの暇つぶし

あの雲のむこうへ散った戦友がいる

米一俵 肩に担いだことがある

毎日が大安吉日にて候

墨で暈した背景に住んでいる

鳥取県 松下 たつみ

情熱を通せばとおすほどひとり

悟ったか闇をいとしいものとする

演技派の女の涙すぐかわき

手に土がついて三度の飯うまい

少年の夢になかった敗北感

バンガロー静かな浜を燃えさせる

鳥取県 土橋 睦子

母さんの好きな鬼灯花をつけ

笑いこらげて満開の花が散る

鼻柱の強い男も恐妻家

朝寝坊 卵をのんで走りだす

鳥取県 田村 きみ子

食へ過ぎと言う名がついて医者通い

幸せな毎日なのに欲を言う

夏帽子二つも買って海山に

心地よい風だ白状したくなる

嘘のない夫婦だったと今思う

鳥取県 土橋 はるお

ブルドーザーに乗ってけじめをつけに来た

骨壺を提げてけじめをつけにゆく

故郷の山が花粉を出している

牡丹園で一服五〇〇円のお茶

愛という字なら今すぐでも書ける

鳥取県 上田 俊路

最初から無理と思っていた仲だ

復興の風に弱者の痛み聞く

清貧が光れば無能許される

深刻な顔で演じている喜劇

老いた身にどのハードルも高すぎる

鳥取県 鈴木公弘

挑発にのる気は持たぬかたつむり

翔び過ぎてローンの海に沈みそつ

湯舟から聞こえる母の子守り唄

志だけは遙かな山にあり

星雲の光を軽くみるなかれ

和歌山市 池永正雄

咲いてくれよとポストの口へ蒔いてくる

ああ春はもう過ぎたのか冷奴

ぐい呑は嬉しい酒に決めている

背のうは連想しないランドセル

コーヒーよりタイムを買いに喫茶店

和歌山市 山田高夫

観念の目を閉じさせる無影灯

うしろ指にらみ返してでも生きる

飯の世に正解なんて何もない

父と子の辞書に時代のずれがある

方便の嘘で病身支えられ

和歌山市 桜井千秀

ズウズウしさを積極的と美化させる

引き際が敏速勝った気がしない

嘘ついた覚えのない人手を挙げて

ハタを織る音が聞こえるダムの底

いつかなくした万年筆にまだ未練

和歌山市 福本英子

異変つづきへ遺言書を急かされる

淋しさをお聴き下さい阿弥陀さま

客寄せの貝蒔き終えて加太暮れる

鳴き砂を値切って買ってから鳴かぬ

その奥を聞かれ戸惑う付け焼き刃

和歌山市 堀端三男

四 五日はあたたため本音書き送る

連休で帰省した孫 家に居ず

信用されて何時も貧乏くじを引く

時間厳守して世話人さんに気を揉ませ

吉宗ブーム 今 紀州路は燃えている

和歌山市 垂井千寿子

夕陽にも負けぬ余生の彩を選る

背が伸びた嬉しさもある親離れ

自分史に懺悔ばかりを書き綴る

太陽の魔術知ってる青リング

漬物石に先祖の重さ生きている

和歌山市 細川稚代

人去つてしだれ桜のみだれよう

胸線の隆起眩しい友という

追憶の花びらが浮く久米田池

春蘭が芽ぶいて疑惑とけました

ときめきを忘れずにいる帽子

和歌山市 岩本 美智子

銅鐸を揺する弥生の禱りきく(紀伊風土記の丘・資料館にて 3句)

馬冑の目 哀しく主を求めている

縄綯い機 藁の匂いの祖父がいる

有事いくつも団子になって転げこみ

誤算ごさんひとり乗ってた縄電車

和歌山市 福井 桂香

青葉影オウムオウムで明け暮れる

いつの世も問答無用テロリスト

すずらんにはひとつ覚えの花言葉

オフェリアを浮べる水の蒼々と

春休み孫とシンチャン ドラエモン

和歌山市 榎原 公子

祝い膳 小さい母が重くなる

物理的会話で終る夫婦なり

子供にはないが孫には新種出る

人生とは何かをラーメン吹きながら

宗教を語るコーヒー甘くして

和歌山市 山口 三千子

時刻表なくても終の駅に着く

親の荷を下ろしてからの虚脱感

描いてた老後の夢が崩れだす

定年後こせこせ姑に瓜二つ

終着へ波風立てぬ道標

和歌山県 西口 忠雄

バイトして残るはあんたの不満だけ

蹴飛ばした石に恨みはないけれど

脱ぎ捨てた女 鏡に全部見せ

野に花を摘んだときから好きになり

恋されて猿も恥ずかし顔をする

奈良市 宮口 笛生

薬とも毒とも毒の酒愛す

妹が亡母かと思うぐらい似る

毎日が毎日違う日記帳

老人医療になって毎日病院へ

元気は元気 今も食後に要る薬

奈良市 天正 千梢

よろこぶ事 上手になってつつがなし

湧き水が大地の鼓動ふるいたて

こわいもの知らずあつちこつち蹴つちらし

広葉樹 母なる森を育てあげ

糸柳 青めきました夫を恋い

奈良県 長谷川 春蘭

生きて又一つの節目 苗木市

古眼鏡 拭えど消えぬ春愁か

五子八孫 恙なき日を送る幸

花言葉無くてわびしい水中花

地虫出し日より此の世の色に逢う

奈良県 田中 紀美代

毒ガスのテレビを消して勤行す

あんな所で作句したとは言いにくい

どこからか太古の風吹く石舞台

家計簿に反省点が多すぎる

失敗は墓に二人の名を刻み

神戸市 山口 美穂

活断層の上へも一度住む決意

ひとり歩きはじめた夢を追っかける

ここまでおいでと夢がわたしを待っている

萌えるみどりに頑張るエネルギーもらう

険には震災前の家がある

尼崎市 田中 薫

逢わざればおんなの電話湿りたる

迷信のようにおんなは鶴を折る

春の星 二つながらに落ちゆきぬ

なつかしき文字現わるる歌集の間

哀れにも蜻蛉生まるる泉のほとり

伊丹市 山崎 君子

和菓子屋にあやめの暖簾ちまき買う

下ろされてふうつと風吐く鯉のぼり

雨あがりつつじ明るい電車みち

花いっぱいここにも温み警察署

ちぎり絵の山 寂しくて虹を描く

西宮市 門谷 たず子

空地ばかりで街は他人の貌をする

夫にだけ飲ます靈芝をコトコトと

アネモネが精一パイ咲くこれも別れか

余情たち切り庭の緑に目を瞑る

思いなおせば敵も味方に見えてくる

芦屋市 黒田 能子

今日を今日をと丁寧生きていく

五千人の死 一人一人の死 あり

主のない屋根に小猫が日なたぼこ

いつもの道いつもの家がないのです

初めての一步 柔らかい土を踏む

加古川市 吐田 公一

再職の心を締める靴の紐

初孫に天まで届け鯉のぼり

渡米する家内の無事が気にかかり

自分より残す夫の方を気に

貴賤ないはずの仕事にある僻み

姫路市 大原 葉香

ストップウォッチ実直過ぎて嫌われる

古時計 一家支える音で鳴り

人生の峠 五十路の下り坂

五十回忌 絆が一つ消えてゆく

絵の具皿 芸術の名に溺れてる

京都市 都倉求芽

片隅でひとを嫌いな草もある
海の風 世界はひとつ陽もひとつ
黒ぐろと闇と対峙の寺の門
あの時はあの時 今日とは違う酒
芝みどり孫の足どりやわらかい

京都市 山海友照

親友のような嫁との糸でんわ
かあさんのミニがいるほど孫が似る
磐石のゆらり揺れても夫婦愛
オウム潰 健全ニュース何時くるの
袈裟を着て見舞い嫌われ法主さま

大阪市 川端一步

鉛筆をコロコロまわしのむ新茶
復興のくじに小さい欲が出る
ご機嫌で埃をはたく菜根譚
六十でマンガ入門孫先生
地下鉄は危険手当のいる職場

大阪市 井上白峰

注目の的で仮面がはずせない
策一つ秘めて追い風待っている
頑張れと言うが援助はしてくれず
緊張の糸が弛んだ終電車
老いてまだ背伸びしている影法師

大阪市 榎本落児

老妻と歩く動物園の午後
観覧車 老妻よ一度は乗ってみろ
夕焼けにトランペットの稚拙な音
帽子 夏 若い匂がむせかえる
掛時計 大内宿によく似合う

大阪市 小糸昭子

花冷えにするりと呼んだ風邪の神
色々な声が聞こえる処方箋
愛ばかり欲しがっている未成熟
レモンかじる新鮮な歯が眩し
地震後の屋根どしや降りに堪えている

大阪市 河井庸佑

知識あり知恵の無いのが惜しまれる
使い方ひとつで金にこんな価値
借りものの知恵と見抜いて問い詰める
慌てずに善は急げと諭す父
根回しへ黒衣の努力生きてくる

大阪市 津守柳伸

聞き洩らす悔い昭和史の幾山河
川床に引かれ貴船のお大尽
紫陽花と競う大原 蛇の目傘
さくらんば竜飛崎の遅い春
旅三日 少女に戻すさくらんば

大阪市 大塚節子

旅帰りまずうまい茶とおばんざい
花も散り つつじの土手の静かなり

言いたいことは明日言おうと決めて出る

七光り頼らず育て三代目

世情騒然 花うつろうて季移る

大阪市 板東倫子

わが家には偏差値お化け居ぬ安堵

上九一色の弥勒菩薩はよく喋る

貴婦人のように減んだニホントキ

大阪にパンパカパーンとノック知事

低姿勢覚え二代目らしくなる

大阪市 本間満津子

気楽さも風すこし吹く一人旅

生きることの酷さ食べなければならず

びったりしない ちょっと違った物さしで

雨降ればありがたく晴れの日は嬉し

事件解明ただ祈るのみ なにに

大阪市 奥田良子

紫陽花のあしたの色をたのしみに

公園でいつも本読む老紳士

寅さんに会える気がする島めぐり

屋台からおけさきこえる十三夜

嫁ぐ子とだまって見てるお月さん

堺市 柿花紀美女

抽選で明暗きまる恐しさ
朝刊の見出しだけ読む朝の主婦

自分だけ満足してる句を温め

父の齡越えて無口な愛わかり

世の中はどうあれ大入りパチンコ屋

堺市 近藤豊子

藤棚の花より蟻に兎は見惚れ

藤棚に花垂れるころ予備校へ

藤の花カメラの位置の定まらず

飛火野の風に歌あり藤の花

近づけばももいろいろもあり藤の花

高石市 浅野房子

突然に誘われ金の工面する

途中下車ひとり旅なら許される

ペンペン草眺め不遇をかこっている

オウムに始まりオウムに終る立話

他人様の火の粉を被ることはない

豊中市 田中正坊

惜しまれるうちに退く硯箱

美しい名でうとましき花粉症

時流にはのれぬ男のハーモニカ

あいまいな日本何でも後手を引く

以下略の名前の中にボクがいる

豊中市 三宅 つえ子

通り抜け父の写真も持つて行く

「夕暮」と呼ばれて淋し年の花

通り抜けてこの虚しさは何だろう

仙人掌が父の姿に咲いている

見つめられ舞台の上の車椅子

豊中市 井上直次

改装後なじみの客にうとまれる

悪友の集合ラッパ鳴ってるぞ

荒波の疲れをいやす島の湾

紙コップで飲んでも酔いのまわる酒

ブルジョアに生れていたらなど思う

豊中市 滝北博史

夕コ焼を買って帰った投票日

さえぬ春 東毒ガス 西地震

口紅も目立たぬ色で花を見る

ぼくの好きな女と妻が立ち話

住んでます活断層とわかってても

池田市 金崎峰子

花咲けど今年静かな五月山(震災後)

どこからも見えた塔 今さがす古都

花咲く野 単線で行く小さい旅

ちやほやもいや叱られるのも辛い

山のない話の何と長いこと

吹田市 井上照子

生きる力 句と師の顔ははなさない

くもりガラス真実見えぬ方がいい

雨の朝 緑にたまる自然の美

先生好き孫の活気に心浮く

小指出し契った昔 今日捨てる

茨木市 堀良江

花もよし葉もまたよろし散歩道

母の国とうに忘れたはなみずき

その色で子猫の父さんすぐわかり

Gパンが叱られている立て膝で

エメラルド ルビーよ雨のばらの園

茨木市 藤井正雄

偉そうに取っ手がついた紙コップ

単身赴任家族が客の顔で来る

独り言頭の中の詰め将棋

企みがあるのか辛いライスカレー

下町の風情が映る水溜まり

守口市 結城君子

上気した孫の筍飯もう一杯

山女ツリ赤鬼になり息子が帰る

それとなく麦酒の好み聞いておく

四迷忌や棚に忘れし書二冊

舟虫のそばで一句も浮ばざり

寝屋川市 堀江光子

花の山 花人を呼び人人を呼ぶ

病室のしばらく開く花の窓

山頂に城いただいて城下町

塔見えて客一斉に降り支度

美しい炎の果てのかるい灰

寝屋川市 柴田英壬子

ジューンブライドおぼろに遠き角かくし

五月の風迂闊とびらの奥の愛

葉牡丹のたね採って胸熱くなる

柏餅と新茶そなえて心満つ

柱時計 従者の音で鳴っている

寝屋川市 江口度

ウズうず渦 雲雀の視野が欲しくなる

鳩時計 火薬とびだす日もあろう

巣があったあったと燕 宙返り

ふし穴で鉢合わせした好奇心

よく見れば羽根の生える青ポスト

枚方市 八田敏

風通る窓はわが家よ旅帰り

特に言うこともないがとお説教

闇くもに駆けた人生 先も見え

器用貧乏 定年後には見直され

子供より犬が素直について来る

枚方市 海老池 洋

珍客の話 昭和をさかのぼり

きらきらきらざらざらざらと夏の海

挨拶の長さにひしゃぐ紙コップ

孫からの切手も描いてあるハガキ

なんだかんだと妻の好みに合わせされ

交野市 福崎しげお

荒波もすいすいくらげ骨が無い

外食で妻の手料理ひとつ増え

レントゲン宇宙遊泳するドック

老人会 昭和が隅で飲んでいる

ボランティア空襲体験役に立ち

東大阪市 森下愛論

カウンター酒が溢れて嘘流れ

自尊心いのちの幅を狭くする

薫風に偽善の顔を撫でられる

煩惱に脅えて孤独波を立て

長生きの疲れを矯めて香を炊く

羽曳野市 榎本吐来

お礼言うことを知ってた幼顔

いとおしむ余命を図る深夜の灯

先生と妻持ち上げている歯科医

人肌を吟味している宵の燭

子を思う父の寡黙が子に見えず

羽曳野市 森松まつお

ラッシュにも耐えて女はようしゃべる
オウムしか映らへんのかこのテレビ
いやな事ばかり思い出す日だな
暑いことないか五月の皮ジャンパー
労働歌 不屈の魂こめてある

藤井寺市 福元みのる

山鳩が時にたずねて来るわが家
夢見ても覚めて忘れる齡となり
往年の名優が逝く春遙か
水辺に映る塔を揺らして鴨の列
一服に片手で紫煙払いつつ

八尾市 吉村一風

しじみ汁すすってリズムとりもどす
小さい幸 今夜も酒の味がいい
妻の留守ちゃんと休肝日を破り
旧街道歩くと小さい歴史みえ
愛想ない医者だがファン多いらし

八尾市 宮崎シマ子

父の日も父思う娘に叱られて
父に贈る煙草吸い過ぎ言いながら
矢車の音よ水車も呼応して
乗せてもらう孫の車に投資する
四人姉妹 母のいとこ悪いとこ

八尾市 山下美津留

一人では遊べぬ友に呼び出され
本心を窺うている目に出合う
重なつたなあと爺ちゃん馬にされ
友に医者歩け歩けと犬をくれ
弁解はしない男の伸直り

岸和田市 福浦勝晴

穏やかな軟便の日々は好日
朝シャンの娘スイスイ肩で風
ステージに上がると老優シャンと立ち
旦那さんはジュースで嫁さん大ジョッキ
がれきから這い出てゴクゴク生きる水

岸和田市 寺田甚一

連休の渋滞ゴロ寝して見てる
運転中用もないのに電話する
金のいる話は前の席が空き
まだ若いもう年だとも折にふれ
赤ちゃんの笑顔 天使が舞い降りる

岸和田市 古野ひで

清水焼 唯それだけの皿を買い
おにぎりのゴマにも好みの白と黒
おたがいにまあまあですと笑う古い
さよならも言わずに友はお浄土へ
春の陽にときめき蝶がからみあい

岸和田市 原 さよ子

古希きても若く見せたい帽子選る
教え子を自慢しながら古希になる

捻子巻けば動く自慢の腕時計

老夫婦 木もれ陽のような愛を抱く

悠然と牛が草食む五月晴れ

岸和田市 高須賀 金太

諺に地震 円高株サリン

十重二十重 女性に囲まれてみたい

書店出てひとの流れに身をまかせ

鉛筆がすらすら明日も晴れそうだ

莫山の書には反骨心がある

岸和田市 三輪 通彦

均等法以後は父権も曲り角

糟糠の妻をねぎらう小旅行

聴診器に鼓動高まる不摂生

無党派層増え政党も曲り角

狭い道塞ぐ車のホームレス

和泉市 西岡 洛醉

三寒四温 丸い地球の自転する

夫婦橋 今日嵐で暮れました

善男と善女へ明日は晴だろう

太陽を背に少年の無垢駆ける

六十七歳 駒ゆるゆると回そうよ

和泉市 岡 井 やすお

憲法を変える気も無くただ議論

人次第タレントだってよろし知事

メーデーが果てて建売りに帰る

こどもの日メダカの学校開校す

日本人このままじゃ朱鷺こうのと

富田林市 松本 今日子

今のうち残しておこうありがと

野心ある指が天を指している

春の雲 橋の向うはまだ知らぬ

合掌をするたび母が遠ざかる

母の日は母の忌日なり白香る

富田林市 片岡 智恵子

燃えつきた父風になる土になる

「トキ」逝つて鶉色死語になつてゆく

相槌をうって届いたのは造花

幸せの歩幅へ見えぬ水たまり

若い日の涙は糧になつて咲く

河内長野市 井上 喜醉

人生の照る日曇る日あつけない

水平線 背負う夕日が温かい

明日まで待つてはくれぬ高気圧

酔わせたら不満をぼつり喋りだす

何事も歳と相談して決める

西宮市 西口 いわゑ

夢でないれんげ畑の中に竹つ
白ぼたんさえも悩みを隠せない
上を向いて歩きたい日が続くなり
叫んでも天は微動もしてくれぬ

西宮市 奥田 みつ子

本棚の隅に春愁うづくまる
ブライドというもののあり針葉樹
地震以後 購いたいものが何もない
無念の亡友よ手向けた蘭が見えますか

豊中市 吉田 あずき

繚乱の花のその後は考えず
木の芽和えこの相性はキミとボク
約束に序列があつて繁忙期
叫ぶかに見えて善人アクビする

吹田市 山本 希久子

旅へいざなう花水木かきつばた
席譲るとき少年の糸切歯
交響曲五番を聴いている命
木綿糸の太さを紡ぐ夫婦なり

岸和田市 島崎 富志子

なまけ心へ牽制球が飛んでくる
逆転思考 少し光が見えてきた
余命とはこんな事かと寝ころんで
カナリアが人の命を預かつて

先輩の芸を切り売りする輩

静岡市 安本 晃 授

退職後 背骨を抜いて丸く住む

嫁の座から主婦になつての窓明かり

夏の絵に思慕の風入れ喪が明ける

鳥取県 谷口 次 男

わが家には大事な話も金もない

大切にされ過ぎ嫁にカビが生え

弱虫で叩かれ損のB君だ

玉手箱 訳の分からぬ煙吐く

米子市 林 瑞 枝

叔父の遺した絵がペルーの田舎みち

白衣観音に守られ咲いた座禪草

にんげんが神になろうとした蟹気楼

珍しい野鳥が其処にお静かに

米子市 白根 ふ み

ボタン園つくろうものは何もない

霊場でシャッターの音だけのこる

橋が朽ちてもふる里が際やかに

藤房を諸手に載せていとおしむ

鳥取県 新家 完 司

さびしくてころろところろさわりっこ

まむし酒ごときでいのち継ぎ足せず

便箋を変えてみたとおんなじ字

言うだけのこと言い切つた窓閉まる

鳥取県 西浦小 鹿
傷ついた君に気づいた風が吹く
責任という絆組を守る男

天秤で地球と君を測り出す
てのひらで独楽を回しているひとり

鳥取県 太田幸枝

残された余白一步を踏みしめて

病院もお寺も近い町に住む

ピンク着る嬉しい色と知っている

一日がジョークで終る旅の宿

鳥取県 ささきやえ

話すこと分かるか花が咲いてくる

花と話す一日長い陽が沈む

花作り止めたら取り得ないのです

勿体ない山のたきぎがくされだす

島根県 松本文子

男たちの後ろに花が咲いている

黒部の山 黒部の水をのんでくる

おぼろ月夜 小鳥の餌を買いにゆく

それでも生きているから今日の水をのむ

今治市 矢野佳雲

母さんにストーンと落ちる子の気持

ロボットにも好きな彼女がいるらしい

蚊取り線香のように巻けない蛇がいる

別れた人に子供背負うて会いにゆく

今治市 野村京子
葉桜へ失うものが多くなる
どうしても思い切れない傘の滴

葱坊主だてに立ってるわけでない
紅おとしやはり逢ってはならぬひと

熊本市 永田俊子

芥子の実の青さを育てているサタン

正座する父にユーモア通じない

わたしから何か奪って引いた波

七光りの傘を重いと捨てて発つ

弘前市 一戸ツネ

誕生日あなたひとりの感謝状

てのひらで運も不運も雑魚寝する

写経百巻へドロの濾過がままならぬ

南無南無とむだ芽つみとる花ばさみ

弘前市 中山雅城

おじいちゃん桜の歌が好きみたい

日陰でも無心に咲いた桜の木

会う時も別れるときも桜咲く

ワッペンにさくからも咲いた幼稚園

弘前市 岡本花匠

後光ひかる花たんぼぼは野の仏

人びとの出遇い温まる風の町

同級会 五十年目の減らず口

梅雨明けを待てぬ男女のサーフィン

十和田市 阿部 進

娘の縁談あまりよすぎて考える

好奇心まだピッカピカ古希の母

手抜きして育てた子だが親思い

何食わぬ顔で聞いている地獄耳

八戸市 島田 昭治

死んだ気になればと幾度思えども

顔に似ずぶつきらぼうの返事する

勘違いくすくす独り笑つてる

一点を見つめポケットといるのが好き

青森県 諏訪 柳々

札束でたたかれた皮膚やわになる

過疎の地にどんと居座る鬼ひとで

等高線 均して個性摘んでいく

朝一番「二万句集」を写経する

仙台市 川村 映輝

シルバースhirtずばり「老人席」がよい

サリン事件日記帳に赤で書く

この最中 入信したという女

一人ではデパート巡りも味気ない

東京都 山口 新子

ハッピーバースデーこの一行を抱きしめる

実直な父に疾風つきまとう

疲労困憊 駅の支柱にもたれおり

花便り娘早速蝶になり

富士宮市 渥美 弧秀

真実を語る勇気がまた鈍る

拝金の世情に疎く生きる自負

水も刻も流れる中を老いふたり

孫囲み連弾を聴く家庭の日

富山市 酒井 輝

行き先は訊かず夫を送り出す

昇るより辛い急坂かけ降りる

枯れるほど草は激しく燃え尽きる

児の瞳には晒したくない踊り食い

羽咋市 三宅 ろ亭

頼もしさ総てを肚に収める気

一方だけ通るみちだと思ひ込む

あご一つしやくればというのは昔

ウグイスとツバメの里で息のばす

唐津市 浜本 ちよ

何処までもなだらかな丘 久住

露天風呂 松と二人で星眺め

若くない女優やたらに脱いで見せ

村とは名のみビルに舗装路パチンコ屋

福岡県 横地 東川

太陽は悠久 地球は人が食う

シルバース席 大正は長幼序がありし

ちよつとの差 四位はやっぱり四位です

火山灰 旅の話の種なるも

余り物さらえて八十まだ達者
香川県 山地 マツエ

寝たきりの背を拭く夫の手が温い
除幕して春を先取りしてる句碑
思いつきり空を飛ばたいカタツムリ

香川県 新川 マサエ

紅引いて女を生きる八十路まで

亀の歩に旗押し立てて蟻も行く

太鼓判 押してそれから命がけ

にぎにぎし口数増えて孫の春

高知県 北川 竹 萌

ふるさとに茶摘み一日の八十夫婦

揉みあげて新茶楽しむ夕の膳

トンネルを出ると乾いた白い道

傘さして牡丹四日のピンク色

鳥取市 前田 一 枝

雪解けも大河流れる夢がある

あの顔でふところ刀持って居る

捨てに来て拾って帰る粗大ゴミ

垣根越し見越しの松も腰が折れ

鳥取市 春 木 圭 一郎

うちのポチ俺に負けると見ていない

飼犬が小言に慣れて動かない

あいさつの仕方 幼児に教えられ

胃カメラの結果オーケーさあ飲むぞ

郊外の春を気ままに子らが描く
鳥取市 美田 旋 風

暴かれるオウムが視聴率上げる
肩書が消えて命が惜しくなる
いち早く春を知らせたこぼれ種

倉吉市 最上 和 枝

母の背に生きたドラマが書いてある

とじ蓋がときどき軋む夫婦箸

うどの芽へ詫びて春の香いだいた

仏壇と小さな話 旅支度

倉吉市 淡路 ゆり子

背信のころは晴れぬ菜種梅雨

二人三脚 縛った足が揃わない

傷口を癒してくれる春の街

幾星霜 無傷のままの夫婦茶碗

倉吉市 野口 節 子

ランドセル意地も個性もつめてある

かくしゃくと親父太鼓はまだ確か

叩かれた痛さを愛とやっとなる

神様を敵に回してサリン播く

倉吉市 野中 御 前

その時は落ちない口紅つけて行く

率直に白黒つけて味方減る

誰にでも優しい主人で困るんです

喋らずにいると病気かといわれ

折り返しからは気儘に袖だたみ
だまし舟に揺れた心が落ちつかぬ
底の方から裏切りだした泥の船
お荷物にならぬ長生き願う趣味

米子市

石垣花子

二人三脚 揺れたあの日もなつかしい
病んだのか音も匂もない椿
立って見よ風も波にも乗ってゆけ
額から流れる汗はあの日から

米子市

茂理高代

書き順を忘れて虹が描けない
川岸に群れて雑草隙がない
巢立つ子へ父の胸板みせて置く
捨ててから壺の値打ちを聞かされた

米子市

寺沢みど里

なにもかも夢で候 春嵐
高い樹で神に打明け話する
大吉のみくじは みんなためである
新芽達きそい合うから美しい

米子市

中井ゆき

何よりも度量が広い娘を託す
心が美しい道連れになろう
古い手帳とよも山話して更ける
ここからはゆっくり歩こうおぼろ月

米子市

光井玲子

ねむる時も流れ続ける河を抱く
ぶつかって曲りくねって来た河だ
泣き笑いみんな喜劇にして逝こう
あれこれを河と話すときりが無い

鳥取県

乾喜与志

泡風呂にひたり戦渦の話など
輪になって隣のひとの肩たたく
カーブミラー頼り卒寿の坂をゆく
粗大芥などと嫌われても生命

鳥取県

幸家單車

幸せと不幸 同時にやって来る
生きて来た証を刻む石の塔
はぐれ鳥 群れを求めて海渡る
順番はどうあれ俺は先に逝く

鳥取県

羽津川公乃

小豆蒔く耳に驚惜しめない
ご破算にしたい喜劇が目白押し
牛乳よりも酒の効力信じてる
足腰の痛み減量 強いられる

鳥取県

石尾かつ乃

今年また稲だ水だと田をまわり
巢立つ日のときめき彼を待つように
八十八夜過ぎても居間にある炬燵
二人三脚 余生のいのちかばい合い

米子市

木村富美子

名曲の余韻さわやか胃を洗う

鳥取県 黒田くに子

一樹一木 深呼吸してますみどり

時代物 見る爺ちゃんはさわやかだ

つまずきから覚めると生きる絵に出合ふ

鳥取県 林 露 杖

三代の婦系 蠶に鯉幟

自我育つ孫 頼もしく焦れつたく

妊婦服 颯爽として青嵐

この町にオウムが来たらどうしよう

鳥取県 津村 八重子

亡き母の思い出たぐる糸車

星影のワルツは遠い過去をよぶ

うき沈み七度 人は人となり

英雄を気取って孫の紙かぶと

鳥取県 石谷 美恵子

もう無理な高いヒールを捨てきれぬ

砂浜へ異郷のくらし流れ着く

ゆつたりと産湯へ浮いて大物だ

耳よりな話ただではあかさされぬ

鳥取県 西川 和子

ちくちくと群に小さい棘がある

窮屈もこの世の行と言いきかず

時どきは光ってくれる石がある

選ばれて高いところから物を言う

而立かな婚家に馴染む娘の野良着

出雲市 伊藤 寿美

端数のある義援金にある温味

時効にはならぬ悔いあり訃報聞く

失われし神戸よ細雪を読む

出雲市 小白金 房子

夢ばかり抱く女の長い爪

花の嵩ふえて仏間の灯があかい

母の日は仏間の亡姑へお赤飯

茶畑の緑 目ざめる宿浴衣

出雲市 石倉 芙佐子

人形の髪は火となり渦となる

紫陽花に聞かれてしまう一人言

竹藪の吾が家が好きで糊を煮る

山吹色の服を着ようか雨の辯

出雲市 板垣 夢 醉

チンドン屋 化粧落せば暗い顔

熱燗で待つ妻もなしおでんの灯

無駄使いするなと余震来り脅す

金のいる話が遠慮なくとおり

出雲市 小玉 満 江

当選へ赤い苺が盛ってある

石畳歩いて神代近くする

甘えびの生まれ故郷は聞かぬこと

ぼたん園 五月を堪能して帰る

カラ元氣 老いのたよりの頑張ろう
岡山市 井上 柳五郎

忘れたと平氣とおせる齡となり
しあわせと老い悟らせた凡の日々
連休はチャンネル権の俺にない

岡山市 時末 一 灯

跛行してゆつくり自分に会いにゆく

人間は強くて弱いそこが好き
甦れ萌え出ず新芽いま神戸
反論をしかけたとこで花粉症

笠岡市 松本 忠三

病院へ遊び半分おばあちゃん
与党でも野党も大差はありません
じいちゃんとはあちゃん住めば都です
仲裁の居ない喧嘩をばあさんと

岡山市 荻野 鮫虎狼

乱れ毛のまま熟年のグッドバイ
余韻には失敗ばかり付き纏い
春の音 下駄と靴とを履き違え
友情の握手の裏は判るまい

岡山市 江口 有一朗

目立たぬが小指小指にある役目
多くなく少なくもない指五本
大脳をストッパさせる座禪する
計ること出来ぬ心も持つている

七変化そろそろ倒産かも知れぬ
結婚式 迷い子になったおじいさん
呑むだけのお方で他意はありません
懇ろに監回しになりそうな
岡山市 小林 妻子

あわてまいきつと味方が来てくれる
行く先をきっちり書いた走り書き
生き下手で擱んだ運をにがすまい
退屈な顔見比べて老い二人
岡山市 山本 玉恵

ひい孫へ名前言うてもただ笑顔
満開のツツジ背にして句碑が笑み
夢の夢 叶えてくれた娘の車
生き別れた十国の峠道
岡山市 二宗 吟平

人生へ欠点の皺 溜めて老い
非常時の涙はすぐに流さない
数珠を手に割れ鐘を突く寄付を出す
運不運 玄関ベルを押してゆく
岡山市 岩道 博友

ひと日毎 心の弾む山の彩
悪声で人驚かす懸巢鳴き
好運なダブルタッチで逆転す
真実を言えない義理に泣かされる
岡山市 池田 半仙

ひと日毎 心の弾む山の彩
悪声で人驚かす懸巢鳴き
好運なダブルタッチで逆転す
真実を言えない義理に泣かされる
岡山市 池田 半仙

竹原市 古谷 節夫

円高をまるで敵のように言う
日本の女性と円は強うなり

年上の女性がもてるご時勢で

猫だけは好きになれない子の夫婦

宇部市 平田 実男

建前でしてる拍手のにぶい音

土地に惚れ仕事に惚れて妻に惚れ

熱れ急ぎすぎて傷つく青リンゴ

矢印の通りに行けば土産物

美禰市 安平次 弘道

檜山の途中で道を間違える

マイペースいつかは羽根が生えて飛び

金のいる話 明日に出来ないか

来し方をとわれて気づく句読点

京都府 稲葉 冬葉

葉桜になってひよっこり友が来る

寄せ書きのひとりひとりに恩があり

ふって湧く話半分だとしても

軽い脳震盪で見る世紀末

奈良市 米田 恭昌

一本の紐が絆の鯉家族

晩春の命の電話鳴り止まず

古代人のトイレから見るグルメぶり (ロマンシア藤原京 二句)

昆虫館 孫タランチュラとにらめっこ

生駒市 北山 悟郎

拍手を勝っても負けても浴びている
人望に人が人呼び輪を創る

主よりペットが大事にされている

古墳を一刷毛 大事に掘り広げ

大和郡山市 坊農 柳弘

紫陽花に頬ずりしてる蝸牛

気が利くと言われるうちのお節介

指きりの愛は二人のやじろべえ

整形美人その娘に罪はありません

大和高田市 岸本 豊平次

震災後 女性市長も作業服

子等は塾 犬の散歩の遊園地

定退し孫の登校送る朝

トンネルを数えて故里近くなり

天理市 飯田 昇

石一つ蹴って話が脹れ出す

泣きどころ外してやんわり捻子をまく

例えばの話で和尚に裁かれる

目に角を立てると視野もせまくなる

西宮市 秋元 てる

足弱を照らせタンポポ黄金色

ふる里だ母の味噌汁実だくさん

意味のない振舞い老母のあした見え

楠落葉 更地の隅に吹溜まり

西宮市 菊池 トミエ

地震からリズムが狂い戻らない
年寄りに合わぬリズムの家に居る
全線開通 逢えば話も夜が更ける
巢作りにつばめも苦勞震災地

西宮市 山本 義子

手も肥えて生命線がおちくぼむ
つばめさん移転先の字読めるかな
人形の鼻欠けて人臭くなり
美味しくてやすいお餅屋しめたまま

宝塚市 吉田 笑女

路地裏に新地がふえる雨上がり
人形のケース地震で皆壊れ
人形も仮の住居で落着けぬ
人形も人も地震に追い出され

宝塚市 中田 純次

大笑いしおにきよならするお客
晩酌はひそかに老いを祝いつつ
被災地も新茶の香り匂の味
大自然はかりしれない因と縁

川西市 氏林 洋敏

庭に咲く草花さえも妻に聞き
嫁はんに内緒にしてる赤いシャツ
父の背を越えた息子が反抗期
おっぱいを飲んだ記憶がとんとない

川西市 松本 ただし

恐竜のいた時思うオゾン層
救命具付けても無事と限らない
風邪ひくな転ぶな呪文となえつつ
思惑が瓢箪みたいにぶらりんこ

(前月分) 姫路市 中塚 遊峰

幸せな日々気づかず愚痴こぼす
息子の末を案じストレス溜るまま
贈られしあんずの花よ独り居に
年老いておしゃれ品よく藍を着る

姫路市 中塚 遊峰

老いてなお幸せの種時きつづけ
戦争がよかつたなどと言わせない
独り居の余白を満たす詩心
日めくりのことわざ今日の糧とする

姫路市 丁坪 サワ子

天国で卒寿白寿のクラス会
墨染めの衣の下にある虚色
かしわ餅よりもケーキの鐘馗さま
オウム旋風 耳目の奥まで疲れさせ

和歌山市 宮口 克子

水の音 風の音にもうたごころ
どうすればいいの私は そんな時
損得でなくて信義の問題と
カチカチで融通効かんのが買われ

和歌山市 玉置当代
日本の春だ桜も咲いてきた

下積みは長いが花はまだ咲かず
住みやすい方へ寄ってく鳩の群れ
嫉妬する鏝をきれいに洗わねば

和歌山市 北山好笑

ためらいの心にふれる風の音

ぬくい手で包めばいつも花が咲き
気取りともとれる和服の裾さばき

切ってなお余韻の残るいい電話

和歌山市 青枝鉄治

脛かじる男の歌う反戦歌

辛口の批評の裏にある善意

パチンコ屋に精魂つきた顔がある

百選の銘酒に左遷迎えられ

和歌山市 田中みね

お姑さん今閑空に着きました

スマートならあの服この服着れるのに

それしきで挫けなさんな男だろ

好きだから逢いに行くとは限らない

和歌山市 玉井豊太

風当りものともしない杜の人事

他人のうわさ私の耳でお終いに

元軍人 興味もあつたなと思う

教本を充電あさの爽やかさ

和歌山市 小倉アサ
二人して輝き見せた一ページ
いたずらに言葉添えずにきた蓮華

苦悩した後に一輪花が咲き
若い娘に逢うときまっぴら姑の眼に

一日のいのちを貰うにぎりめし

大阪市 稲本凡子

筋金入りの腕を包んだ絹の服
惚けてきた頭を大事に持っている

心の中に絶えず置いてるくいの老母

卯の花に誘われ住吉さん詣り

大阪市 清水利武

日本は広いあちこち夏祭り

ギャル御輿若さ漲る白い脚

地震など何処吹く風と鳴門渦

新居には俺より先に虫が住み

大阪市 寺井東雲

吊り橋をバイクで走る郵便屋

風ほしい小さい火種残ってる

落選のつらさわからずポチじやれる

リユックにもおしゃれ時代の色かたち

大阪市 町田達子

さわやかな話題 小雨にこちち良し

若き日の名匠の魂といる座像(大日如来)

博物館からくり時計に暫し酔い(北京博物院蔵)

大阪市 北 勝美

気楽な日 続いて日々をもて余し

楽な日のなかつた頃の充実感

年金のくらしの中にない内緒

鈍感を度胸と思う震度六

大阪市 上田 柳影

一月十七日の痛みを耐えて来た奥歯

ポトポトと蛇口もゆるむ春意情

五体恙なく爽やかな春の風

年金の生活 株価値にならず

大阪市 神夏磯 典子

喧騒の中で花からもう青葉

葉ざくらの下で未来を不安がる

きつい言葉 黙って受ける妻の勘

菖蒲 あじさい 梅雨にも話出来る花

大阪市 渡部 さと美

女らしいところ見つけた藤の下

嫁ってから母もとまどう父想い

春なれば ばあさんハントするじいさん

野はみどりオウム施設の死んだ土

大阪市 藤田 頂留子

早買いのしすぎを笑う値下げピラ

棚上であやしまれてる紙包み

急がせる話に用心してしまふ

これ以上文句いうなの多数決

大阪市 松尾 柳右子

庭へ置くアワビ貝から猫が避け

二年たちきつちり家賃上げて来る

新曲に飛びつき古い歌忘れ

幼児がもう妬いている妹に

大阪市 清水 絹子

お隣の自転車で知る日曜日

へそくりの楽しさ孫がいてくれて

家建てた早よ見に来いといわれても

あの峰越えてこれが登れぬはずはない

大阪市 大河 未佐子

老木に生き方をきく 手を当てる

自分から立った椅子でも振り返る

身の内て想い燃やせる齢となり

おはじきを散らして過去の恋にする

堺市 黒田 真砂

ときめきは春の野山で逢う野草

我が家宝 備前のつばは祖母ゆずり

伴せは庭に次々花が咲く

頂上をめざす意気込みだけはある

堺市 一瀬 福一

イベントも業務命令村起し

妻も齢ハイですむのに理屈言う

半世紀添うて分らぬ事ばかり

母さんがよいと言うから添うただけ

堺市 中野 櫛子
震災後リユックが生きてニューモード

巡る四季 七彩にして夢を追う
小さい幸 日本人です新茶の香
花花花 亡娘の笑顔空しくて

豊中市 江口 明光

再会はいれし馴染の店で飲む

美しく老いたい妻が辞書を繰る

頼みますノックしたたか演じきる

花吹雪 牛はゆっくり起き上がる

豊中市 辻川 慶子

被災地に四季が回って風五月

夕茜プランコだけが揺れている

返らない今日いち日を何もせず

鐘の音に塔振り返る古都の道

箕面市 坪田 紅葉

花三日誘われて来た五月山

心労がつづいて風邪もおおらない

一人居に慣れてゆっくり今日も過ぎ

もがいても行く先ちゃんときまってる

箕面市 岩津 ようじ

愛らしく老いたいという頑固者

舌先の三寸に刃がついている

オウム批判しながらつつく活け作り

あんなノラにうちのシヤム猫ラブコール

夏祭り同じ法被の肩車

居酒屋で酔って落としてきた影影

過疎の島 都会の色で浜を染め

反対の拍手に意外妻の顔

吹田市 瀬戸 まさよ

勲章を辞退の友と飲み明かす

大草原疾駆する馬 男性だ

主婦気質 家整理して空の旅

被災者に京大阪の羨まし

吹田市 茂見 よ志子

聞くほどに背中合わせの運不運

悲しみは子期なく襲うものと知り

ブティックの前で躊躇の華やかさ

カロリー超過 黙認しようテイナーの夜

寝屋川市 岸野 あやめ

恋仇どちらも寡婦になりました

花の水 替えて拝んで今朝を出る

妻が居る労をいとわぬ妻である

面影のたちてくるなり百ヶ日

寝屋川市 平松 かすみ

十五階できてひゅうるる ひゆるる 風の詩

お暇です無料の列に続くなり

もう孫に兜脱いでいる プランコ

あの頃の年齢を買いいたい満期金(三十年)

東大阪市 安永 暁子

その昔 男の道のさくら花
満天の星 聖夜のような科学館
北斗星あれはパパだと孫は指す
鳴っている矢車さみし五月雨に

東大阪市 指宿 千枝子

チュツチュツチュツチュツチュツチュツ
九官鳥 田舎なまりの母の声
タマお玉隣で猫を呼んでいる
針の手を止めて若葉に目を休め

羽曳野市 田中 透太

詮索はよそう桜が散るまでは
矢面で風の止むのを待っている
迂闊には言えぬ話に先がある
寅さんの啖呵の中に人間味

藤井寺市 中島 志洋

やる瀬ない思いを覗く首飾り
もしかして耐えているのは男かも
同情の言葉に弱い月見草
言い訳は偶然会った事にする

八尾市 宮西 弥生

検査するベッドに美人のナースたち
うつの日がつづく花屋に来てしまっ
老いて子に従う親の仏顔
あぶないとサインをくれる仏星

八尾市 高杉 千歩

根無草 笹に願いをくり返す
崩壊のニュース劇画を見るように
いとぐちはここまでおいでねこじやらし
ご時世に合わぬ善意で低姿勢

岸和田市 芳地 狸村

重厚な風情が残る水路閣
湯どうふの値段に店の格が見え(〃)
関雪がいまも生きてる記念館
正体がわからぬままの味自慢

岸和田市 田中文 時

胡散臭そうに隣の猫が見る
ガンよりも始末が悪い痴呆症
昔なら翁と言うに生臭し
遊んでるよりましと言う時間給

河内長野市 植村 喜代

竹林の空の青さが広がらず
渡月橋 人の合間を縫う車
八重桜重く咲いてる雨ばかり
小さい亀裂重ねさせた悪女

大阪府 八十田 洞庵

母の膝ぬくもり思ふ子等で通夜
父の樹の傷口余程根が深い
土に生きる顔 老醜を思わせず
剥落の石仏にも史実あり

自選集

有 働 芳 仙

放し飼いの望遠レンズの中にいる
天涯孤独 誰も立たない夢枕
出世には近道はないが金が効く
奥様の前では狙の鯉でいる
抜群の記録へ麻葉苦笑い

遠 山 可 住

片思いでもないじゃない青葉風
還暦の恋だ乾杯してあげよう
さあ行こか高血圧を道連れに
手術台 大体間違いないようだ
あと一步の油断に泣いた白兔

八 木 千 代

柵かえの中でわたしを練っている
右往左往それでも練っているつもり
練り直しているのは深くなる言葉
いのち練る途中に雨は避けられぬ
哀しみを絹にするまで練ってゆく

児 島 与 呂 志

うたかたの情けが現実見据えとり
潮香る海鼠が好きを娘を思ふ
古女房 偶然という夫信じ
理不尽ということにして終る恋
根来坂 昔むかしの子守唄

月 原 宵 明

順序などない看板の字が見事
筈が三日続いた旬の味
終局も考えている待ちぼうけ
ええ人であったも七十五日ほど
長雨へ文句は言わぬ水飢饉

金 井 文 秋

生きてるうちはおやじの顔でいてなはれ
一病息災その息災を使われる
身心の弱りが妥協考える
食事までルーズになって独り住む
ドラマでは下の世話までさせず死に

奥谷弘朗

税金の取立て芸に長けている
シベリアの夏も西瓜がありました
ほんのりと温もりのあるお人柄
耳よりな話を聞いて帰宅する
夏バテの心配をする妻を持ち

松川杜的

卒寿まだ樟脳が要る衣替え
八十四の母に何を贈ろかな(母の日)
母の日を夫が祝ってくれました
往きしなに出逢った蝶にまた出逢う
北の窓やさしい母が好きでした

波多野五楽庵

独房に押しこめられた花鋏
八白の牡牛座ですがやさし過ぎ
葉桜の音律に酔う孤独感
桜ひらひら輪廻転生ころころみる
足音もやがては風になるだろう

辻 白溪子

油差すように毎晩酒が要り
拝観料 茶室も池もあるお庭
普茶料理の味が引きたつ寺の庭
ライバルのその後に関心などはない
仲人へ相談すれば暦出す

藤井明朗

平和日本へ世界の目が光るサリン禍
タレントの知事へきびしく待つ政治
京の旅 舞妓姿が絵に残る
夫婦別姓 時には他人の顔をする
いい思い出だけを残して夫婦老い

正本水客

あの頃は幸せだったと人が言う
言いかけた夢からさめて手を洗う
降り出した雨にいいことがありそうで
人を待つ窓に柳がゆれている
竹割った性格だけを買っている

野田素身郎

急いでも足が進まぬ後遺症
近道を知りつくして運転手
急変へ主治医が走る看護婦が走る
手術室の前に不安な顔並ぶ
鼻毛でも切ろうかひまな昼下がり

藤村 女

ふる里の小川メダカの歌がある
故郷の道は素足に心地よい
寂しさをみせない姉をいとおしむ
乱れ文字友の涙の痕がある
千羽鶴千に祈りの顔がある

小西雄々

美辞すこし妻をねぎらう茶を入れる
うちの子もいじめられて冬の虹
初夏になればなつたでせわしスケジュール
旅で見た喜劇の余韻まきもどす
指切りへあなたの未練からみつく

野村太茂津

古里の渚で懐古趣味煽る
足跡も想いも消して波洗う
試歩続くアンチオウムを道連れに
補聴器もアンチオウムか電池切れ
スニーカー無雑作に脱ぐ砂の上

工藤甲吉

宝石のチラシもやはり屑籠へ
男やもめの口説きを女聞いてくれ
男には男の話部屋を替え
上座にはやはり上座の顔並ぶ
下げられる頭と下げる頭かな

大矢十郎

候補者の言う公約のコマーシャル
国民が等しく泣いた日を想い
敗戦へ刑期はながし半世紀
円高くなり人命安くなり
真実を言えず無難な言葉選る

久家代仕男

母として手加減の要る躰系
賢人と呼ばれ狡さも兼ね備え
小卒の議員が土木委員長
呟いた埴輪の言葉聴き漏らす
法灯のゆらぎは亡母の吐息かも

恒松叮紅

自惚れをフロツピーに閉じこめる
底無しが身内に一人控をぬく
偉ぶっているけど筆が走らない
表情を変えぬ煙で背を伸ばす
雑草の中でも試行錯誤する

小出智子

時刻表無性に山が見たくなる
故郷へ帰る母のお骨を膝に抱き
ふたりつきりになつても何も変らない
食べたいものが無くなつてゆくさみしいな
雨三日僅かな杭に蹴蹟く

高杉鬼遊

さよならの残像いまも蝶を追う
月よりも星になれたらなと想い
善人の真似から逃げる恥いくつ
一合の酒に狂わし夜をつなぐ
雨の中ねこにも猫の用があり

西田柳宏子

蓮の句座 栗師逝きて賑わいて
祖父ちゃんと孫で仲よく一―二三
留守電で確かめ空巢今日は
悪くとも賛成多数走り出す
紅一点みんなナイトになりたがる

河内天笑

健康で愛想よければ美人なり
何回もみそ汁ほめて帰りはり
ウンやウンやウンやウンやとあとずさり
天国はたぶんこの世にしかないぞ
しなやかにつばさの世に満一歳(初孫へつばさの誕生日)

川柳塔 (追加)

唐津市 筒井朴竜

日稼ぎ乃汗^{あせ}疣^{いぼ}を癒す野田湯治

鰯^{いわし}乃争い拾^{ひろ}う浜漁師

茄子の花説得親乃真実味

岸和田市 藪野けい子

街角で横文字入りの服よぎる

夫逝きご詠歌習う五十代

手芸クラブから茶話会と五十代

池田市 岡本吉太郎

鯉のぼり立派で農家後つがず
生涯を駆け足で来てさびし老い
サラリーマン男ざかりを駆け抜ける

水煙抄 (追加)

大和郡山市 柳原誓心
遊び過ぎすまない気持少し湧く
遺句集の金を貯めよと妻がいう

ふれあいの祭典'95
川柳祭作品募集案内

作品 各題1句 (未発表作品に限る)
題と選者 1題3人共選
「揺れる」古川奮水 井床芦蘭
坂本須磨代
「横」真殿舎句里 佐藤寿美子
藤本静港子
「相手」遠山可住 恩塚治子
中川 一
二次選者 去来川巨城 小松原爽介
時実新子 黒川紫香 平山繁夫
応募料 1000円 (定額小為替)
締切 8月31日 (木)
応募先 〒678 相生市旭1丁目1-3
相生市教委生涯学習課
相生市ふれあいの祭典実行委員会宛

土井文蝶

東野大八

「栗先生、あなたが男盛りの頃の親友の柳人といえぱどなたですか」

「文句なしに土井文蝶や。句会帰りによく弥次さん、喜多さんで遊び回ったもんです」

ニコニコと屈託なく、いつものあたたかい笑顔で答えられたのは、平成七年一月の新年おめでとつ会の席だった。この日からきっちり四か月後の五月十五日に天国へ召された西尾葉名譽主幹への心からなる回向のつもりで以下記す。

「川柳作家といっても、プロもあればアマもある。アマチュア川柳作家は大抵、職があつてあらゆる部門の職業に従事している。

僕（土井文蝶）もそのアマの一人で、春から夏の半ば、詳しく言えば天神祭を境として、前半は冷蔵庫、後半は銅器物などの製造

販売を自営としていたのだが、春のシーズンともなればとても忙しい。

さてその一日だが、夜中に目がさめるとグツと一杯冷酒を飲み、ああうまいと再就寝。

こんな調子で朝六時はチャンと目がさめて飛び起きる。これだけは軍隊生活のおかげで、ちゃんと身についた習慣である。

朝めしも、ちゃんと二級酒ながら一本ついている。元氣ハツラツ、さあ仕事と七時半には乗りなれたスクーターで出発。かくて一人

で、受注、製作、検品、記帳、発送、仕入れを片っ端からコナシ、昼飯にも一本をぐつと飲み（夏はビール一本）、大好物の肉食でスタ

ミナをつけて、再活躍。

三時のおやつには一個一銭八厘の島之内の友恵堂のモナカをバクつき、再びハッスルし

て夜は酒二合か、ビール二本の晩酌。毎月酒屋の払いが大変なんだよな」

以上が「川柳雑誌」旧本「川柳家の二十四時」抄録。文蝶・土井角太郎は明治生れだから、右は還暦前の勘定。

昭和39年7月23日胃ガンのため死去。享年六十六。法名釈文蝶。柳歴は大正13年ごろから川柳に手をそめ、麻生路郎門下一筋で通し昭和13年6月には不朽洞会理事長を三年勤め、爾後は常任理事として、川雑住吉支部、阿倍野支部の育成に尽力した。

「文蝶君と僕との行動は、弥次さん、喜多さんという仲だったから、残った葉は涙にかきくれ、切なくさびしい。

句会の上とは十二時まで三時間あまり、常任理事会の上とは必ずといってよいほど、飲み屋のある時間たっぷり、有効適切に飲み回った。それから思うと、柳友というより、酒友そのものであったかもしれない。チビリチビリとやりながら、彼一流のおしゃべりは実に愉快であった。

口ぶりは今にも落ちる仲居さん 文蝶
よくこの句を吐いて、例の受け口のアゴを
つき出し、独り合点にうなずいていた。

彼はエッチな話になると超一流だった。酒の入った日はなはなしなら、こちらも負けてい

なかった。ニタニタ笑い合ひながらのこれだと酒の回りは面白い一方。「ホイきた、もう一軒……」というゼヒもない成り行きつづき。

スタンド「大町」を出ると、「バー姉妹」が待っていて、このあと、てっちり「すし半」、まだある料理「松本」、ここまで徹底したハシゴは彼、文蝶あればこそであった。

彼は何でもよく知っていて、出てくる料理の一品一品については水の流れる如くで、なんでもかでもおししゃべりのタネにした。

また、文蝶の「それはネ」という口癖は有名だった。常任理事会で問題が出ると、この前置詞にはじまり、堂々たる一家言を展開し、並居る連中をホホウと感心させる。いわゆるなんでもござれのもの識りだった。それだけになんでもズケズケと言いたいことを言ったものだ。

路郎先生にも、生々庵理事長にも、ヒヤヒヤするようなことを平気で言った。テライもなければ、照れ気もなく、コンプレックスも蔑視もしない。実にあけつぷろげで、きいていてもフムフムとばかりの良い男であった。だから彼の毒舌にも誰も怒らなかつたし、むしろ親近感をもたされた。ホントに憎めない男であった。

先般、政界の名物男大野伴睦老が死んで

紳士面ばかりの政界になったと新聞は書いていた。今度、柳界の名物男文蝶もこの世を去り、政界・柳界軌を一にしている。

宵宮の太鼓が鐘と合う哀れ 栗

ちなみに文蝶君の葬式の日は、天神祭の宵宮二十四日である。

以上は川雑日本の『文蝶逝く』の、見開き一ぱいの悼記の中の、栗主幹の長い悼文であった。平成七年一月のおめでとつ会にも懐いの念いと切なく、この悼文の話をそのままなぞつての、ペーソス溢れる述懐であった。

栗主幹は、よく大阪の『天神祭』が引き合に出でくる。むかしこの人が、初めて川柳に手をそめた阪大川柳会創会の夜が、この天神祭の賑やかなジャンジャン船の音の中だったのが無上の縁らしいのである。文蝶追憶談にも、天神祭のその宵宮がはなやかなムードで登場したものであった。

この追悼特集を埋めた追悼文の筆者は、すべて故人ばかりなので、それらの悼文を一つに要約して文蝶の人柄を偲ぶことにしよう。

文蝶というやさしい名前に似ず、ごつい感じのする男だった。心はやさしいのだが、いつも叱るようなもの言いなのだが、その底にあなたかい思いやりの気持がこちらに伝わってくる。

酒は社中でも酒豪で鳴らし、壮年期には斗酒なお辞せずで、酔えば口癖のように、路郎先生の骨を拾い、衣鉢をつぐのが夢だと唇かみしめてよくそんな見栄を切った。

われわれは、川柳が骨の髄までしみこみ、ある意味では宗教的なまでに高揚される。彼はその意味から、川柳麻生宗に凝り固まった信者の一人だった。

胃を病んで一年、好きな酒がのめなくなつて半歳、切開手術をうけ退院挨拶の際、

胃が悪いぐらいでエンマ受けつけずの元氣な自分の句をひけらかしていた。

川柳作句の傍ら、若人に混じってシナリオの勉強の学校に通っていただけに、

「おれが板金加工業なんぞにならなかつたら一流のシナリオライターになつていよう」と半分真顔で言い切つていたものだ。その夢が川柳人文蝶と羽化したものらしい。遺句

自殺する人とは知らずガスが出る
我もまた凡愚の一人酒の酔

籍は大阪花の吉野の仲居さん

これやこのスリも着ている紳士服
働いてとれと資本家折り合わず

介抱の食欲病人けなるがり

いつ死んでも悔なき程に邪魔がられ

▼次号は「古屋 夢村」

柳籠裏三篇研究 (二十六丁)

瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人

八木敬一・七久保博・岩田秀行

紀内恒久・西原 亮

鈴木倉之助 故岡田 甫

346 籠帰り行所じや無ひとい、 さ、波

八木―小野篁は、その身朝廷に在りながら、魂は一日に二夕時ずつ地獄に行つて、冥官となつたと『広益俗説弁』に見える、と「川柳大辞典」にある。

地獄へ出沒篁の鬧しき 一五三二六

句は、篁は地獄へ出役に行つたという伝説があるが、地獄から帰つて来て「行く所じやないよ」と言つたという想像句である。

佐藤―賛

哥字をハ毎晩死んだ人の作 傍四二九

「歌字づくし」「毎晩死んだ」は現世と地獄の間を往復したことを意味する表現らしい。

鈴木―賛

又行て来ると篁ちよつと死に 安九智五

岡田―賛

347 何んぞあつたら所の所へ鐘の銘 雨譚

八木―「鐘の銘」は、京都方広寺の再建に際し、徳川家康が豊臣秀頼に事を構えた口実。豊臣が鑄た同寺の鐘の銘は「国家安全」の四字であつたが、これは家康に当て、朝夕徳川を呪うものだというのである。

あんかうと書いたで鐘もつるしぎり

国家安全と書かぬが落度也 五三二六

関東方(徳川)が、何かあつたらとケチをつけるタネを探して待ち構えている所へ、ち

ようと運が良いというか悪いというか、方広寺の鐘の銘の事件が起つた。早速、ケチをつけられて戦争の口実を与えてしまつた。

鈴木・岡田―賛

348 鯉がなしか三ツ敷のがなしか 雨譚

八木―借金返済にフウフウいつているが、身分不相応に借金をして、初鯉なんか食いやがつたのか、それでなきや借金して女郎に三蒲団なんか作つてやつたのにチゲエネエ…とでもいふのか。

西原―「なしか」は「無いか」の江戸語であらう。洒落本によく出てくる。鯉も三蒲団も最高のぜいたく。両方共にとはいかぬゆゑ、どつちにしようという蕩児の詠嘆でもあるか。青木―不明。駄労解を述べれば、金持のドラ息子魚屋を見れば「鯉はないか」、呉服屋を見れば「三蒲団はないか」と、親の威を借り、唐人の寝言然たる科白を言っている様を句にしただけではなからうか。

佐藤―「なしか」は「無しか」の意でしよ。う。「よししか」は「よいか」の意である。しかし、句意判然としません。なお、「三ツ敷」は三つ蒲団それ自体ではなく、三蒲団を設ける身分の高妓のことでないか。二者択一の

句意のようにも思われますが、自説はあり
ません。

鈴木―佐藤兄と同意。その何れを選ぶべきか
に迷う。

岡田―駄労解。「この中にやア、初鰹も買う
奴がいねえのか、三蒲団を敷いてやる奴もい
ねえのか、情けねえ手合だナア」。

349 日頃正直なを伊勢の供につれ 寸魚

八木―主題句に対し、大辞典は「慰勞を兼
ね」と注をしている。そんな所であろうか。

七久保―辞彙の下注のように素直に解しまし
よう。

鈴木―贊。

岡田―「正直の頭に神宿る」の俚諺をきかせ
たまで。

350 吉野から静玉屋へ行に成り 狸声

八木―吉野丸は隅田川に浮かべた最も大きな
屋形船の名称。独り川涼みばかりでなく、花
見・雪見等の大一座はいうまでもなく、川施
飯鬼にも使われた。

句は吉野丸から上がって吉原の静玉屋へ遊
びに行くというものであるが、謡曲に「吉野
静」あり、吉野丸の船名と静玉屋の妓楼名を

利かせた句である。

吉野勢静玉屋へ大一座

三〇二二

佐藤―贊。京伝の「総籬」の、妓楼の名物料
理などを並べたくだりに、「竹屋の水貝、
しづか玉屋のゑましむぎ、こいらはつけめ
さ」とある。「笑まし麦」は水にふやかした
麦のことと思うが、変な自慢料理もあつたも
のだ。

鈴木・岡田―同。

全日本川柳長野大会 特選句

「群」

西山金悦選

点滴をつらつらと朱鷺の群れ いとつ 岬

群衆が本音を吐いて山動く

村上 貞徳

「刻む」

矢島破醉選

父の名はいちばん大きい字で刻む

辻本 俊夫

海の契り島は祈りの刻をもち

辻 香豊

「順番」

吉岡茂緒選

順番が来るまで地図は閉じておく

田辺千坊子

順番に食べて働く大家族

平井 夏子

「政治」

田中正坊選

太陽のような政治を待ってます

南木 茂

一匹の羊を政治教えない

福島 久子

「掌(てのひら)」

木野由紀子選

掌に握ろう新しい童話

近江あきら

掌に雪積む如く青磁抱く

伊藤 正紀

「歩く」

須田尚美選

明日を練る机に象を歩かせる

近江あきら

人間臭いセリフが言えるまで歩く 青木 晴風

「充電」

今川乱魚選

前略御免いま充電の旅の中

住田英比古

充電の途中ときどき目をあける 岩間 トキ

川柳塔社常任理事会 (6月1日)

▽川柳塔まつりの実施計画について

▽西尾菜追悼句会を7月23日(日)に開く。

▽武庫坊会計部長の辞任に伴う会計事務の分

担を吐来・ダン吉・武庫坊3氏で協議する。

▽高橋夕花・諏訪柳々・湯浅馬洗・月原方郎

玉置英子・嵯峨根保子6氏の同人推薦承認

■訂正 5月号P3(私の句)「こだ

わらぬ心を空に教えられ」↓「こだわらぬ心

を空と教えられ」▽P84(戦後五十年と私

・桜の咲く限り)「春まだ浅き戦線の湖上に

香る梅の花」↓「古城に香る梅の花」

6月号P79(候補作中間発表)上段2

行目「桑原道子」↓「桑原道夫」▽P110

(本社句会)中段12行目「照」↓「志洋」▽

P113中段5行目「寿美」↓「寿子」

秀句鑑賞

同人吟 西田柳宏子

— 6月号から

謹んで急逝された川柳塔名誉主幹であった故西尾 栗先生を悼み、心から冥福をお祈り申し上げます。

思いもかけぬ急なご他界の報に川柳塔同人一同、心の支えを失ったような感じがしてなりません。

先生何とぞ、川柳塔同人の健吟を見守ってやっして下さい。

合掌

さて本当に久し振り、何年もこの秀句鑑賞をやっていないように思います。そして数々の佳句秀句を拝見し、大変嬉しく感激しています。私は常々川柳は作者の顔であり、心であると言ひ、作った句より生れた句を大事にするよう話しておりますが、今回句を拝見して特に感動したことは、地震の句に、罹災者の実感句に力強い語りかけがあり、被災地を離れた地域の人の句にはどうしても傍観者のな、いわゆる作った句になっているように思えてなりません。

生れる句は、その作者しか詠めない句と言えましよう。では具体的に鑑賞に移ります。

避難してもう三度目の爪を切る

秋元 てる

さりげなく詠まれているようだが、この句は避難生活の中から生れた句であり、中七の「もう三度目の」が避難所暮らしの永さを十分味わせてくれる。そこはかかないやるせなさが滲んでいるようです。

さらにもう一句。

避難所にとりのこされるこわい夢

木村 貴代子

この句にはさらに深刻なものが伺えます。日が経つにつれて次々と帰って行く人、新しい住居へ出てゆく人…それぞれ震災当時共に過した人達が一人去り二人減り、狭苦しかった避難所も一日ごとにガランとしてきて、何となく取残される苛立ちと淋しさが、果ては自分達だけと残り残されるのではなからうか。淡々と詠んでいるだけに、下五のこわい夢が妙に実感的に迫ってくるように思えます。同じ阪神地区でも大阪南部などでは、客観的なあるいは想像的な句が多いように思われます。

あの朝も鳴いていたのか庭雀

黒田 能子

震災から日が経つにつれて、当時のパニック的な動揺の中で思い出も途切れとぎれにあんなこと、こんなこととつなぎ合せる時、ふと目についた雀たちの声に、ああ、あの時はどうだったやろか、雀たちはどうしてたやろか？これも体験句として取り上げました。黒田さんのお宅はどうであつたか、恐らくこの句が生れる背景には、多少被害はあつただろうが、助かつたと思われる。この句から作者は、いつまでも当時の生々しさを忘れることはないと思います。

カナリアが防毒班とゆく春愁

永田 俊子

オウム真理教も大詰めに近づいたようです。これに関する川柳も句会吟、柳誌等でもよく見かけるが、どうしても弥次馬的捉え方の句が多いようです。

この句もニュース画面で見た感慨を率直に句にしておられたのであるが、何と言つても下五の春愁がこの句の生命と言えよう。楚々としたカナリアがもしサリンなどの毒ガスに出逢つたとしたら、将にカナリアにびつたりの下五と言えましよう。テレビ画面から作者の心に灼きついたものが吐き出された句。

危なくて寄れぬ部落の灯が恋し

田村新造

戦後すでに半世紀、今なお鮮然に灼きついた敗走、日本軍の体験記録を詠み続けている作者に敬意を表すと同時に、そこには敗戦から余儀なくされた逃亡の生き延びる苦しみ、温かそうな暮しの灯を遙かに眺めながらもその温もりに近よることも出来ず、風の音、草の揺れにも怯える逃避行：恐らく今の若い人は勿論、中高年の方々にも思いもつかぬことではないでしょうか。この句も作者から生れた句と言えましよう。

団樂へ価値観違う三世代

安本晃授

前掲句の部落の灯もやはり団樂の灯であつたでしょう。が今の平和日本の恵まれた温かい灯も、現代日本の家族構成が核家族になり昔のような大家族の団樂は仲々見当らぬようです。三世代ともなれば如実に理解し合つても価値観のずれは如何ともしがたいものと言えましよう。この価値観と言う世代感覚的表現が、ともすれば説明句になりやすい点を美事に救っています。

さてこの句の場合、読む人に問いかけているようですが、果して価値観の違う三世代が団樂にどんな答を出してくれるのでしょうか。

流感と花粉症 電話で話し合い

岸本豊幸次

この句には今年の強烈な症状の流感や、テレビで全国に放映された杉花粉の風に乗ったまるで煙のような杉花粉の飛散に、どこの耳鼻咽喉科や一般病院などにも患者がどつとつめかけていたようです。私も相当なキャリアを持つアレルギー性鼻炎の被害者で、この句のもつ皮肉味に苦笑しました。この電話の両者共に外出を控え、情報交換を電話に託した二人の会話まで聞えそうな気がします。

ダルマ目を貰うて身の程もう忘れ

石川侃流洞

縁起を祝うダルマ。それもお馴染みの選挙の時の片目ダルマ、運よくというか、実力というか、あるいは強力なバックの力か、兎も角めでたく当選。歓呼の中で目を画き入れて両眼開いたのはダルマ：これでダルマはご用済み、あとは当選者自身の身の処し方が問われる番です。謙虚な選挙運動中の姿勢はすっかり消えて、身の程弁えぬ不遜な輩が多いのを作者は鋭く批判しています。

だんだん一般選挙民も自覚してきて今までのように単なる地盤、看板、鞆(資金)に迷わされなくなってきたはいるが、未だまだ地方小都市或は郡部では残っているようです。

少し肩の凝らない句を拾ってみました。油断してゆつくりできる人と飲む

榎山隆

意外な見付けと言うか、酒好きの？作者ならではの捉え方と感心させられた。「油断してゆつくり出来る人」とは求めるべくして難しい撰択と思われるが、そうした酒友がいることは伴せだと思えます。本音、願望の句。
ご利益があれこれ違うおもしろさ

江口明光

神様も万能であらせられず、願ひ事によって拝む神仏が異なることもあろう。また、信ずる人の熱意で御利益も変わるかも：皮肉たっぷり「ご利益があれこれ違う」にユーモアも感じられます。昔からイロハカルタにも地獄の沙汰も金次第というのがありますが、オウム真理教などまことにこれに当るのでは…。

のほんんと過ごす暮らしも肩が凝り

桜井千秀

忙しい現代社会の世相の中で、追いまくられる人にとつて週休二日も思うにまかせぬ人が多い。そんな人達の中で：作者もその一人だろう…：たまにのんびり過す一日があった時恐らく一日で音をあげるのではないのでしょうか。のほほんがよく効いています。

水煙抄

高杉鬼遊選

今治市 渡辺南奉

貧乏は気楽 泣きたい時に泣く
年金の試算 人生うしろ向き
つまずきは神が休めと言うサイン
CMはマインドコントロールだな
春が逝く僕の暮らしに変化なし

和歌山市 古久保和子

話したら目減りしそわない話
クライマックスでポテトチップス食べる音
メーカーにまでボケベルを持って出る
チェーンソー森が痛くて眠れない
三つ指をついてびっくりさせてみる

西宮市 久保まさお

吾が傲慢打ち砕いたる震度7
人の囃は揺れて天気図冴え返る
公民館閉ざしたままに桜散り
泰山木 被災の庭に毅然立つ
青空にシート励ます鯉織

唐津市 市丸晴子

入浴剤 今夜は何に染まろうか
平成の姥捨て山の名はホーム
家計簿の数字私を責めている
生きるとはゴミを作って行くことか
活断層抱いてローンを組んでいた

河内長野市 大西文次

水やれば花は嬉しい顔をする
慰安婦のつけ平成にもつれこむ
お金さえあれば何でもない話
出て行くと言うても妻は慌てない
芽の出ない男同士のコップ酒

名古屋市 藤井高子

凜と咲く百合にも微罪あるだろう
政論のかけで土龍が掘り進む
手拍子が多くて足が浮いている
そして蝶 修羅を舞うてるとは見せず
しのび寄る老いへ梯子をはずされる

綾部市 藤田芳郎

足して二で割れば程よい子が二人

その裏の裏読む二本目の煙草

年金の暮らしへ分母大きすぎ

助けてはやれぬが泣きに來いという

闘いに疲れハイネのいっき飲み

芦別市 斎藤房子

シングルでいる気楽さと孤独さと

ノーといえる勇気が欲しい葱坊主

公園の中に風の子見当らず

うぬぼれの男へ風の百たたき

流水去つて海は大きく呼吸する

宝塚市 永田暁風

狂佗し鬼の優しい目に会いて

ひらりひらり美しく降る焼夷弾

寺町を濡らし残して狐雨

美人追う老いの視線のゆらりゆらり

旧姓で呼んで昔の瞳を交わす

和歌山市 吉村さち子

生真面目な父と歩いた事がない

騙されて見よう可愛い嘘だから

諦める事で輪の中見えてくる

それなりに風が桜の乱を見る

あれ以来 地下鉄恐怖症になる

八尾市 奥田明

バスガイド後はビデオと交替す

一病で煙草二病で酒を断ち

三食は忘れず薬だけ忘れ

一応は袋を持って犬散歩

以心伝心嫌いな人に嫌われる

宝塚市 嵯峨根保子

キュツと紅ひいて治まる五月うつ

糸切れた凧がこっそり帰つてる

糸通すことが苦痛になつて来た

山頂の風は明日へのパスポート

愛と言う文字にめつきり弱くなる

寝屋川市 後藤黎之助

飼っている犬の尻尾に嘘はない

市役所のアンテナ勝手な方を向き

人生の最たる友は妻という

階段の汗を知らないエレベーター

いろいろとあるが富士山美しい

今治市 塩路よしみ

夕やけ小やけ過去なげいてもなげいても

おしゃべりも無口も群の中にいる

邪魔されぬ位置で読書に余念ない

流れ雲おまえも深い傷を持つ

鏡よ鏡わたしやつれていませんか

桜の木残す話で夜が更ける
銀行へ残高だけを聞きに行き

二日分薬残して死んだ犬

残さない主義ではないが残せない

遺言状 何も残さずすみません

高槻市 乙倉 武史

広告塔哀れ女優の転落史

野次馬の根性で見るオウム教

信者には爪の垢でも有難い

鈍行で時の流れに身を任す

見にお出で隣が産んだ熱帯魚

十和田市 阿部 喜久江

漢方薬 信じる祖母の医者嫌い

こっそりと独り占めしたい話

人情が満ちあふれてる過疎の村

義理失せた浮き世はほんま住みにくい

ウエディングドレス憧れでした夢でした

和歌山県 杉山 精子

草も木も萌える私は風になる

一握りの土に生命を吹き込もう

割箸が自然破壊を企てる

図書館に入ると咳が止まらない

情熱のままにポストに入れた悔い

掃除機が埃まみれでよく動き

ながい夜が明け初めたころから眠り

優越感 私には阿呆でござります

孫も見ているかテレビのぬいぐるみ

熊本県 高野 宵草

中途半端な季節にこまることがある

女にも解放感がある寝間着

アルバイト悟ったような口をきく

葉ざくらは人の流れを見ています

籠島 恵子

反対の一人の気持汲んでやる

拳骨の届かぬ位置へ撲る真似

良心を無人売り場で試される

天国行の切符に寄付を勧められ

鳴門市 八木 芳水

ミニ菜園 律義な種に励まされ

税金のお知らせだけがきたポスト

アップにも耐える顔だと友をほめ

相談に乗った私も泥の舟

羽曳野市 徳山 みつこ

何時の間にやら辻褄が合っている

窓の灯が点く順番がある団地

年度末また公道を掘り起こす

雨が続いてあなたにいけない

藤井寺市 高田 美代子

香川県 山崎 はつ恵

バーゲンへ走る元気をためておく
跳んだとてたかが知れてるジャンプ力
腹すえて聞かねばならぬ娘の話
宅急便 母より先に米が着く

犬山市 森 正

全くだ犬のおしっこお断り
別世帯 老いも気楽なところが
照れば照る降れば降ったで人のエゴ
ままならぬ世とは知っても人の花

八尾市 大内 朝子

一人居へひとりぼっちが寄ってくる
ふところが浅くてこぼれ出す男
寝たふりが上手でうまくやっています
どうしてはんの それからおんな長話

今治市 渡 邊 伊津志

自慢した位置で人間呆けてくる
水澄ましわれの水輪が抜けられず
親切でしている世話を趣味にされ
人間の罪の深さに海濁る

八尾市 村上 ミツ子

ふくらませすぎた風船もてあます
ありがとうごめんなさいでうまくいき
木登りの風の子とんと見かけない
捨て石をどれにしようか迷ってる

鳥取県 山本 正光

妻という楔がとても効いている
言いぶんを聞いてくれない妻とい
貧乏の暮らしをしても酒は別
腕組んで歩かずじまい古希祝う

静岡市 沢田 きん

幸せは続かぬものよ雲を追う
脱ぎ捨てた靴が嘆いている疑
姿見に今日の心を覗かれる
妥協した日から肩の荷軽くなる

八尾市 生 嶋 ますみ

不意の客わが家の素顔覗かれる
ブランドの傘置きわすれおちつかず
葱坊主みないっせいに背比べ
労りの言葉に弱い仲直り

和歌山市 木村 親 踏

夫唱婦随こんな言葉もありました
どこへ行ったか昔たくさんいた花子
営業部グラフの線が鞭になり
目を閉じるいつまで彼を待てばよい

西宮市 古 谷 ひろ子

夢の住居の絵が張ってある仮ずまい
グラグラッと夜毎の子感いつ癒える
物にあふれ心は飢えの風を抱く
ペットボトルもなき倒される猫の恋

吹田市 西岡 豊

あとながない ないから派手にやるとする

楽しさはあんたが好きになってから

意味深のにんまりの瞳に御用心

表彰を手に祝宴のシャンデリア

堺市 神原 文

ありのまま言うたら見合い気に入られ

あああなた見合いですかと馬鹿にされ

姉も古希 赤いめがねがよく似合う

この道はわたしの道と決めている

唐津市 松本 圭

神様は私に妻をまだくれぬ

二人きりエレベーターの中夢想する

平等に妻が単身赴任する

新緑の照り返し目がこそばゆい

豊中市 石川 勝

雨が降るほっとしたのは子報官

砂時計が途中で止まるのも情け

部屋のない母ブランコへ泣きにゆく

寝たきりもその数に入れ長寿国

宿毛市 岡村 千鳥

宇宙人むかし羽衣着た美人

おかめひよっとこ夫婦コントを繰り返す

都会の灯に群れて少女が火傷する

目覚ましがふたつ春眠まだ覚めず

久留米市 鶴久 百万両

失恋に触れるとお茶が欲しくなる

カルメンに骨を抜かれた痕がある

俺はポパイ恋の日替り演じきる

女王蜂に媚びると騎士の名がすたる

静岡市 小木 久子

ご近所の家立替えが続いている

率直に君が好きだと言う若さ

見付かった迷子親子で泣いている

どっちが大事 比較出来ない無理を言う

唐津市 岩崎 實

いただいた暦がかわる牡丹の絵

パン買いに行けば二時間戻らない

孫が来て家のおもちやが動き出し

薄情といわれ男は考える

旭川市 朝倉 大柏

生意気を日増しに詰めるランドセル

酸欠の街ふるさとと呼ぶ人も

小理屈を並べて未来派のつもり

うちの孫ばかりを見てるマスゲーム

富田林市 藤田 泰子

一粒の種から夢のねずみ算

もの忘れ自分が怖い時がある

出しゃばりと言われています正義感

頂上は冷たい風が吹くところ

舞鶴市 森 本 芳 月

末席の光を抱いている男

本能の中で逆立ちしたくなる

恋一つ落し神経性胃炎

正面の額のゆがみが温かい

海南市 谷 口 義 男

使途不明 理由糾さぬ監査役

子との距離だんだん遠くなる別居

家風まで何時かポイ捨てする世代

嘘つける順に出世のランク表

尼崎市 野 瀬 昌 子

初孫が来ると爺さん小言やめ

悠々と猫が上がって来て困る

花の下 武器を持たない人という

公園の桜の下に仮設建つ

鳥取市 植 田 一 京

知恵袋 底の方から出してくる

佗しくて喜劇タッチの日を過ごす

窓際の椅子で全体見えてくる

自分史に別ればかりが多くなる

尼崎市 長 浜 澄 子

方程式 越えぬ男でつまらない

ひとり芝居の扉も愛に飢えている

ホスピスの窓に宣伝カーが来る

格式の扉 正面から開ける

大阪市 一 本 勇 太

トンネルで思考のギア入れかえる

ほめ上手 植木をほめて持つてゆき

ひと筋の道を歩いて来た疲れ

無位無冠 鬼のしがらみ踏み破る

河内長野市 水 谷 笙 子

グルメ街あれこれ迷いうどんです

連休のあと洗濯機 唸りだす

お隣の猫は我が家で昼寝する

ひよっとして ひよっともしないタイガース

八尾市 平 川 幸 枝

素顔から母の記憶は往きどまり

静脈がすけてみどりの衣替え

旧式の電話かみつくように鳴り

妻の目に銚子が並ぶ危機管理

大阪市 尾 崎 黄 紅

ひな壇に並ぶなんにもしない奴

殺された人を数えているドラマ

禁酒するぐらいならとはよく解る

幸せは金ではないと知る病軀からだ

寝屋川市 太 田 とし子

厄介な年寄りにある選手権

花咲けどポーズ替えない辻地蔵

毒ガスが近くて富士が遠くなる

連休日 家でオウムを追っかける

尼崎市 森 安 夢之助

逆さまに流れる子等が居て怖い

泥まみれになれと勝手なことを言う

上席へ座り疲れた嫁の里

青虫も育っています自家菜園

和歌山市 山 根 めぐみ

牽制をしあうあやめとかきつばた

背信に何故か重たい女櫛

仕来りの古い序列に縛られる

片袖を濡らし情けの傘をさす

酒田市 永 澤 裕 子

世紀末予言に終り夏の雲

捕まればただの男の絵空事

母の日の母はお金を使わせず

夫唱婦随 黒を白とも言い添える

岸和田市 亀 井 皎 月

こだわりがあつて明るい絵が描ける

後ろからついて行く気楽さが好き

冬来れば夏 夏くれば冬恋し

我がままは聞いてはくれぬ神仏

福岡市 井 崎 ミサ子

あらそうと笑つて聞ける年となり

過疎の村こも国際的となり

ゆっくりと時が癒やしてくれる傷

不満ならだれにもあるよ笑おうか

羽曳野市 酒 井 一 壺

誕生日孫からかかる糸電話

糸底に温もりのある志野茶碗

容赦なく削った山が謀反する

消えかけた道標のある父の山

伊丹市 樫 谷 郁 子

病院の窓より仰ぐ月孤独

風薫る五月なれども気はうつろ

病床でなお衰えぬ向う意気

禁煙が解けてあがつた医師の株

東京都 清 原 悦 子

うつぶんを晴らしてくれた大掃除

仲直りさせられました今日の酒

くだらない話 近所とうまくゆき

わが娘にはいつもどこかで期待する

犬山市 早 川 盛 夫

雷が近くて夫婦見つめ合い

憎いとは思う人にも家庭あり

お返しが多過ぎるからまた悩み

自販機に汚い札を返される

島根県 森 茂 美

虫だけは地球の四季を知っていた

無人駅 今朝は違った花を活け

チャンネルを押せばオウムの声がする

核のゴミ三陸沖に鳴る霧笛

熊本市 北川 一進

混浴に今日は遠慮のない二人

知人とは名ばかり波はつめたいね

偶然にしては話が上手過ぎる

広島市 流 奈美子

贅沢な吐きだとも旅疲れ

亡母と会う暗示をかけておく枕

魂を売らぬ誇りの無位無冠

和歌山県 藤井 春子

目立たない特技持つてる落ちこぼれ

緑消え鳥去る過疎の山が病み

お小言も添えて貰ったワンカツプ

新潟県 高野 不二

やっと歩く孫と一緒にこけている

雑草の強さに負けた無農薬

くれるならどれ貰おうと洋画展

和歌山県 楠見 章子

うたた寝の少女アリスと旅に出る

おんなの話してるあなたの目が嫌い

アルバムに黒いリボンをかけてみる

高槻市 傍島 克治

迷い込む蝶に和らぐ会議室

どしゃぶりが写経の筆を止めさせる

しくじりの尻を拭わず鬼がいる

静岡市 浅子 まつゑ

大切な話か犬も座りこみ

切り札が動き出そうとして困る

当てにした突っかい棒を外される

静岡市 松下 正枝

思いやる心言葉を選ばせる

ドッコイショ掛け声かけて皆仲間

時代遅れだけど温とい人間味

静岡市 永倉 柳華

震度4猫の髭にも感じたり

物価高 老人やせる低金利

無党派の船出 東西波高し

尾張旭市 三浦 きぬ

本命も義理チョコもなしチョコが好き

雑草に争いはない境界線

お隣の空地コスモス似合いそう

静岡市 佐藤 次枝

食べ残す夫の体調気づかれ

揺れ動くそれでも頑固押し通す

叩かれぬ程度に頭持ち上げる

静岡市 中西 雅

血のめぐり悪くなったか忘れ草

水ばしろう小さく咲いて旅うれし

菖蒲湯の香りを浴びて今日を終え

唐津市 山門 幸夫

分配の余りは何時もボスが占め

五月蠅いがこの問題は老父が要る

水温む弁当箱のメダカたち

唐津市 山門 タミ

去って行くあの子期待の星でした

観念をしてからの主婦強くなり

坊やより親が意気込む鯉轍

枚方市 前 たもつ

家庭菜園 政治の話大嫌い

特技にはコヨリ作りと書いておく

いつごろか妻は上位に立っていた

大阪市 三浦 千津子

見も知らぬ明日を信じているわたし

四月馬鹿 無口な夫の畷に落ち

終章を飾る保険は掛けてある

兵庫県 北川 とみ子

逢いたさのトラブルならば許せよう

小言から朝が明けてくから狂う

お見合の男中味の無い喋り

愛媛県 安野 案山子

俯くと弱い自分に戻りそう

少年に魔法をかける都会の灯

バラックの屋根にかかった虹の橋

高槻市 芦田 静江

葉桜に祇園の句碑の通り風

切り売りを促すように責める税

鯉のぼり組み伏せ孫の得意顔

泉佐野市 河原崎 純隆

分水嶺さあてどっちへ流れよか

二度ぐらいノーと答えて様子みる

この顔を覚えてくれぬ改札機

寝屋川市 森 茜

入園の子もまた母も気疲れて

制服よドミノ倒しにならないで

キューピッドからの流れ矢ずつと待ち

尼崎市 中澤 向西

あの日から水一パイを溜めておく

足のばす仮設住宅青畳

カラオケを一つ覚えてバスツアー

和歌山市 山裾 かず子

うそも方便 仏の前で詫言っている

字は努力 私不美人生れつき

いたみしる我が身 人の身皆同じ

摂津市 井上 源一

旅仕度サリンの不安拭けぬまま

新宿の娘の無事をアッシュホン

マリオネットの膝が崩れるガン告知

寝屋川市 坂上高栄

言いわけはしない自分が哀れ過ぎ

来年も生きる希望の挿し芽する

校門を出ると子供の顔になる

尾宮弘治

やつと当たった仮設 雑魚寝が温かい

孫に似たナースにメツと叱られる

夕飯に駅弁二つ旅終わる

沖繩県 杉谷一栄

七七日姉の手紙を束にする

ダイビングお久しぶりとさんご礁

ばあちゃんの腕と並べる絹の肌

尼崎市 的場十四郎

これからは飲ませたくないいいお客

定年の鬱ママグトの客になり

ロボットに奇抜が欲しい五月風

松江市 安食友子

踏切で四角四面がすれ違ふ

インターホン奥へ奥にと粘ります

炊飯器スイッチオンを忘れてた

富田林市 欄 智久

単身赴任 羽目外すなと妻が釘

目に注射でつかく太い針に見え

利が下がり気をもむ程も貯めてない

出雲市 加藤 スズコ

咲く花もきょうの出来事震えてる

朝もやにひびく声するしじみ舟

靴の店 音のするのをはいて見る

尾崎市 吉永 伊三郎

住む街は凡人向きで山が無い

追い抜いた友の後からマイペース

そのドアを開けると癖になる夜更け

鳥取市 藤 ふうこ

良い知らせこの世のきわにきつと来る

あなたとはバランスとれぬまま他人

ただ一度主役になれるお葬式

尾崎市 軸丸勝 巳

一泊旅行 水盃を唾えない

汚染の風も吞んで吐き出す鯉のぼり

遠いけど行く散髪屋はなし好き

岡山县 土居 ひでの

おいしい話ばかりを乗せた花むしろ

枕二つ並べる今日をありがと

森の鈴に命を洗うホーホケキョ

尾崎市 河津 正治

呼び出しの数を決めてるベルの音

肩書きが取れて話が丸くなる

正夢となって天地が裂ける朝

貝塚市 池田 寿美子
巻き添えにならないほどに距離をおく

お互いに弱音も吐いて家族です
ローカル線のどかな噂二つ三つ

静岡市 大村 正雄

お祭りで買ったおみくじ気にかかり
古傷を見ぬ振りして思ひ遣り

溜息をすれば隣は釣れている

和歌山市 和田 美寿子

このチャンスのがせば永久に行かれない

夫婦げんか出来る元気で日々過ごす
よく食べてよく喋れるが歩けない

榎原市 西本 保夫

逆からの綴じ方もある思いつき

気がつけば不自然顔になっている
平和と言う名に保護された鳩のフン

熊本県 大川 幸子

盆栽にひと声かけて旅に出る
花一輪 机に恋が生けてある

鬼になるまではまだまだ要る修行

札幌市 三浦 強一

定年の蟻 年金の柵の中

定年の蟻 新聞に小半日

定年の蟻に寓話がばけてゆく

今治市 村上 久美子
翔べるだけ翔んで男はブーメラン
肩書きを持って世間の狭い犬
まぎれなく殺意を抱いたハエたたき

鹿児島県 大山 舞鳥影

太りすぎジョギングでもと医者が言う
断水の街には降らず崖くすす

箸や棒にからぬ児らの無限大

唐津市 山口 ふさ子

子も孫もないが節句の額飾る

早逝の夫に済まないほどに生き
腹立つと独り言いう癖がつき

和泉市 中川 楓

名ばかりの利息が消えた電車賃

味噌汁とつけ物妻の顔になり
他人ならとつくに許し合えること

岡山県 国米 きくゑ

一匹のホタルが胸に棲んでいる
あこがれた暮しします昨日今日

雑踏の中で一人の鬱続く

大阪府 澤田 和重

一人芝居だれにも素顔みせてない

定期券 今日はずで弾んでる

泰然と構え手術こわくなる

大阪市 中田 あい子

震度七かばった妻に見直され

雪のこる流人の里の和紙人形

笑う時笑わず泣く時泣きもせず

米子市 永井 三津子

故郷のお山がひとつまた消える

切なさに吐息が赤く燃えている

亡き夫がいるよと思う夕仕度

鳥取市 岸本 宏章

身についたマナー品良くさりげない

スポーツの花が河原で咲きみだれ

五分間 演歌の恋に炎えてみる

米子市 小塩 智加恵

腰痛も孫の馬なら忘れさせ

輪の中に主役の好きな人二人

隠しごと無いから夫婦続いている

仙台市 小寺 九

葉桜がきれいと言える齢となる

家族旅行これが最後と子に言われ

職場にて連休明けの骨休め

豊中市 藤原 桂子

孔雀にも思うことあり羽広げ

後援会 義理で集めた顔ばかり

いつの世も切り捨てられる尾のさだめ

富田林市 山原 昭水

自転車で無事故無違反二十年

わが家にはお酒博士とお茶博士

竹トントン 竹馬知らぬ塾通い

豊中市 岸田 知香子

雨煙り滴を肩に露天風呂

八十路でも女ですもの見栄がある

独り者花が咲きます猫談義

八尾市 村上 剛治

反省をしては愚かを繰り返す

愛想ない声で夜店の古木屋

友がきてだまって昼寝して帰る

茨木市 久保田 恵美子

思い出は遙かすっぱい桜んぼ

柄になくお茶のけいこは草臥れる

手の出ない土地に群がる犬ふぐり

羽曳野市 麻野 幽玄

欲しい時 好きなだけ呑む一人酒

あれはあれこれはこれだと言うけじめ

頼らねばならぬ酸素のボンベ負い

米子市 鹿島 蘭

蟹気楼だったらいいとニュースみる

真つ昼間ポチも私も小さな影

平等に頒けて端数はふところ

花びらをのせてゆるゆる春の川
秋田県 湊 修水

おだやかに片栗の花春の山
相のりが昨日の敵でややこしい

大阪市 勢理客 トミ子

蟬の経 五十年忌と三年忌

蹟いてほこりかぶったまま生きる

夜も昼もふわふわ不安シヤボン玉

青森県 西谷 鐵郎

いつまでの余白が知らず種を蒔く

一合の酒でこの世の憂さを呑む

遺言を書いて長生きするつもり

高知県 百田 幸

指切りの指に明日を縛られる

正直に言つて傷つく人もあり

顔のしわ歳相応と諦める

出雲市 浜 圭三

服と顔アンバランスで喋ってる

落椿 哀れんでいる妻の顔

物売りもお茶をよばれて初夏の風

香川県 田中 ふみ

不機嫌な風が約束違えさす

手応えがあったか本音ころげ落ち

老い忘れ明るい色の服を選ぶ

何かある妻の化粧が濃くなる
和歌山市 津村 武春

自惚れに相槌打って聞き流す

カナリアが一役を買うオウム狩り

富山県 高畠 五月

どん底に生きて神仏頼らない

無器用な父の踊りがまだ続く

お寺の子かり出されてる鳩の墓

日立市 加藤 権

バーゲンで女の修羅を見てしまい

無器用な父の背中が山になる

桜散るさくらは花の哲学で

倉吉市 松本 よしえ

まだ上が有るかあるかと豆の蔓

ときどきは神にご無沙汰詫びに行く

力一ぱい光ろうとするイミテーション

寝屋川市 瀧本 八十八

余裕無い金で復興くじを買う

人間の弱点たのし天の邪鬼

行き届く親切少し疑われ

堺市 宮本 かりん

本当の事が信じてもらえない

近道を選んだ蟻が迷い出す

考えてゆくほど迷い深くなる

鳥取市 西村半畳
時々はチャンスまだかと神に問う
しゃべってもいい秘密とはけつたいな

早魁が河童のすみかさらけ出す

島根県 三代朝子

ひと言が淋しがりやを喜ばせ

見掛けより愉しい人でほっとする

お手頃な相手と思ひ結ばれる

大阪市 乾哲静

年金の歩幅で生きる余生かな

知り過ぎた顔にも困る選挙戦

天気晴朗 孫の笑顔に手を引かれ

弘前市 今生恵子

地震後にハルマゲドンという怖さ

一線を退きさざ波と対話する

波風にテトラポットの亡父がいた

鳥取市 近藤秋星

大型連休過ぎれば盆へひた走り

じっとしておれば眠たくなる五月

あやめ咲く方へ散歩の足が向き

鳥取市 岩倉キク子

椅子蹴って立つよな意地はおますのか

遠まわりしてもやっぱり無駄でした

しこりを作りしこりを解いた大地震

島根県 福岡博利
八十八夜古里きとの工場に茶が薫る
嫁の名をちがえて呼んで叱られた
老いて候 階段ひとつ踏みはずし

寝屋川市 太田藍子

考える事多過ぎる菜種梅雨

来客に聞かれたくないベルが鳴る

この国のニュースですかと昨日今日

今治市 越智青園

こんでるの承知出掛ける連休日

薄紙で包まれ内裏雛眠る

鯉のぼり役目を終えてダム泳ぐ

高槻市 庄野澄子

通の客 寿司屋で一寸耳ざわり

百代の过客 月日に身をまかせ

長雨もよし私の心取り戻す

羽曳野市 川田晋

父母のどちらに似てもお人よし

乗りもせぬ免許書換え忘れない

ジバンクに今年は会費払うだけ

西宮市 牧瀨富喜子

どんどんとカレンダーばかり先へ行く

転居してほぼ座る位置定まれり

すこし贅沢いっ回きりの茶を替える

和歌山県 中後清史

炎天下荷づくり紐が緩みだす

北風を受け正論の芽が出ない

通知表 活発ですと書いてある

大阪府 原美恵子

言うとき事がまだあつたはず 子の電話

貧乏性なのでメロンが熟れすぎる

人の事だからうつつかり聴いている

尼崎市 松下比ろ志

新緑に散歩の足も若返る

四季のある日本に今日も生きて古希

止り木で影を相手に酒を飲む

鳥取県 山内芳江

愚かだと言われようとも子に尽す

愚か者 目先の事にすぐ走る

あべこべに機嫌取られて気が抜ける

岸和田市 井齋一齋

譲り合う冷えたお風呂の三世帯

うかつです孫に聞かれた内緒ごと

無理するな助けてやると言わなんだ

羽曳野市 西村りつえ

網走は梅と桜が競い咲く

雲海に小さい悩み捨ててくる

梅雨晴れ間 湿ったうつつを干している

相生市 中塚礎石

寝たきりに留守番たのむ小半時

真人間 訳あり顔が隠せない

決断のつかぬ男が不貞寝する

米子市 木村春枝

たわいなく電話一つで気も和む

大筋で納得したが踏ん切れぬ

引き際の美学ときどき考える

尼崎市 立谷勇次郎

イントロを聞くと自信の顔になる

この味が毒と知りつつ吸う煙草

氷河期も砂漠もあつた夫婦仲

羽曳野市 芦田絢子

哲学の道で悩んだことがある

物も人も溢れる街のしらしらし

アンダーラインに父の悩んだ跡がある

大阪市 和田和風

地下鉄が怖くてバスを待っている

パンパカパンまた大阪が笑われる

震災の後から壁が落ちはじめ

鳥取市 田中友子

デパートで買った値段を着こなせず

走る孫追って一日陽が暮れる

ナイターの結果がわかる父の朝

香川県 辻 上 よしみ

綺麗事言っても所詮女です

老いてなお口で強がる空元氣

午前様 頭に角を出して待つ

和歌山県 上 岡 正直

定年後 下段に構え生きている

とりあえず元氣にいると言っておく

腹時計きっちりサインしてくれる

藤井寺市 楠 昭子

その頭悩もつたいな使いだ

駅からの距離で灰皿いる場所

えんどうの花にかくれてデートの蝶

尼崎市 田 辺 鹿 太

恋文に附箋がついて舞いもどる

わが道を行く線上がキナ臭い

君だけが頼り通帳抱きしめる

倉吉市 山 中 康 子

勝てば良し負けてもともと二人連れ

散漫な脳に緑茶が欲しくなる

諦めの半ば吉報さげてくる

唐津市 浜 本 治 幸

地下鉄のサリン地球を震わせる

選挙戦終り静かな街戻る

ごみの日は鳥がつつき猫が食う

羽曳野市 安芸田 泰 子

邂逅に言葉逸して手を握る

絶世の美女を泣かせた杉花粉

グルメです碗豆御飯に木の芽和え

唐津市 入 江 喜久亭

連休も雨で予算が浮いた笑み

老い一人食事代わりのコップ酒

全開の窓見て秘密無い家だ

島根県 武 島 ちよえ

ひと波瀾ありそう早く辞退する

留守番へたっぷり仕事任せられ

目に余ることを見た日の目を洗う

寝屋川市 北 岡 波留吉

ユートピア目指し苦しい坂登る

血液型 気にせず愛はつのりゆく

お別れに贈る言葉は伏せてある

島根県 菅 田 かつ子

じゃが芋が伸びて仲間と手をつなぎ

聞き役の妻に一言言わせてよ

受け皿へあふれるほどに盛ってくれ

唐津市 福 島 紀 一

軽いねんざ杖一本のありがたさ

齢八十 良く生かされた世間様

暗いのは困る夜明けを待っている

働いた日は胸張って缶ビール
種播いて忘れたところに報われる
鳥取県 岩崎 みさ江

花びらと一緒に畳む花むしろ

西宮市 池田 善守

水とガスや々と通って風邪をひき

海よりも広い宇宙が夢となり

客が来て今日は遊べと追い出され

摂津市 木下 道子

姑と乗るゆっくり逃げ救急車

願いてくれたうれしさ込み上げる

弟が生まれ矢車活気づく

大阪市 池田 一男

生臭く生きた手でむく夏ミカン

枯れてゆく木に寄りつかぬ子の雀

ロウソクがじりじり燃える終の章

豊中市 みき わきみ

カウンター席好きないつもの老夫婦

新庁舎民のかまどを見ているか

延納をたのむ庁舎は豪華ビル

高知県 桑名 孝雄

生きざまを梅と桜で考える

運と根ないが鈍ならあり余る

核反対うちは薪ですランプです

百花繚乱 寡婦に望みが重過ぎる
兵庫県 倉垣 恵美

ぶっそうな騒ぎの中よ豆の花

話題からひとり離れてお茶を飲み

福岡県 本田 忠男

マレーシアの線香匂う日本墓地

日本酒に傾きそうな戦友の墓

子に凭れ軌道修正して生きる

鳥取県 藤山 弘子

春の香をもとめて食べる桜餅

晴れ晴れとした顔になる喫煙所

色柄とサイズ合わずにあきらめる

大阪市 川原 章久

孫に似た象さん好きの舌足らず

富士の山顔しかめてる裾野劇

童話よりすぐ寝るママがもつと好き

姫路市 福島 姫女

花とだんご五官よろこぶ群のなか

馬鹿騒ぎ狙い虚しい教祖の座

句碑の文字なぞれば指につく埃

出雲市 荒木 恵美子

マンネリなおおかに皿が伏し目がち

お迎えはちよつとまっけてて仏様

あせつてももう限界だかたつむり

伊丹市 小 熊 江 美

腰痛に効く温泉を回ってる

喜んで都合つけます飲む話

栄転と思つたものの片田舎

今治市 野 村 清 美

鐘の音に仏泣いたり笑つたり

万札を崩して財布太りぎみ

約束を果してくれた茄子の花

泉佐野市 内 田 倫 子

突然に熱を出すのは休診日

外国の客に和室を空け渡す

客用の食器ばかりがよく割れる

佐賀市 古 川 かずのり

隣国に曲げた歴史を叩かれる

朝星夜ぼし昔のことは口にせぬ

豊かさの中になさけが褪せてくる

兵庫県 玉 田 三 重

たましいの浅い所を覗かれる

肩こりを知らせてくれるサロンパス

嫁が来て我が家の味を変えたがる

岡山県 福 原 悦 子

筈が出だして亡母の忌がめぐる

木の芽あえ豆腐と和む母の味

明日開く花も答を抱いている

岡山県 富 坂 志 重

お日様が全部ほしくてみがく窓

鉛筆でコツコツ何も出ぬ頭

春風に夢膨らますやせ蛙

大阪市 鈴 木 トヨ子

長かったわだかまり溶け花に酔う

夜桜や恋の囁き酔いながら

桜守りに感謝してます通り抜け

鳥取市 山 宮 愛 恵

花時計 人のドラマを垣間見る

美容院出れば微風も気にかかり

祝福をされて宴席落ちつかぬ

兵庫県 西 井 つや子

着る人がよくて安物よく見える

円高も円安もなし葱坊主

こぼれ種ひっそり咲いて独り言

鳥取県 高 尾 京

震災を乗り越え願うこともの日

此のいのち育む土の有難さ

長生きの母に似てると喜ばせ

米子市 林 風 子

野の仏 岩のいのちのままで生き

大木が倒れて眠りから覚める

篝火が炎えあがるまで風を呼ぶ

金のなる苗がほしくて植木市
トマト苗 地球よごれて住みにくい
河内長野市 木太久 正一

大部屋の妻に優しく語れない
退院の妻は洋服きめている
交野市 山川 日出子

日本の連休 洪滞 風物詩
映画ならオウム サリンも許せるが
鳥取県 橋本 多哥由

不器用な男奮にほだされる
八起きして福 福 福をよんでいる
岡山市 中 嶋 千恵子

時々旅空恋し血のさわぎ
平凡に回った独楽のひとり言
大阪市 中 井 正 秀

悪い事したくないから貯めている
政治家は無職の人を選びます
米子市 服 部 朗 子

こだわらず郷の訛りで話し出す
筋通す強気な方と棲んでいる
大阪市 岡 本 久 峰

検診に尻の肉付ききねられる
正直な兵が馬鹿みる偽ノルマ

朝顔の種も入れます友へ文
ボランティア希望の種を播いていく
神戸市 向 井 泰 子

伏せ字などするから余計知りたがる
優しくされミスしたことに気が付いた
鳥取市 山 口 し げる

亡兄の庭 今年も花が咲きました
年金をあてにします買物デー
島根県 松 本 聖 子

りんご満開 蜂コツコツと夢を積む
タンポポは蜂のジュウタンかも知れず
弘前市 相 馬 銀 波

意地悪い曇り空から雨になる
母になる度に柔らかな化粧え
鳥取市 坂 田 和 歌 子

淡白に恋し愛して生きている
オルガンの音しめやかに校史閉す
砂川市 武 田 正 美

胸張って歩いてごらん春の土手
泣いた話はしないまあるい母の背
松山市 丹 下 美 津 子

人気とり今年の米はひとめぼれ
機械化で蛙は肩身せまく鳴く
千葉県 大 川 晚 翠

界市 谷 平 照
ライバルが友達顔でやって来る
友達の出世お酒が胃に沁みる

姫路市 服 部 一 典

還暦へ妻は突然来たように
美容院帰り綺麗とほめておく

松江市 松 浦 登志子

四月にはオレが会社を指名する
留守電に気楽な声で二男坊

和歌山県 村 中 悦 男

造花だと信じながらもやはり触れ
こだわりが過ぎて段差に気がつかず

兵庫県 森 脇 和 子

生きるには歯医者 眼医者と忙しく
辛口に程よくとける冷やっこ

兵庫県 安 達 厚

大雪が信じられない露の臺
肩寄せて春の来るのを待っている

香川県 堤 くに子

達者かと無沙汰を詫びて来るツバメ
社交性溢れる妻の掃除下手

池田市 藤 井 計 光
(計改め)

人よりも猿を泣かせる花粉症
脇役の酒が花見る通り抜け

出雲市 西 尾 和 子
大皿へお花畑のように盛る
つくしんぼ趣味の小皿にあしらえる

泉佐野市 稲 葉 洋

砂遊び早や子供らに領土欲
老いの身がためらっている茶の誘い

有田市 生 馬 芙美子

土産物 旅をして来た証扱品
自惚れが過ぎて友情薄くする

堺市 吉 本 菁 風

縁遠く一人遊びがうまくなり
開発で人の住めない街になり

兵庫県 酒 井 靖 子

日本晴 雲に休日あるらしい
すぐ顔に出る正直を利用され

大阪市 遠 藤 正 敏

にくしみが浮くぬるま湯が怖くなる
結ばれたふたり意外な風がある

岡山市 福 原 辰 江

突き当る壁にもらった道がある
花の下 嘘八百の弾む舌

池田市 木 村 一 笛

人混みは触れ合う行きき知らん顔
飼犬を信じたばっかり痛い日々

湖底深く村を沈めて夏の月
温もりを仏に貰う深大寺

静岡市 増田扶美

気しんどい話薫風窓を開け
花の月とかく浮世の金が縁

東大阪市 松山隆

幾星霜 喜劇になつて蘇り
朝の靴 帰りのコースまかしとけ

鳥取県 津村静枝

満喫をする豊かさに落し穴
風向きが變つて使い捨てになる

河内長野市 妹背尽呂久

お菓をさもおいしそう飲んで
シャンデリアに騙されましたレストラン

寝屋川市 井上すみれ

張りのある妻の声聞く孫が来る
一つ家に一言居士と大姉いる

高槻市 江原秀夫

耳ふたつあつて噂が聞こえずぎ
あいまいが続き現状維持の恋

柏市 上鈴木春枝

教科書に無い人生だから楽しみだ
一人去り又一人去り俺一人

宝塚市 黒台伊佐武

散つてよし庭ひとときの花筵
同い年五回転んでいつも無事

泉佐野市 大工静子

心音がグラフとなつて病母眠る
あと一歩一歩の距離が縮まらぬ

羽曳野市 山本たけし

ねじ飛んでガタが来ました夫婦です
だんごには深い思いがつめてある

兵庫県 中野とよ子

常連にのれんをくぐる型があり
乾杯のコップの中身ウーロン茶

大阪市 松永会美

ざわめきが消えた路地裏新学期
古い二人長期連休持てあまし

東京都 松本冬虻

散るでないかいなき命あるかぎり
無事手術 五体投地の札を取り

寝屋川市 宮崎菜月

ジーパンで犬の鎖と歩を合わす
朝一番奥の座敷へ風を入れ

松江市 浦辺静江

繰り返す不安の中で老いて行く
読書三昧 月が窓から覗き込む

東大阪市 今岡真人

島根県 槻谷 仲子

タンポポにツクシ負けずの自己主張

魂胆があつて安売り買つておく

島根県 谷岡 ふみ

新緑の中はぼたんの島が呼ぶ

葉桜の土手に憩いの老い同士

和歌山市 木村 初子

救世観音かかる世にこそ出で給え

一呼吸おいてしつかり的を決め

高槻市 古見 萬勇

先生が先生という同窓会

週末になると奥歯が痛み出し

枚方市 森本 節子

不安もなく明日はくると信じてる

補聴器をつかえば音質硬くなる

鳥取県 原 みさを

群がつて男が少し軽くなる

嫁がせて妻に一本ふえた皺

和歌山県 中村 君枝

内うちがばれて面目丸つぶれ

聞き流す事も浮世のさだめかも

鳥取市 杉本 孝男

矢も盾もたまらぬ他人口はさむ

エンストの父は梃子でも動かない

鳥取市 谷口 侑里

木の芽立ち色恋の虫騒ぎだす

腰揚げをした娘も負けず口答え

西宮市 岡本 道子

カーテンの外は五月の祭り唄

ゴミ袋いっぱい悔い捨てにゆく

出雲市 川島 和歌子

顔に出る人の心のうらおもて

皆帰り淋しく残る老いの顔

岡山市 山磨 行子

一言が盆にかえらぬ深い溝

燃えつきて命の重み知る牡丹

松江市 松本 知恵子

図書館の若葉の窓に来て座る

気負いなどない連休の日が終る

和歌山市 猪飼 あいや

噂にも種にもならぬ歳になり

一露に生命重ねる夏の草

河内長野市 印藤 智子

カーネーション貰つてお返し高くつき

母の日はそつと静かに遊ばせて

堺市 志田 千代

ござ敷いてれんげ菜の花 小さい客

還暦を親に祝われめでたいか

ユニークな一年生のメッセージ
封をする時に笑顔も入れました

鳥根県 岩田三和

母の日に自分で薔薇を買って見る
にこにこと孫と祖母との内緒事

兵庫県 高見末野

駅裏で明日の活力もらう酒
木と話し両手合わせる宮大工

笑面市 木村天弘

美しく老いてきれいな花作り
そば食べに出雲大社に行きました

松江市 佐野木みえ

政治家も重力失せて宙に浮き
躑躅咲く丘からはるか淡路見る

泉南市 坂根流水

嫁姑 花木の好みちがうけど
ワングルーム金魚ふた色買うことに

高槻市 執行稲子

義援金貰って義援金にする
大震災 神も仮設に居を移し

大阪市 平井露芳

堅苦しい話ジョークに攫われる
わが子ならとてもテレビは見られまい

茨木市 島元ふみ

金婚も済んだ事だと妻に詫び
スロモーになった私も蛍光灯

唐津市 野田旭恒

よかったと言える人生もさくち
帰りたい帰りたくない旅の宿

出雲市 林悦子

赴任地のかいから節を習い出し
もう父の暴風圏はずぐ描ける

鳥取県 吉田孔美子

ものいりが続き年金目を回す
初恋の人が気になる震災地

出雲市 中村トク子

思いきや枯れたと見しに若芽吹く
バツ一の女嫌がる猫を抱き

熊本県 増田一乗

丁度よい具合に分けたにぎりめし
幸せの会話聞いている緋毛氈

富山市 島ひかる

姑のしげきを受けて強くなり
方言に慣れて転地のよさを知り

鳥取県 権代康女

あの星の中に輝く母がいる
許されるまで揺れる橋踏むばかり

米子市 堀江美月

秀句鑑賞

—6月号から

金村 青湖

余震もう潰すものなし庭の梅

尾宮 弘治

命を洗うふた月ぶりの家の風呂

古谷 ひろ子

倒壊の地獄粧い桜散る

桧谷 郁子

ガス水道来ぬ被災地に春の雨

中田 あい子

阪神大震災は甚大な被害を与え、未だ沢山の方々の避難所生活が続いていると聞く。心からお見舞い申し上げたい。震災の句は随所で拝見するが、切実な句が多く、結果報告に終るきらいがある。ここに上げた四句は哀しみの中にも余情があり、佳い句だ。

たとえ話が嫌いになつてゆくさくら

原 章峰

桜はきつといさぎよい男と言うのであろう。次々と展開して結論のないたとえ話、桜は嫌

いになつてゆくという。作者特有の言いまわしで自己主張をしておられる。

のと鮎を噛む連翹の黄が眩し

松本 知恵子

殊更に、のと鮎を噛むというのは老いの一病か。渴きを癒やすのであろう。早い春に咲くこの花の新鮮さは、そんな身に若々しく目に眩しいのであろう。

鮎の骨すんなり抜けた築の膳

藤井 高子

「築の膳」は愛知県の築の鮎漁を指すのであろうか。何でもない出来事を中七で実に巧みに詠つてあり、川柳の醍醐味でもある。

ポラソテア彼も廊下で寝ると言う

藤井 千年

交際の男女であらうか。震災の手伝いに来てくれた彼も廊下で皆と共に寝るといふ。女心の機微をうまく表現されている。

他人ならぐちに相槌うてるのに

内田 倫子

他人の愚痴なら同調出来ても、身内となるとそうはいかない。ましてや嫁姑の中となると尚更である。まとめも上手い句だ。

亡父のこぶしこんなにもろい骨拾う

原 みさを

あの大きくて怖かった父の拳が……。思い出

とともに、悲愁一入の情感が控へ目に詠まれており、誰もが一度は迎える宿命である。

分骨のこと細々と米寿逝く

杉谷 一栄

余程印象に残つたのであろう作者の哀惜が内在されている。分骨の事情、親子の情感は何一つ言われていないが、「こまこま」と作者の人柄がうかがえる。例えばこれを「くどくど」としたら思いやりのない句になる。

友の骨乾いて軽し二人箸

森 茂美

この句もまた切実な句である。友の骨を拾うというからには余程の親交のあつた方であらう。「軽し」に作者の反感がこめられている。二人箸は二人で一膳の箸を使って骨を拾うの意味である。

涅槃図の歎きの相を見つめいし

大村 正雄

涅槃図は釈迦入滅の悲しみを描いた絵図だが、島根県益田市の医光寺にもあり、二月十五日には涅槃会が行われる。和歌山県の高野山金剛峯寺にある涅槃図は有名で、国宝にもなっている。余談になつたが、描かれている

絵図は、見詰めれば不思議な魅力がある。作者は「歎きの相」を見つめ何を見たことが。

作者が逆に問いかけているのかも知れない。

戦後五十年と私

同人特集

川柳の遠景

田中 透太

店るとき、安道湖から付けられたそうて、生前会えなかったのが残念である。

私が川柳をはじめたのは一九八二年からである。朝の通勤バスの中で童話作家の坪田譲治の計報の記事を読み、その感慨を、

童心の日々よみがえる讓治の死

と詠んだ。それをよみうり時事川柳に投句したところ、数日後入選句として掲載された。気をよくした私は投句をつづけ、川柳の虜になった。そして、五年目に定年記念句集『かぼちゃばい』を出し、今日に至っている。

私の川柳の遠景には、若き日の職場での文芸活動があり、金子兜太の存在がある。戦後五十年、日本は「経済大国」になったが、反面、人間疎外の精神的荒廃が深刻化している。文芸として人間性を豊かにする川柳は、今、そのアイデンティティが問われていると思ふ。

戦中派リンゴの歌は青春歌

被爆国非核政府がまだできぬ

わだつみの声九条と五十年

一九四五年三月十五日の大空襲で、大阪は一夜にして焼土と化した。家も学校も焼かれた。私は茫然自失、この日が私の戦後の原点である。八月の終戦、そして翌年、一年繰り上げ卒業で日本銀行に入った(初任給六十円)。

戦後の民主化の嵐は私たちの職場でも吹き荒れた。組合の結成、映画、演劇、文芸サークルなどが雨後の筍のように芽を吹き、その中でゲーテやハイネ、啄木や藤村の詩を口ずさみながら、私は青春を謳歌した。

しかし、一九五〇年、レッド・パージの弾圧の嵐は私たちの職場にも及んだ。その中に俳人金子兜太もいた。著書『わが戦後俳句史』で、その模様を次のように述べている。

「大労組にひろがるレッド・パージの波を

保守的で神経の弱い日銀当局が巧みに利用して、御用組合反対、日銀の「民主化」あるいは「近代化」などと積極的に主張するもの組合の場から追い出そうとしたことは当然だったのかもしれない。そして、それに便乗して売名に動くものがあったことも、これもまた当然だといえましよう。

虫の夜ふと金属音が喉を刺す

日銀でのパージが強行されたのは、この年の十一月でした。

東大卒のエリートであった兜太はその後定年まで役職に付かず、反骨の信念を貫いた。

エピソードといえはもう一人、川柳人協会副会長をつとめた、故山本六道郎も日銀マンであった。六道郎の雅号は、戦前、松江支

戦前・戦中そして戦後

弘津 柳慶

九ヶ国の会議恐れぬ九千万
君も又戦後の女性車押し
軍事郵便妹丈に返事が来

そして十六年十二月八日午前十一時四十五分、対米宣戦の大詔発布、路郎師の句

米太平洋艦隊全滅

神風が嘘でなかった真珠湾

が川雑に大々的に掲載された。

二十年、終戦で朝鮮から引き揚げて二十一年六月、下松専売公社に就職し、川雑も十八年十二月でひとまず終止符が打たれたが、二十一年八月一日再発行となり、二十二年二月の二四五号の川雑で下松と金沢に支部新設の社告を頂き、私が責任者として毎月句報を届けた。その後、竹原へ転勤となり、山根白星君に引継ぎし、竹原支部を再興した。二十五年九月に下関に転勤、竹原支部を松井可笑さんに引継いだ。

この間、路郎師からは再三、絵ハガキで激励を受け、葎乃先生からも再三、お便りを頂いた。一つ残念なことは、川柳翁のさし絵の川雑バッジの一号番号を頂いたのを、盗難にあつてなくしてしまったことである。

昭和九年、十九歳のころ、雑誌『キング』を読んだ。谷脇素文の川柳漫画が出ていて、これは面白いと思った。朝鮮専売誌が川柳を募集していた。「煙草」に弘津骨人の名で投句したところ、地位に入選した。天位一円五十銭、地位一円、人位五十銭で、一円頂戴し次々と投句入選して病みつきとなった。

選者の正木柳建寺先生から昭和十二年十一月号の『川柳雑誌』を送って頂き、早速『川柳雑誌』の読者となって投句を始めた。「骨人」から「慶一」と改号し、柳建寺先生から柳慶にしてはとの有難いお言葉によって柳慶と改号した。昭和十二年七月、支那事変となり、戦地を思う句が多くなった。

母親はいつともなしの煙草のみ
一服を寿命が延びる様にすひ
禁煙をするだけ野暮とあきらめる
なんとなく淋しい口になる禁煙
ポケットのたばこの粉が爪に入り
敷島を買って行先當られる
自由吟にも投句して

人 地 人 天 人 天 人

敵前へ睡眠不足の身を投げる
空襲下シーンとした街となり
空襲を上海の空でワンタフル
千人針腹の温みに感じたり
千人針生きて還るとは思はざる
隣からも北支のニュースよくはいり
万歳を浴びて通過の兵元氣
百度踏む姿戦後の心なる
天皇陛下万歳戦友の息絶えぬ
戦友の一人愛馬も加はれり
雪中をただ黙々と進軍す
鮮満支一如へ若い血が踊り

人 地 天 人

悪友をまいて気になる年の暮
御近所へくばる土産に慾が出る
どうしても行く気なのかと少し折れ
気にしてゐる證據何度も聞きかへし

新川柳を展望して

芳地 狸村

私の川柳とのふれあいは、昭和二十一年ごろ、竹内潮花（後の若柳潮花）先生と出会った時から始まる。勤務先で隣に机を並べたのが縁で、川柳を教わる。

職場川柳会が月一回開かれ、潮花先生、真鍋一瓢氏ら十数名が集まり、川柳雑誌社主幹の麻生路郎先生のご指導を仰ぐ。

「句はその人のところである。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である」と、路郎先生の新川柳評訳の序文に書かれているとおりの教えをうけたことを記憶している。勤務の都合で川柳を中断し、定年後再び活動を始めて現在に至る。

川柳界は、江戸中期から明治初期までを古川柳、明治三十五年ごろから終戦時までを近代川柳、戦後から現代川柳に分けられると思う。現代川柳は「うがち」「おかしみ」「軽味」の三要素に現代性を加味した語意による伝統川柳、詩性芸術化を詠み込んだ語感による叙情川柳に大別される。

決めることは、大変むづかしい。

このごろの川柳は難解で、詩の切れはしのようなものが多いという声を、あちらこちらで聞くのは、暗喩（メタファー）の句が増え、その謎解きの出来ないことから、言われているのではないかと考える。叙情川柳の感覚に伝統川柳型を加えて、人間性を評するよき味わいを持つ川柳に魅力を感じている。

語意の伝統川柳は、一般によく分かり、語感の叙情川柳は、語意によって理解しようとする、むづかしいことになってしまふ。伝統川柳に埋没している人が、それから脱して新しい視野に立つことは、たやすく出来ることではない。詩人、佐藤春夫氏の言葉を借りると、「よくわかる句がいいわけではなく、よくわからない句がいいわけでもない。でたらめでナンセンスな句もわかりにくい点がある」とあるから、批評は出来るがよいわるい句と

これから二十一世紀にかけて、伝統川柳、叙情川柳の内容が大きく変化し、新しい時代の流れに合った新川柳に発展してゆくことだろう。路郎先生の語録にある「人間生活を深く掘り下げ、人間陶治の詩として、純正な川柳を創作する」を心に刻み、十七音字の文芸を守るのが、戦後五十年の川柳に対する私のつとめである。

馴初めは造幣局の通り抜け

小林 トメ子

昭和十七年春、造幣局の通り抜けを私は家族と一緒に見にまいりました。満開の桜の下に机が置いてあり、紙と鉛筆と投句箱が据えられてありました。張り紙に「題 桜、ご自由に

お書きになって投句箱へ」とありましたので私は初めて川柳を書きました。

この桜とごまで咲くか葉が見えずそれから半月ほど経ったころ、造幣局文芸

部として一枚の葉書が届きました。佳作の一番に私(トメ子)とあって、「局の花ごまめで咲くか葉が見えず 浪花坊選」としてありました。あまりのうれしさに、その葉書は今も大事に持っております。

それから私は結婚いたしました。主人は造幣局に勤めていました。何年後、用事があつて局に行ったところ、廊下に張り紙があり、川柳が三題出されておられ、その中の一つが「アルバム」でした。その夜、主人に「川柳を募集しているからあなたの名で出してくれませんか」と頼みました。主人は出すだけならと気安く受け取ってくれました。その句は、「夫婦喧嘩アルバムが時の氏神」だつたと思います。

ところが一週間ほどしてから、主人は帰宅するなり「今日、事務所から呼ばれて小林君、囲碁クラブも結構だが、川柳もやってみて下さいよ」と勧められ、何と言つていいやら冷や汗が出て困つた。今後は出さんぞ」と言つて賞品の便箋を放り出しました。私は、口では「すみません」と詫びたが、心ではうれしかったことを記憶していません。

それからまた何年後、毎日ホールの前で地下で川柳の展示をしているという掲示を見ました。フラフラと地下へ下りますと、川柳

の色紙・短冊や雑誌が並んでおり、興味深く見せてもらつておると、青年の方が来られ、「本社会が千日前の自安寺でございます」と申され、案内の葉書をくださいました。その方が若かりし日の橘高薫風先生です。

私はおそろおそろ自安寺に寄せてもらいましたが、句会費はその時からズーツと五百円だと思ひます。会場の後方の席に路郎先生ご

川柳に適性ありや

寺井 東雲

夫妻が座つておられましたが、それから二、三年後に路郎先生が亡くなられました。

柳話聞く恩師は今は額の中

それ以来、本社会へは出欠席を繰り返しながら今日までまいりました。いっこうに上達もせず、恥ずかしいとも思わずにこれたのも、やっぱり川柳が好きなのでしようね。

昨年夏の堺川柳会の句会で、「選者の西山幸さんと私は生れた町名が一緒です」と紹介しました。すると天笑さんに「同じ所で生れても、幸さんと東雲さんではえらい違いで、なぜ東雲さんは川柳が下手なのですか」と言われました。彼とすれば、手とり足とり教えているのにうまくならないので、歯がゆいのでしょうか。その時、私は「どうも川柳に適性がないように思い、前々から何度、止めようと思つたことか」と話し、「いよいよ決断の日が来ました。本席で全没になれば、今日限り川柳を止めます」と宣言しました。いよいよ

よ選が進んで一句抜けると、皆が口をそろえて「止められませぬ」と言い、その日は四句抜けたので、そのまま続いている次第です。忘年句会には田中好啓先生が来られ、「堺川柳会のみなさんは、会長の天笑さんの名句を少なくとも十句以上、覚えてほしい」と力説されました。考えてみたところ、私は二句ぐらいで、これではあかんと思いました。橘高薫風先生のお話の中でも、先輩の名句が次から次へとび出し、私はいつも感心して聞いております。川柳の上手な方は、名句をた

さて、話は五十年前にさかのぼります。航

空隊の隊長から「お前は運動は何をやっても甲上でそれはよろしいが、本もしっかり読むように」と言われました。私は特攻隊員で、命令が下れば死に行かねばならないのになどどこか……と、毎晩、酒につかっていた。ある時、隊長に呼ばれ、本隊で会議があるから送れとのことで出発しました。だんだん天候が悪くなり、隊長は「十分ほどで飛行場が見えるから、そこへ不時着せよ」と言うので、風が強く、吹流しは真横になびいて風速十五メートルはあります。私は北向きに着陸するつもりで降下しましたが、隊長の命令で西向きに降りたところ、案の定、ともに横風を受け、滑走路は右へ右へと遠ざかります。その時、私は先輩から聞いた話を思い出しました。にっちもさっちも行かなくなった時は辛抱せず、手足をはなせということでした。「そうだ」と手足をはなしたところ、機はクルクルと四、五回まわってようやく止りました。そのままだと、完全に脚を折っていたと思います。たまたま私に操縦の適性があり、先輩の話を思い出して実行したのが成功したのです。川柳も先輩の言うことをよく聞き、また、隊長の言うように本をたくさん読んで勉強していきたいと思っています。

到来した女の時代

藤村 宏子

敗戦の頃はまだ幼かったので、戦後五十年を生きてはきたが、語る資格はない。戦争体験として強烈に残っているものも少なく、たいていが、後にテレビやニュースの映像で見聞きしたものと、区別がつかなくなっているような気がする。

そうは言っても、この国に戦争のなかったこの五十年は、経済成長とともに、いろいろな恩恵をもたらした（もちろん、ヒズミの部分も見逃がすわけにはいかないけれど……）。その一つが、女性の地位の向上、いや、近年の「女の時代の到来」だと言ったら言いすぎだろうか。

たしかに、母たちの時代にはなかった、私たちの自由な時間が街にあふれている。文化と名のつく場所への、中高年の女性たちの進出・活動は目を見はるものがある。展覧会、講演会、サークル活動、さらには、ボランティアなどなど。どこへ行っても、女たちは生き生きしている。という私も、その一人にな

りつつあるのだが……。

川柳との出会いは、御多分に洩れず、八〇年代に隆盛だったカルチャーセンターの講座での、橋高薫風氏のお話からはじまる。講座の最終日、課題の「手紙」で、

代筆の手紙の薄く友逝きぬ

の先生のご講評に気をよくして（？）以来、蚤の糸のような細いほそい歩みが続いている。

年齢を越えて、人生の先輩たちと同じ土俵で話し合いができること、互選の合評などを通じてさまざまな意見が聞けることなど、川柳を通じて好きなことが言い合える楽しさは捨てがたい。かなり辛辣に評されても、そこは川柳的センスで受け流してあとを残さない。過日、とある会で、

ホスピスのはなし炎天下を帰る

がとりあげられ、話題になったことがあった。もうこのような年齢になったのだ。

近い将来を見すえたとうえで、健全な精神で川柳をーがんばっていききたいと思う。

沙湖抄

小出智子選

どの種も不思議なタイムカプセルだ

梅干を一つふくんで野良に出る

置きかえた鏡の顔が気にいらぬ

酒呑んで喋ったことはみんな嘘

責任はわたくしにあり目鼻立ち

頑として梅雨の和服にこだわりぬ

つみびとのように病母から別れ

木の下に佇つと乳房がツンと立つ

甘鯛の白身ほろりと母想う

左の腕に遊びごろのある時計

梅田発河原町までよく喋り

急行が通れば野良も昼になる

人は他人と思つてみたり悩んだり

月並みな台詞で春は通り抜け

しがらみを断つバス停の夕茜

ほんとうの事しか言わぬのも怖い

羊羹を半分こして老いてゆく

いい出会いだった素顔が光つてた

夢は夢今日もひとりの台所

冠婚葬祭右へ習える本を買う

鳥取県 新家 完司

兵庫県 倉垣 恵美

八尾市 高橋 夕花

富田林市 藤田 泰子

和歌山市 田中 輝子

大阪市 津守 柳伸

鳥根県 松本 文子

鳥取市 小谷美ツ千

和歌山市 木本 朱夏

豊中市 辻川 慶子

尼崎市 春城武庫坊

鳥取市 前田 一枝

和歌山市 玉置 当代

富田林市 池 森子

弘前市 佐治千加子

鳥取県 鈴木 公弘

兵庫県 遠山 可住

砂川市 大橋 政良

貝塚市 池田寿美子

熊本県 高野 宵草

手の鳴る方へ傾いてゆくいのち

細い眼だあれは男を裁く目だ

感傷がとび出す本の折り目から

歯車が噛み合う時はすべて良し

背を向けた訳風に聞き花に聞く

初産の前夜の如く木の芽吹く

子離れが出来ずにドアをノックする

母さんがお百度踏んだとは知らず

ノーと言えずに俯いていた若かつた

古机四角四面にあきてきた

曲り家の隅で生まれた子馬です

意見具申上司を敵にまわす日も

春霞 山はうす紙貼ることく

フルートの音色月夜に発光す

初夏の風笑い上手を選つて吹く

蟹の眼に育つ水平線は灰色

子はすでに育つて母に通せんぼ

親の歳まで生きる努力をしています

山なみは変らず里の代替り

てのひらで鬼一びきを遊ばせる

どう見ても七十歳の貌である

死者悼むかたち雲が動かない

神ならぬ母に大事な守り札

蛙の目は生れた川を離さない

信じたいあなた円周内に置く

くさめしておもしろくないことづく

鳥取県 江原とみお

宝塚市 永田 暁風

尼崎市 長浜 澄子

広島市 森田 文

羽曳野市 田中 透太

青森市 工藤 甲吉

和歌山市 古久保和子

今治市 矢野 佳雲

藤井寺市 高田美代子

鳥取市 植田 一京

五所川原市 斉藤 劔

阪南市 深日白光子

京都市 都倉 求芽

米子市 林 風子

大阪市 西出 楓楽

尼崎市 田中 薫

米子市 茂理 高代

富田林市 片岡智恵子

寝屋川市 堀江 光子

豊中市 田中 正坊

寝屋川市 岸野あやめ

八尾市 宮西 弥生

和歌山市 玉井 豊太

岡山県 福原 悦子

和歌山市 桜井 千秀

尼崎市 春城 年代

宝とも柳とも思う娘が三人
 改修の駅矢印に頼りきり
 壮絶な死だなと思う花吹雪
 今しがた土の臭いのする人と
 さくら咲く頃には少し楽になる
 別居してきて自由とは何だろう
 すばらしい旅にしようと思ふかれぬ
 夢よもう一度素うどん食べながら
 嫁にゆずる棚に補強の釘を打つ
 腹案があるから空白の日記
 針葉樹 甘え心をつきはなす
 嘘つかぬ鏡であつた娘の育ち
 弁当がらの中に疲れがたまっている
 約束の花が今年も咲いてます
 飼いだの未来も考えておこう
 どんぐりの自慢話がよく弾む
 土鈴買ひ旅の土産を締めくくる
 戦中派芋の子洗うよに育ち
 ○×つけておむの本を読んでいる
 通夜の席笑わす人が一人おり
 病む妻の再起に残す毛糸玉
 ひとり旅ハナエの傘を持ってゆこう
 きら星よ秘密のかずは言わぬこと
 悪戯は許してくれる埴輪の目
 笛を吹くだけでは踊らない他人
 ひとときのパンに文句が多くなる

姫路市 北条てる代
 堺市 桜沢あかり
 綾部市 藤田 芳郎
 東京都 山口 新子
 青森県 田中 叶
 鳴門市 八木 芳水
 鳥取県 土橋はるお
 京都市 松川 杜的
 米子市 田中 亜弥
 米子市 林 瑞枝
 西宮市 奥田みつ子
 寝屋川市 平松かすみ
 米子市 政岡日枝子
 米子市 金山 夕子
 鳥取市 青戸 田鶴
 鳥取市 杉本 孝男
 倉吉市 最上 和枝
 和歌山市 榎原 公子
 寝屋川市 江口 度
 今治市 越智 一水
 大阪市 北 勝美
 鳥取県 土橋 睦子
 和歌山市 福井 桂香
 弘前市 中山 雅城
 海南市 三宅 保州
 八尾市 高杉 千歩

本籍を忘れるお隣の南瓜
 念仏の声高らかに春の寺
 不況のり越える企業の長い耳
 殺し文句遠耳だから振り向かぬ
 棟上げを梅雨のさなかにする事情
 連休も事なく過ぎて豆御飯
 役立たずなのに大事にされている
 貧しかった世帯始めの皿小鉢
 勤のよい部下に安心せぬように
 手から手へ遍歴ぐせのあるお札
 花道のテープを切った笑い笑顔
 ささくれた掌とつながぬ文字やさし
 白足袋を脱いで空腹思い出す
 ふれあいの日は耳掃除して出かけ
 かんたんに死ぬる気のある花の下
 豪雨にも満ちることない渴きもつ
 弱い者いじめ見付けた金魚鉢
 制服も馴染み五月の風を切る
 気張ってきたもんねとなくさめられる
 ひと昔前を雨だれ語り出す
 雨後の虹深呼吸などしませんか
 木の葉さえいたわり合って光つてる
 無駄話これも妻との潤滑油
 お隣は多産熱帯魚の話
 五階まで降りて昇ってまだ元氣
 心地よいはなし本当にしておこう

鳥取県 乾 隆風
 姫路市 光田 岸代
 和歌山市 青枝 鉄治
 出雲市 園山多賀子
 横浜市 清水 潮華
 和歌山市 細川 稚代
 枚方市 森本 節子
 豊中市 安藤寿美子
 大阪市 上田 柳影
 姫路市 大原 葉香
 倉吉市 奥谷 弘朗
 岡山県 土居ひでの
 今治市 村上久美子
 横浜市 菱田 満秋
 西宮市 西口いわゑ
 和歌山市 岩本美智子
 鳥取県 岩崎みさ江
 和歌山市 福本 英子
 茨木市 堀 良江
 名古屋 藤井 高子
 岡山市 川端 柳子
 米子市 澤田 千春
 高槻市 川島颯文
 高槻市 乙倉 武史
 鳥取市 西原 艶子
 堺市 宮本かりん

生き方を変えると過去が笑い出す
 尼寺の鐘はやさしい音で鳴る
 ふとこゝろで許す言葉を温める
 影武者に誓いをさせて横になる
 米を研ぐリズムでわかる妻の朝
 知恵の輪のほどけるまでの我慢です
 新入社定年の靴蹴散らして
 起き上り小法師にもある反抗期
 紫陽花の多恨を許す雨になる
 口ほどに余生余生と思わない
 若葉道青葉の笛の詩を吟じ
 ドラマから強い男が消えてゆく
 うちのよりましな自転車捨ててある
 飽食へ未来を託す策がない
 一生の付合い漢方薬とする
 垣根外してからバラの自己主張
 虫一つつかめぬ嫁を頼りにし
 クロスワードパズル解く知恵嫁に借る
 八月の風を亡びの詩と聞く
 麦めしの効目米屋で聞かされる
 ストレスをため込んでいる貝の口
 知恵の輪と遊んでいます小半日
 順風の時は聞こえぬアドバイス
 漁火の無事を祈っている岸辺
 休日の鬱脱ぎ捨てて髪洗う
 一男二女昔話に乗って来ず

倉敷市 小野 克枝
 美面市 椎江 清芳
 米子市 木村富美子
 鳥取県 橋本多哥由
 和歌山市 山田 高夫
 芦屋市 黒田 能子
 寝屋川市 後藤黎之助
 寝屋川市 坂上 高栄
 米子市 堀江 美月
 堺市 神原 文
 岡山県 矢内寿恵子
 鳥取市 美田 旋風
 鳥取県 上田 俊路
 岡山県 小林 妻子
 今治市 月原 宵明
 米子市 光井 玲子
 大阪市 神夏磯典子
 西宮市 亀岡 哲子
 唐津市 久保 正剣
 米子市 石垣 花子
 高槻市 守先 伸子
 大阪市 榊本 路児
 泉佐野市 稲葉 洋
 香川県 山地マツエ
 河内長野市 水谷 筈子
 和泉市 西岡 洛酔

長生きの筋だと再度おどかさ
 酒焼けの艶を貧しい灯が照らし
 骨惜しみしていると福も背を向ける
 一枚の舌に踊っている私
 あの星は亡母の化身か手を合わす
 ストレスを捨てるポトルが置いてある
 幸せな花だ祝いの席飾る
 寝台車寝かせてくれぬ紙コップ
 更年期鏡に文句つけてみる
 女系図へ揚げたい父の鯉のぼり
 ストレスが溜って本音出てしま
 復興の汗この町が好きだから
 文机の傷が昔を物語る
 まだ六十路年寄りなんて言わせない
 カメラ放列の中を悪が行く
 呉々もミイラにならぬよう囁
 あす開く蕾に夢を抱きました

寢屋川市 太田とし子
 今治市 渡邊伊津志
 鳥取県 山内 芳江
 香川県 川崎ひかり
 堺市 黒田 真砂
 鳥取市 春木圭一郎
 倉吉市 松本よしえ
 茨木市 藤井 正雄
 鳥取市 岩原 喬水
 大阪市 三浦千津子
 姫路市 本城よし子
 大山市 早川 盛夫
 今治市 野村 清美
 唐津市 山口ふさ子
 羽曳野市 麻野 幽玄
 和泉市 岡井やすお
 兵庫県 酒井 靖子

完司さんの句。小さな一粒の種をタイムカプセルと見た着眼が素
 晴らしい。悠久のいのちのドラマを共感することが出来る。恵美さ
 んの句。「梅干を口にふくむ」と、このさり気ない動作は、農作業
 に出る前の心の動き。何につけても農家には欠かせない梅干との日
 々の暮しがある。このようになんでもないことを句にして顔かせて
 くれるものを大切にしてゆきたい。夕花さんの句。角度を変えて見
 る自分の顔がある日、嫌だと思ふときがある。嫌いな自身の半面を
 見たよって辛い思いがする。自戒の句であろうか。泰子さんの句。
 こんなにあっけらかんとお酒が飲めたらどんなに楽しいことだろう。
 作者はその馬鹿馬鹿しさに呆れているのである。

尚香のむ

西出楓楽選

ひらがなで遊ぶ六十路の雪月花
 薫つかむ形になって寝てしまふ
 何ゆえの不安手足が冷えてくる
 森林浴そのまま森の木になった
 次の世も女がいわバラの園
 白すぎる紙へ書くこと何も無し
 花びらいくつ女の年は数えまい
 手鏡ともしものときを話する
 痛い痛い言つてしまえば治る傷
 肩書きが取れて優しくなる景色
 むなしくて仏の花をかえて見る
 満開の桜の下へ来ぬ返事
 にぎり飯に哲学などはありません
 約束の小指が熱いまま朽ちる
 木もれ陽よ老母が小さくなってゆく
 迂闊だな切り取り線に気付かない
 綻びから漏れる話がおもしろい
 よく眠り先ずは現実から逃げる
 手鏡をパタンと伏せるまでおんな

名古屋市 藤井 高子
 八尾市 宮西 弥生
 大阪市 鍛原 千里
 米子市 林 風子
 羽曳野市 徳山みつこ
 和歌山市 福本 英子
 西宮市 西口いわゑ
 今治市 野村 京子
 大阪市 神夏磯典子
 和歌山県 小倉 アサ
 米子市 田中 亜弥
 東京都 山口 新子
 米子市 政岡日枝子
 宿毛市 岡村 千鳥
 鳥取市 小谷美ツ千
 羽曳野市 芦田 絢子
 和歌山市 古久保和子
 兵庫県 倉垣 恵美
 芦屋市 黒田 能子

この波に乗るとみんなに会えるだろう
 残り火を大事に守り辞書を引く
 チカチカと光を出して拗ねている
 喜劇ならピエロになって悔いはない
 私に見合う器が見つからぬ
 つぎはぎの袋も念を入れて縫う
 何はともあれ老母に三度の粥をたく
 聞き流すことで悟った振りをする
 天辺の鴉よ誰に目をつけた
 転んで起きて明日は存せぬ姫タルマ
 裏切りの冷たい風が吹く五月
 過去のこと言わぬ涼しい石になる
 傷ついて指一本の重さ知る
 足のタコ無理を悟っているようだ
 雨降ってでんわ訪問しています
 聴き取れぬ耳を庇っている笑顔
 小骨の多い女を三枚におろす
 明日の絵に重い期待をかけ過ぎる
 矢がつきてうまい話へ乗りたがり
 検査値をくらべ合っている姉妹
 故郷の画布いっぱいいに亡母をかく
 嫁さんと内緒内緒の話する
 導火線そしらぬ顔をして濡らす
 お手をして家族になった迷い大
 ラッキーが舞いこむだろう今朝の花

八尾市 高橋 夕花
 姫路市 中塚 遊峰
 米子市 金山 夕子
 米子市 木村富美子
 倉吉市 米田 幸子
 米子市 石垣 花子
 米子市 野坂 なみ
 和歌山市 吉村さち子
 米子市 鹿島 蘭
 弘前市 一戸 ツネ
 富田林市 藤田 泰子
 鳥取県 吉田孔美子
 出雲市 園山多賀子
 寝屋川市 籠島 恵子
 鳥取県 田村きみ子
 鳥取県 岩崎みさ江
 和歌山市 木本 朱夏
 鳥取市 植田 一京
 和歌山市 北山 好笑
 寝屋川市 平松かすみ
 倉吉市 最上 和枝
 西宮市 亀岡 哲子
 寝屋川市 森 茜
 横浜市 清水 潮華
 八尾市 大内 朝子

深入りをして悩み事背負い込み
 店仕舞いセーブル買わずにおられない
 水一杯 五臟六腑へ活を入れ
 里帰りだんごと餅の供つれて
 運命を背負い歩は歩の道を行く
 合掌をされてますます荷が重い
 さくら貝探す乙女に戻れたら
 淋しさを満たせる如く花を買い
 しあわせな鬼の素顔をみてしまふ
 まっ白い足袋を信じた影法師
 規則正しい日々が我が家の常備薬
 足音がもう響かない父の靴
 理想には遠い夫と馬が合う
 地図に無い三途の川の回り道
 筍梅雨 掌の温もりを確かめる
 しみじみと書き速達で出す手紙
 そろばんをはじいて花にそむかれる
 日替りの愛で弁当箱洗う
 今にして被災ずきんの縫い方を
 育んだ夢が虚像と化していく
 母逝って父の冬眠ながすぎる
 窓開けて日々好日の風を入れ
 ハンドルの気ままにまかす春の山
 姑は負けるが勝ちの札を取る
 湯水を忘れてぐちる長い雨

香川県 辻上よしみ
 堺市 谷平 照
 松江市 浦辺 静江
 兵庫県 中野とよ子
 倉敷市 小野 克枝
 岡山市 川端 柳子
 大阪市 松尾柳右子
 大阪市 三浦千津子
 八尾市 村上ミツ子
 倉吉市 松本よしえ
 鳥取市 坂田和歌子
 羽曳野市 吉川 寿美
 和歌山市 杉山 精子
 岡山県 山本 玉恵
 和歌山市 榎原 公子
 柏市 上鈴木春枝
 鳥取県 さえきやえ
 藤井寺市 高田美代子
 守口市 結城 君子
 和歌山市 山口三千子
 兵庫県 北川とみ子
 寝屋川市 坂上 高栄
 和歌山市 細川 稚代
 米子市 小塩智加恵
 寝屋川市 堀江 光子

太陽の絵筆みごとなあかね空
 朝の鏡までも嫌いを繰返す
 見聞きして私が蝶になりました
 湯のたぎる倅せ妻がいてくれる
 子約席あるので急ぐことはない
 七転び八起きを包むオブラート
 手のなかをつるつと抜けた嘘ひとつ
 翔んでとんで着い空を見うしなう
 まじまじと自分透している鏡
 うっふっふ一人笑うた宝くじ
 ここだけの話 鬼が聞き耳立てていた
 故里は津軽の富士の懐で
 ほどほどに枝をいじめて花を待つ
 まごころは陰口なんかたたかない
 足の裏に見せてやりたいあかね雲

大阪府 藤田頂留子
 西宮市 奥田みつ子
 和歌山市 山裾かず子
 和歌山市 藤井 春子
 米子市 青戸 田鶴
 鳥取県 小西五十鈴
 富田林市 片岡智恵子
 米子市 白根 ふみ
 大阪市 日阪 秋子
 和歌山市 福井 桂香
 松江市 佐野木みえ
 青森県 福士 トキ
 広島市 森田 文
 鳥取市 西原 艶子
 米子市 澤田 千春

一句目―女の六十代の有りようを「ひらがなで遊ぶ」で、過
 不足なく表現されている。作者の来し方の上に立った、充実し
 た日々が彷彿と浮かぶ。読む者の胸にはほえましく、明るく迫
 ってくる。二句目―幾種類もある中で「眠り」は、大変頼りに
 なる薬だと思ふ。目が覚めると、悩みごとが雲散霧消している
 であろうことは、想像に難くない。三句目―幸せであればある
 ほどつる、掴みどころのない不安感、それを手足の冷えを借
 りて的確に言い当ててある。四句目―大胆な句作りで、読む者
 を無理なくメルヘンの世界へいざなう。ともすれば駄作になり
 がちな発想を成功させたのは、作者が心からこの空想を楽しん
 でいるからにはかならない。

追悼 西尾 栞先生を偲ぶ

告別式弔辞

仲川 たけし

社団法人全日本川柳協会常務理事、川柳塔社名誉主幹西尾栞先生の御霊に川柳界を代表して心からのお別れを申し上げます。

西尾先生には大人の風格がございました。それは社会人として積み上げられた徳行と、詩人としての資質を、六十五年に亘る川柳生活で研鑽なされたたまものと存じております。西尾先生は昭和六年の天神祭の日に発足した阪大川柳会で、麻生路郎先生に初めて川柳の指導を受け、

温泉や 座り羅漢に寝る羅漢
という句で、いきなり第一席を獲得されました。二十一歳の若い日の句が、一昨年の夏、香川県白鳥町に句碑として建立されたのでございます。

常に川柳界のエリートとして、作品の指導と東西川柳界の交流に尽力され、今日の川柳隆盛に多大の貢献をなされました。全日本川柳協会が社団法人に認定されたのもそのお力によるものでございます。また何よりも麻生路郎先生の意志を継いで川柳塔社を和やかな大柳社に育て上げられたことは、川柳界のひとしく羨望して止まないところでございます。

一歩出すれば吾れ旅人となる心
旅がお好きだった西尾先生の快心のお作が川柳生活五十年の記念に、聖徳太子ゆかりの地元、將軍寺に建立され、今も先生の「行雲流水」のお心を世人に語りかけているのでございます。句集『水鶏笛』と『西尾栞川柳全集』の二冊の作品は、後進をいつまでも導くことでありましよう。

西尾先生のご人徳は、しばしば催されるお祝いの会によってもうかがえるところでございまして、昭和六十年九月には喜寿金婚の祝賀会、平成元年七月には叙勲記念の大会、昨

年一月には川柳塔誌寿八百号の大会と、いずれもの大盛会は、まだ印象に鮮やかで、殊に後進に道を譲つての勇退宣言は感銘深いものがございました。

川柳塔は極高薫風主幹を盛り立て誠に充実した運営ふりを示しておられ、ご同慶に耐えぬところでございます。

川柳塔社の隆盛と、お孫さんお曾孫さん合わせて十四人というご一家の繁栄も故なきことではなく、この世からの大往生ぶりまで、まさに達人の見事さでございました。

川柳界一同、心からのご冥福をお祈り申し上げます。

大物が来たと路郎が連の句座

(全日本川柳協会会長)

シオリちゃん

東野 大八

孫のひろこが保育園時代のこと。何気なく

栗先生に、その頃のスナップ一枚を進呈申し上げたところ、すっかり先生のお気に入りになり、「ひろこちゃんへ」と年に数度のプレゼントを頂きました。

ぬいぐるみのネコや、スーツや、財布や、勉強用のねんねこに、旬の折節には、大阪名物のエトセトラを次々お贈り頂き、おかげでおじちゃんのほくも大変なお相伴にあずかりました。

ひろこはいつか頂くのが度重なるたびに、親しく「シオリちゃん」と呼び、中学生になったころは、西洋の有名な童話の「あしながおじさん」と作文に書くようになりました。

お顔もみなくて、次々と高価な贈り物に、ひろこにすれば、その童話の心やさしい贈り主への感謝の気持がそうさせたのでしよう。

ひろこが高校二年生になった昨年、大山の鶴かご川柳大会に、先生と薫風さんがゲストになってお出でになるのを知ったひろこの母親と彼女は、「今こそあしながおじさんにお会いして、多年の恩返しのお礼を……」とイソイソと出かけたのです。

それを知った主催者の佐藤一粒さんのあたたいお心くばりで、花束贈呈という、晴れがましい一役を演じたのです。

「コーンして、お顔がよく見れなんだワ

よ。足がガクガクしてね」とそれでも彼女はごきげんで、深い吐息をついていたのを、その帰りにみつめ、ちよつとした感動を味わいました。

その、足長おじさんの大好きな方のお葬式とあって、彼女はアルバイトで貯めたお金をお香奠袋に収め、八尾のお葬式に出かけたほくに、「よろしく言ってネ」と涙声で申しました。お棺に収まっていたら、こんろん山中の仙人のような、神々しいお顔の横へ、二本の百合の花を置きました。一本はひろこ、一本は四十年という長い長い歳月が風雪の中を交誼頂いたばかりのまごころなのでした。



中国吟行の旅（昭和59年9月）

老醜のぼくの眼からは、涙が滝のように溢れました。「シオリちゃん、さようなら」それはひろこの声のようでした。 合掌

（全日本川柳協会顧問・川柳塔社相談役）

一緒に歩き、

たかった葉さん

山田良行

青森から函館へ渡る青函連絡船がまだ健在だったころ、青森駅から阜頭に向かうプラッツトホームを老夫婦が仲良く歩いていた。見ると西尾菜さんご夫妻だと思ったのだが、それにしても「主人が杖を手をしているし、よく似た方もいるものだと思った。でも近づいてハッキリ拝見すると、やはり菜さんと奥様であった。歩くのにご不自由なんだと思ったのは、そのころからである。

大阪梅田の駅裏で毎月開かれていた日川協の常任理事会（後に幹事会）で菜さんと月一度はお目にかかった。時々、会場へ行く道で追いつくことがあって、その度に「私にかまわず先に行ってください」と言われた。ゆつくりと歩いていらっしやる菜さんに歩を合わせるのには確かに楽ではなかったので、私



喜寿・金婚記念川柳大会（昭和60年9月）

がちだったので、私が最後にお目にかかったのは、塊人さんの句碑建立の時ということになる。お元気で笑っていらつしやつたのを今でもありありと思い出す。いい笑顔だったと思つ。いい後輩たちに恵まれて、いい笑顔になったのだと思つ。

梅田の駅裏の道を乗さんの歩幅に合わせてゆつくりと歩き、お話をうかがうのだったと、今思ひ出して悔やんでいるが、もう乗さんと話すチャンスは無いと思つと、涙が出て来てしまつたのである。（全日本川柳協合理事長）

大阪川柳人クラブ

磯野 いさむ

一枚の写真がある。西尾菜、渡邊蓮夫氏と私が青森市松原の棟方志功記念館の前で撮つたものだ。市民図書館と並ぶ校倉造りの二階で自慢の前庭で三人が和やかな顔をしている。

青森に縁故のある菜氏の案内で二階の展示室へ上がると、右の部屋に十二点の額に仕立てられた「釈迦十大弟子」が圧巻だ。その隣が「東北経鬼門譜」その下に佐藤一英の詩と棟方の画魂が寄り添つた絵巻風の板画「大和し美し」が飾られている。三人はそれぞれの解

釈で感嘆し首をかき上げて語つたが、志功の官能的な豊富な女性画の前では菜氏の鑑賞ぶりがことのほか楽しそうで、和ませてもらった。志功の画は大阪のスエヒロ店に数多く飾られているので見なれてはいたが、記念館の大作、秀作には圧倒された。

全日本川柳協会の第六回全日本川柳青森大会が昭和五十七年六月十三日、青森県農業会館で催された時の観光コースで私達は名画に触れ、語りあえたのだ。

日川協の常任幹事会で毎月顔を合わせて出版委員長の菜氏と、大会委員長の私が意見を述べ企画を交換する時は、あまりにもビジネス的に味けないことが多い。

それに比べて楽しいのは大阪川柳人クラブの集まりだった。特に忘年会が三ツ寺筋の「網元」で開かれる折り、蟹料理とカニ鍋をつつきながら上座に座る菜氏のユーモアと洒脱な語り口にひきこまれ、つい盃を重ねすぎることもしばしばであった。

菜氏が川柳塔主幹のポストに、私が番傘主幹のポストに座つたのは同じ昭和五十七年頃だったとおもつ。麻生路郎氏の遺産、教えを継ぐ菜氏、岸本水府氏が唱えられた教えを継ぐ私と同じ形態で二人は大阪柳界を背負う立場になった。構想社出版の川柳全集で「西尾

は無情にも追い越してしまつた。

歩くのは遅かつたかもしれないが、頭の回転はお速い菜さん。会の席に着かれてからのやりとりは、とても鋭かつた。マクドナルドの広告が座つていらつしやるようで、堂々たる貫禄だった。

句碑をお建てになつた時、叙勲のお祝いの時、塔の記念大会の時、私はご挨拶の機会を与えられ、マクドナルドなどと失礼千萬なことを申し上げてしまつた。ごめんなさい。

主幹をお譲りになつて日川協の会にも欠席

栗『磯野いさむ』句集が前後して刊行されたのもその頃だ。更に政府から木杯一組の叙勲の榮譽に浴し得たのも昭和の終り頃と平成の初め頃と、似たコースを歩んできた。またともに日川協と大阪川柳人クラブのためにいい仕事が出来たのも、栗氏に励まされたところが大きいと、いまつくづく思う。

(番傘川柳本社主幹)

お心安かれ

去来川 巨 城

としよりのあんなすがたになりたいな

竹 二

何かのことで、この作品に触れるようなことがあるときに、必ずといってよいほど、すうと胸に浮かんでくるのは、栗さんの風貌であり、温かさの溢れている微笑である。

私の知っている柳界では、誠に多くの先達がおられて、いろいろの意味で訓えられ、悟らされて、限らない豊かなおいを与えられたものだった。そんな中で、「できることなら、私もあんな老人になりたいなあ」と、栗さんをひそかに目標にしていた。たぶん、こんな思いを抱いておられる方々は他にも多

いことだろう。何気ないたたずまいの中に、溢れるふかい教養と、温かい愛情のなせるすがたで、それは頼り甲斐のある、人なつこい情緒でもあった。

何千年も経てきた大木が、闇の中で一条の光を受け、その精霊をあらわにすると、崇高とも神秘ともいえるところの詩が生まれると聴いているが、世に創造を称える営みで生きている慶びを感じる私たちは、言葉の交流が無くても、その人が存在するというだけで、とても和やかで、うるわしいものを享受できる雰囲気が生じさせられることがある。そんな得難い人徳を持ち合わせている方であった。

柳界は正に、大きい有益な財産を失ったと感じた。これはどんな人々にも言えることであらうけれども、心から尊敬できる映像などそうざらにあるものではないとしみじみ思う。師表としてよい人をなくしたことは、全く残念で、惜しみて余りあること……。

生意気なことで申し訳ないが、残された者としては、今後の精進をお誓いするより他にない。いまは唯々、心安かれとそのご冥福を心からお祈り申し上げます。

合掌

(ふあうすと川柳社顧問)

遙かなり六十五年

小松原 爽 介

西尾栗川柳全集(構造社出版)の川柳概論の中で、栗先生は「恩師路郎の提唱された、人間陶冶の詩に凡そ程遠いが、一步でも半歩でも近づいてゆくように努力したつもりである。師は十七歳の年より七十七歳の生涯まで六十有余年、川柳に骨身を削られた。私は五十年を少し過ぎた許りである。あと十年余で、先生の足許まで行けるかどうか誠に心許ない」と述べておられる。川柳を始めたのが昭和六年というから柳歴は六十五年ということになる。私の柳歴は四十年である。自分ではひとかど川柳が分かったような顔をしていたが、栗先生のこのひと言に接して、何だか気恥ずかしい思いをしたことがある。

事務連絡でも私信でも、最近はずべてワープロで済ませる傾向があるが、栗先生は、ちよつとした札状でも巻紙に達者な毛筆で書いてこられた。明治生れの人間の律気さもあるうけれど、しかし、そんなことにも「川柳は絆である」という栗先生の信条と人柄がうかがえるのである。私は今もその手紙を机の抽

斗に大切に保存している。

栞先生はジョークのうまい人だった。大会などの披露の前にちよつと真顔で述べられるジョークは、大会の緊張感をほぐす一服の清涼剤の感があった。平成三年二月、芦屋のラポルテホールで開催されたNHK大会の懇親宴で、栞先生の隣席に座ったが、その時、「時の川柳はべっぴんさんがたくさんおつてよろしおまん。うらやましいですわ」と、言われたことがある。私はすかさず、「今からでも遅くないですよ。時の川柳に来られたら如何ですか」という私の答えに何々大笑された。

五月十七日、八尾市の八光殿でとり行われた告別式には、立錫の余地もないほど会場は



路郎追悼川柳大会（昭和62年7月）

柳人で埋めつくされた。泉下の栞先生も、六十五年の川柳一筋の生きさまに、さぞ満足されているような気がする。

（時の川柳社主幹）

栞先生を悼む

北 畑 金 治

西尾先生と同時に八尾ライオンズクラブに入会してから三十四年になります。長いお付き合いでした。

西尾家は旧八尾木村の村長をつとめられた由緒あるお家柄です。私は和歌山の出身で、昭和三十六年から八尾に来た新参者でありました。それが先生と親しくご交際をさせて頂くようになったのは、今から十一年前に私がライオンズクラブのガバナーに就任して、一万数千人の会員に川柳を作るようお願いし、一千句に近い投句を得て「ライオンズ柳壇」という句集を作り、先生から「川柳の心」という序文を頂いた時からです。その中で先生は、「およそこの世の中で、永久に変らないものは、一つには天地万物の形の美しさ、四季のうつり変りのうつろしき、今一つには人の

世の情、親子、兄弟姉妹、友人、夫婦間の愛情の美しさであつて、この二つの外にはない。これを基盤にして、川柳翁は選をしたから今日尚川柳なる言葉が残り、人口に膾炙される所以である」と申しておられます。

先生と親しくさせて頂くほどに、先生の人への世の情けを重んじられるお気持がひしひしと身に沁みて来ました。ライオンズクラブの例会場では、必ずご自分から先にご挨拶に来られました。私も負けずにこちらからご挨拶をしなければと思ひ、努力致しました。こういうところが先生のお情けの深いところで、我々後輩は知らず知らずのうちに先生に感化され、楽しい人間関係を作ることが出来るようになりました。

五月の連休の一日、先生宅へお伺いいたしましたら風邪を引いて熱が下がらないのと、ご入院をお奨めいたしました。数日して病院へお見舞に参りましたら、枕許には硯箱が置いてあり、お元気にベッドから降りてご挨拶をして下さいました。これなら近いうちにご退院出来るだろうと思つて帰りました。しかるに十五日早朝、奥様から夜中に亡くなられたとのお電話を頂戴し、びっくりいたしました。

（ライオンズ柳壇代表）

忘れられぬ温顔

工藤 甲吉

西尾葉名譽主幹の死去を「川柳塔みちのく」代表波多野五楽庵さんから突然電話で知らされたとき、私はしばし呆然と立ち尽くしたのであった。それはあまりにも急であつたからである。

私と葉先生との交際が本格的になつたのは随分古く、それだけにその思い出は数々あつて、筆舌に尽くしがたい。

最初の出会いは昭和五十五年八月、私が母と妻の年回忌法要を修するために永平寺（福井県）、延暦寺（滋賀県）へ参詣の途中、大阪に立ち寄つたときであつたと思ふ。

「青森から工藤甲吉が来阪される報せが入つた。急なことなので、皆さんにお知らせするのに郵便では間に合わず、電話を利用するより方法がない。同人名簿を二分して、前半を岳人さん、後半を葉さんがグイヤルを回しはじめた。『参加します』『ぜひお会いしたい』等、たちまち歓迎陣は予定の人員をはるかに超過した。生々庵主幹と薫風さんを除い

ては、他の人々は初対面である。云々（高杉鬼遊・『川柳塔』六四一号）。

そして歓迎句会は、二十六日夕、「なにわ会館」で開かれ、席題「珍客」を葉先生が選し、軸の句は

珍客はきつちりネクタイ締めていた 葉となつてゐる。

晩年は、平成六年、私が皆さんのご協力できさやかな句碑を建立するにさいし、川柳塔誌上に「甲吉句碑建立のよろこび」と題し、巻頭言でご協力を呼びかけてくださつて、十月十七日の除幕式にはご老体をいとわず奥さんご同伴で、薫風理事長（当時）と共にわざわざご参列、錦上に花を添えて下さつた。さらに昨年十月、私の句集出版に際しては、こ



受章記念川柳大会（平成元年7月）

れまた、川柳塔の巻頭言で前置伝して下さるなど、有難いことが二年にわたり続いたことが忘れられない。（川柳塔みちのく顧問）

川柳塔でお会いを

月原 宵 明

葉名譽主幹ご逝去の悲報は五月十五日午後、高槻市の川島颯云児氏から懇ろに知らされ、ご葬儀も十七日行われる由、承りました。

かねてより感冒で入院ご治療中と聞き及んでいましたが、このように進行するとは露知らず、実は私も去る二月中旬から腰椎圧迫骨折で入院し、四月末、一応退院しましたが、当分、安静を強いられるの自宅療養です。八尾市まで葬儀出席は不能で、最後のお訣れが出来ぬ無念さに堪えられず、葬儀当日は八尾市に向い合掌し、黙禱を捧げてお許しを乞いました。

私と川柳塔との因縁は、昭和七年、川柳雑誌今治支部へ入会、麻生路郎先生との初対面より始まり、戦時中、雑誌休刊以外は今日に至るまで、三代の主幹にご指導を蒙りました。最も接触を深め薫陶を受けたのは、名誉主



川柳塔碑除幕・開眼式（平成元年11月）
一向って右は中島生々庵夫人、小石さん

私達の四国は海を距

てて交通不便で、常に疎遠に打ち過ぎていま

したが、忘れられないのは、平成六年六月十

四日、第17回全日本川

柳愛媛大会の翌日、西

尾名督主幹とご息女、

薫風現主幹の三名が、

大三島神社参詣となり、

我々汐風社三名がお供

をして、参拝と観光に

満足された主幹らを、

大三島港でお見送りを

しましたが、何の気兼

ねもない楽しい一日で、今にしてみれば懐かしい限りであります。

更に私こと平成六年一月、川柳塔八〇〇号記念大会には、不肖を顧みず特別功労者として、賞状賞品拝受の面目を施したことは、終

生忘れる事が出来ません。心残りには名督主幹の米寿祝が出来なかつたことであります。

高野山の川柳塔で再会致します。

（汐風川柳社会長）

ひとり旅

恒松町紅

部屋に一枚の色紙が飾つてある。その色紙は「益に島の唄ありひとり旅」の句と、彩色のオコゼの絵が描かれた栗先生の作品である。何時何処で貰つたのか忘れたが、たしかある大会での賞として戴いたのでなかつたかと思ふ。

今年の一月十五日のおめでとう会に、一時間遅れて出席した私たちを快く迎えていただいた温和な白髯の笑顔が、わたしの記憶の中にまだ新しくはつきりと映っている。まさか、あれが最後のお別れになろうとは、神ならぬ身の露ほども予感は無かつた。聞くところによると、健康には自信を持たれ、まさか風邪ごときにというひとときの油断が、病をして不帰の客とならしめたのではなかつたらうか。天地鳴動して大樹の転倒するようないふふな惜しまれる終焉であつた。

十五日早朝の板尾岳人さんからの訃報を聞き、ただ驚愕・呆然とした訳で、今だに悪夢を見ているようで、目覚めることもなく実感

幹でした。大世帯の川柳塔を背負う大黒柱は、余りにも好々爺らしく、堂々たる体躯からは威嚇威厳でなく、フツとユーモアを発し、表裏ない親父然たる主幹に親近感を覚えまして、そして驚いたのは、毎月の川柳塔の「巻頭言」の名文で、ここでの博識多才に、私はいつも三回四回と読み返したものです。

名督主幹の日常を見て、塔のスタッフは各自先輩・後輩の絆は堅く強く、心友としての情愛は深く、川柳即生活の一線に連なっているように見受けられました。

が湧いて来ない。

いつお会いしても温和な白髯の笑顔で語られるユーモラスな話術に尊敬もし、父のような兄のような、そんな親しみの湧く先生であった。しかし、二度と再びあの白髯の温顔に接することはない。そしてこのよき指導者を失った空しさは、とても筆先では現すことが出来ぬ。

葬儀の当日は、日限の仕事もあって、参列出来なかつた事が悔やまれるが、遙か山陰の地から、先生の恩恵に感謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

合掌

(川柳塔まつえ吟社主幹)

栞先生を偲ぶ

田口 虹汀

栞先生との出会いは昭和六十一年六月、全日本川柳別府大会参加の折で、太茂津先生が選者で見えておられ、前夜祭の席で紹介頂き、正敏、高明、朴菟、虹汀の四人が栞主幹の前で畏まったものです。二回目は同年十一月九日、第十七回唐津市文化祭参加川柳大会、宿は東唐津洋々閣で当時は道路も狭くバスが入らなかつたため、先生の巨体にご足労おかけ

したことをはっきり記憶しております。その

日は鏡山一七ツ釜と名所巡りでお疲れだったので。三回目は城内閣で美与子夫人ご同伴の旅で吉野ヶ里の帰途、武雄温泉旅館京都屋へ野田旭恒さんと二人でお迎えに参りました。呼子の松浦漬本舗のお買物が主で、佐世姫の田島神社に詣でてすぐ帰館いたしました。

第四回目は第十六回全日本川柳和歌山大会で、太茂津先生へご報恩の一端と唐津支部から七人参加、前夜祭の席へ栞先生がお見えになり、「虹汀さんコップの色が違いますネ」とジュースの入ったコップを見て言われたことが頭に残っています。

第五回目は平成四年十一月二日、支部結成十周年記念行事としてかねて懸案の山笠見物と川柳会が実現出来たのです。正敏さん、四郎先生、虹汀と夜の町の案内役と栞先生のお世話は、山門幸夫さんが美事な案内振りです。幹も大変喜ばれたと承っています。

栞先生ともやつと親しくしていただいて、これからという時に、何としたことか夢のような訃報で何回も聞き直したくらいです。

水鶏庵先生お安らかに言葉なし

「人恋し人煩わし波の音」の染め抜きと、「元旦や我れ泰山の如く座す」の短冊は我が家の宝です。先生こらむでお会いしましょう。

合掌

(川柳塔唐津支部代表)

狸のおつちゃん

黒川 紫香

悲しいことです。亡くなる前夜、岳人さんから栞先生が危ないという報らせを受け、まさかと思いつつも心配で寝つかれぬままとうとうしていると早朝、訃報が届き、愕然としました。

栞先生との思い出は、すべて楽しい事ばかりで、よい師であり、よい友でした。齢は私が二つ上でも、路郎門を叩かれたのは二年先輩で、いつもここにこと戎さんのような馥郁とした慈愛に満ちたお顔が皆さんから親しまれていました。

私の祝事(喜寿、傘寿、米寿)には、お優しい奥様と共に心から祝って下さったり、尼崎市の公園に句碑を建てられたのも、先生のご発声とお力により、川柳家の皆様のご支援によって陽の目を見た事です。感激の極みでどうお礼を申して良いか判りません。

旅行好きの先生に数ある逸話の一つには、先頃出版された「水鶏庵こらむ」の中の海潮温泉の項には書かれてはいないが、宿の人達

から、狸のおっちゃん」と親しまれた奇行がありました。それは先年、川柳大会で出雲へ一人旅をされた折、私に「紫香さん、出雲の温泉で静かで味が良く、いい露天風呂のあるところ知りまへんか」と言われるので水客君も推奨する奥出雲の入口で、松江から車で約一時間の所にある海潮温泉の海潮荘が宜しゅうおまんなど教えると、早速、行かれたと見え、帰って来るなり、「ええとこ教えてくれはった。静かで味もよく、露天風呂は一級品でんな」と喜んでもらったので、翌年、木次へ行ったついでに泊り、お内儀に話をする、係の八重ちゃんという女中さんが、「ああ、あの時の狸のおっちゃんですか」と笑い転げるので理由を聞くと、川柳の大先生だと教えられたので、庭園にある一戸建の離れへお泊めしたが、夜中に叩き起され、「あんな淋しい狸の出そうな部屋では寝られへん」とご自身が狸のような大きいお腹を抱えて言われるので別の部屋へご案内した。その時の格好と喋り方がおかしゅうてそれ以来、みんなで、狸のおっちゃん」と親しまさせてもらってますと懐かしんでくれました。それやこれやで尽きぬ思い出のいっぱいある先生でした。本当に悲しいことです。永年有難うございました。安らかに眠って下さい。合掌 (川柳塔社相談役)

羅漢さんに

高杉 鬼遊

五月十五日午後四時、薫風主幹に同行して「水鶏庵」西尾菜先生宅を弔問する。いつもは気安く訪れる、格子門から玄関までの敷石の径も緊張してならない。早速、仏間のご遺体と対面する。奥さんの配慮により、奇麗に散髪されたお顔には眼鏡が掛けてあり、安らかに眠っておられる。正に羅漢さんのお顔である。

ご近所でも旅先でも、菜さんは（先生とお呼びするよりこの方がびったりする）よその児を大変かわいがられた。その児もそれに応えるようにすぐに懐く。眼鏡をかけ髭の貌の羅漢さんが、なぜなのか私には不思議に思えてならなかった。ある日、よその児に接する情景を目にして発見したのは、腰を低くして同じ目線の高さで話しかけておられた。それは姿勢だけではない児との同一化であった。こころの交流だったのである。いつも柔和な表情でおられることは、修練されたにんげんの芸だと思つ。



句碑建立（平成5年8月）

同じ八尾市在住だと言つこともあり、二度の勤め先としてお世話になったこともあって川柳だけでなく、社長、社員として大変近くして頂いた。私が川柳塔に入つて四、五年後のころだと思つが、本社会会の帰途、タクシー内で「八尾には句会がない。一つ句会を作ろう」と勧められ、できたのが「川柳塔八尾支部 菜の花句会」だった。発会は昭和四十六年二月七日、菜さん宅で、出席の顔ぶれは、橘高薫風、阿部柳太、菊沢小松園、香川酔々、藤井二三、谷垣史好、飯田一治、荒木鶴翠、古川鶴声、加藤河産、野坂つき子、河内天笑、吉居奈々、浜田儀一各氏の十六名で、傍島静馬氏の投句参加と記録にある。

今にして思えば、会社も菜の花句会も私が幕ひき役だったことが悔やまれてならない。(川柳塔社副主幹)

「おやしきさん」

渡邊蓮夫

国民文化祭が発足する前に、短詩文芸各分野の人たちが文化庁に招かれ、会議が持たれた。川柳からは藤島茶六さんと西尾菜さん、それに私が参加した。他の部門も含めて遠方から来られたのは菜さんくらいではなかったかと思う。ここで短歌、俳句、川柳とも国民文化祭に参加することが決定した。

この後、大会実施案を作成するに当たって、西からは選者に菜さんと磯野いさむさんをお願いした。ちなみに東は野村圭佑さん、尾藤三柳さん、私。茶六さんはこの会議の帰りに怪我をされ、以後、私が企画立案、予算決算までやることになった。菜さんはこの第一回の大会に選者をされたことを大変喜ばれて、後々まで謝意を表された。私としては最初の会議に出ておられるので当然と思っていたから、謝意には当たらぬことで面映ゆい思いがした。菜さんと麻雀をしたことが一度ある。大陸同窓会の最後の時かと思っていたが、その時の名簿にはお名前がない。どこであつたらう

か。薫風さんもおられたと思う。いつもは私と話をされる時も丁寧な言葉づかいでにこやかに話される菜さんが、この時はどうにも賑やかで元気はつらつといった麻雀であつたことが強く印象に残り、その後、以前どおりの会話をしても、その後ろにあの時の菜さんが浮かんで、私との会話は公式用という感じもしたりした。薫風さんが「おやしきさん」と呼んでおられたが、本当はやはり「おやしきさん」が似合う菜さんだつたのだと思う。

大阪には親しくしていただいている柳人も多く、大阪へ行くのも楽しいが、その中に菜さんがいなくなったということはやはりさびしい。亡くなってみて改めて大きな存在だつたという感じがする。御冥福を祈る。

(川柳研究社主幹)

どうぞごゆっくり

宮西弥生

五月十五日朝六時、突然の電話ベル。奥様から「今朝零時十二分、菜が亡くなりました」という訃報が耳をかすめました。

予期しないものが、私達を引き裂いたので

す。去る四月二十九日、ご入院から僅か半月のことではないですか。どうして、どうしてこんなに急いで逝ってしまったのですか。あれほど元気な先生だつたではありませんか。お見舞いに伺つた時は、あの大きな体のどこがお悪いのだらうかと思うほど、よくおしゃべりをされました。

「早く元気になって仕事をしないと」腕をぱんと叩かれたお姿。婦長さんに「ビールを吞ませたら食欲がもつと出るのに」と話され、冷や汗をかいた時もありました。

その日は久し振りのよいお元気で、奈良の唐招提寺の「うちわまき」に句を書かれるという最高の体調でした。菜先生はこうして生涯、退屈のない多忙な日々をお過してました。

一歩出ずれば吾れ旅人となる心 菜

先生は旅がお好きなことは有名でした。「一週間のうち、殆ど留守」で、奥様は常に先生をお待ち役だつたそうです。旅の郵便貯金にまつわるエピソード、美味・美酒家の先生の旅には笑いと道づれで楽しいづくしでした。こうして、各地域活動の交流も盛んで私達もよく参加させていただき、川柳の楽しさ、苦しさを満喫させていただきました。

晩年は足の痛みでご不自由になられました。が、各地へそれでも夫人同伴での積極的な活

川柳塔800号記念川柳大会



川柳塔800号記念川柳大会（平成6年1月）

川柳塔「永遠の不滅」としていつまでも、いつまでも光り輝いていることでしょう。
栗先生 有難うございました。どうぞごゆっくりとおやすみ下さい。（川柳塔社理事）

生涯現役

板尾 岳人

いつも全身が寛容とユーモアの心を持ち続けられた先生、行先も告げずにひとり旅へ。いくら旅好きな先生でも、黙って旅に出るとは悲しい。

亡くなられる前日は、五月十四日母の日である。ひと言奥様に小さな声で「六十年ありがとつ」と言われて数時間後の旅立ち、悲しい。

動に敬服するばかりでした。「慌てない。慌てない」と階段を一つずつ降りられるそのお姿が、私の臉にいつまでも消えないことでしょう。

毎月、『川柳塔』巻頭のエッセイを楽しみの一つとして発表され、私達を楽しませていただきました。有難うございました。

『水鶏庵こらむ散歩』が、今、私の本棚に

僕がお見舞いにお伺いした時、僕が「先生今、表装に出しますねん」と申し上げると「恥ずかしい」と申され、手で顔を隠された。ある山陰線のローカル線に乗った時、どやどやと幼稚園児が数十人乗って来て、車内は騒然となり、子供たちは走り回っていた。嫌な顔をする人もある中で、にこにここと懐から一枚の名刺を取り出し、一人の園児に「僕は

こう言うもんです」と渡された。その後、園児たちは走り回ることを止め、栗先生を取り囲んで握手攻めにあわれ、細い目をますます細くされたことが昨日のように想い出される。淋しい。

四月の始めに揮毫をお願いし、書いて頂いた軸が形見になるとは、悲しい。生涯現役で全うされた先生、何よりも惜しまれてならない。悲しい。

焼芋とアンパンがお好きだった先生、宅便で送ります。路郎先生との句会でみんなまで食べて下さい。書の三骨が満ち溢れる先生の掛軸を眺め、気品の高い、香りの良い、円満でやわらかい味のある筆の流れを見ながら、
合掌。（川柳塔社副理事長）

追憶

西田 柳宏子

5月14日、ご様子を伺いたくてもかけた電話に、奥様は急きこんだ口調で「今から病院へ行きます」と言われ、さむぎむとした胸騒ぎを覚えたが、ついに翌15日午前零時十二分、お亡くなりになった。

大きな心の支えを失った気がする。昨年の

川柳塔八〇〇号記念大会席上での引退爆弾宣言、そして十月の同人総会で正式に引退、薫風新主幹を中心に新役員で新しく船出したが、私達には後ろ盾として栗先生がいてくれるという安心感があつたことは言をまたない。

路郎先生の峻厳、生々庵先生の威厳、そしてそのあとを受け継がれた栗先生の温容に、川柳塔は他柳社も羨む和やかな、温もりある柳社として大きく伸びて来た。

一紀州や山陰、九州、四国と一緒させて頂いた吟行や川柳大会の数々の想い出が、立派な祭壇で、まるで大歌舞伎の大見得を切つたような先生のお顔写真にどつと湧いてきた。

私の骨折入院にも、わざわざお見舞頂いた感激も新たなものがあるが、何よりも私に一世一代の思い出のお手伝いをさせて頂いたのが、高野山大霊園に建立された川柳塔碑であり、先生とご一緒に行き、いろいろと打合せ平成元年11月12日、建立開眼法要にこぎつけた感激は、終生忘れ得ぬものとなった。

先生の川柳塔碑裏面の碑文の素晴らしさ。

俱会 一 処

川柳塔同人並に川柳愛好家は死して尚柳号で呼びあい永遠に川柳を語りあう

絆を以て此処に愉しく眠る

今年11月の合祀法要には、先生にも仲間入

りして頂くことになる。路郎先生始め多くの皆さん方と愉しく語り合い、お眠り下さい。

(川柳塔社理事長)

弔 電

団体 社団法人全日本川柳協会・同東京事務所・大阪川柳人クラブ・番傘川柳本社・ふあうすと川柳社・川柳展望社・川柳天守閣・都大路川柳社・鶴かご川柳社・川柳塔社・川柳えんぴつ社・弓削川柳社・川柳瓦版の会・広島川柳会・愛媛県川柳文化連盟・鳥取県川柳作家協会・鳥取川柳会・「太平洋の里」太田市長・大阪府警察本部なにわ編集委員会・川柳塔きやらばく・竹原川柳会・いずも川柳会

古田太虚・藤解静風・小島蘭幸・石原淑子・岩本笑子・山内房子・岡本清水・時広一路・田中好啓・野田素身郎・浜野奇童・二宗吟平・大森風来子・工藤甲吉・渡邊蓮夫・西村在我・舟渡杏花・蘭田猿香・月原宵明・白石春嶺・木村あきら・麻生アト・菅井康郎・泉比呂史・占部晴美・平山繁夫・中塚遊峰・神平狂虎・山本三郎・天根夢草・中田たつお・西村佐久良・柏原幻四郎・小野楠曠・中島志洋・正本水客

弔 吟

乾杯の笑顔なつかし臚月 安藤寿美子

陽が沈むよりも悲しき恩師の死 板尾 岳人

嗚呼悠々のお旅立ちさようなら 稲葉 冬葉

名舞台慈愛の披露さようなら 岩佐ダン吉

天衣無縫いま軽やかな旅人に 牛尾 緑良

走馬灯 恩師の笑顔ばかりなり 内海 幸生

逝く波へ誓い合つてるあおい海 小倉 アサ

慈父の声消え給いしか五月闇 奥田みつ子

咲き切つて柳友の待つ花浄土 柿花紀美女

温顔を胸に別れの茜雲 門谷たず子

名筆と名句を残し鬼籍入り 川内 叭笑

師の句碑も雨にぬれてる泣いている 川崎ひかり

嗚呼巨星墜ちて輪廻を知る涙 川島颯云児

旅人は五月の風にのつて逝き
川端 一步

色紙には墨痕哀し雨の詩
川原 章久

黄泉路の旅もあかかと炬を燃やしたい
金井 文秋

温泉に遺品のこして巨星墜ちる
木村あきら

愛弟子を待つ路郎忌の雲の峰
岸野あやめ

白髪のはほえみしのお青りんご
北川とみ子

むなしがも一度御名呼んでみる
北畑 金治

柳史にその名を永久に菜さん
北山 悟郎

波の音 黄泉路の旅ほどのあたり
吉川 寿美

宵曳山を愛でし慈顔にもう逢えぬ
久保 正剣

水鶏庵路郎訪ね旅に出る
工藤 吟笑

温顔のあの口髭が忘れず
工藤 甲吉

菜さん来られた声がもう届く
黒川 紫香

菜師の葬儀千人みんな弟子
小池しげお

惜別や「こらむ散歩」を読み返し
小出 智子

句座照らす灯が消えた五月雨
小林由多香

雲の句座賑やかになる菜さん
児島与呂志

宝翁の笑顔に永久を生かされる
酒井 靖子

巨大なる花の薫りよ永遠に
坂口 公子

幸せな丸虫抱いて逝き給う
坂部紀久子

峰遠し師は旅立ちてただみどり
桜井 千秀

名筆の題字に残る菜さん
塩満 敏

許されぬ時に旅立ち句碑のこす
新川マサエ

温顔に接し今宵もこらむ読む
田口 虹汀

思い出は尽きず先生さよふなら
田中 正坊

新緑の一樹となりて師は在し
田中 輝子

側々と句集に刻む師の心
田中 透太

もついちど声が聞きたい水鶏庵
高須賀金太

現世をいつばい生きて寝る羅漢
高杉 鬼遊

師の星がひときわ光る八尾の空
玉井 豊太

水鶏庵 一度叱つて欲しかった
玉置 重人

先生の御遺徳しのお紀の国で
垂井千寿子

南無阿弥陀仏白髭居士のひとり旅
恒松 叮紅

ほととぎす青葉の陰で忍びなく
寺田 裕美

数々の功德を持ちて逝き給う
天正 千梢

おおらかな笑顔のこして天上へ
天満三千代

人の世の定め悲しや師の訃報
富上 光代

われ一步還らぬ旅へヨッコラショ
遠山 可住

巨匠の訃わが魂も自失する
中井栄美子

思い出はヌードを共に見た恩師
中島 正博

ほほ笑んだ師の面影を句碑に見る
成重 放任

灰になる旅へ温顔遺し置き
仁部 四郎

温厚な笑顔のこし逝き給う
西口いわゑ

一步出す永遠の旅路となりけり
西田柳宏子

塔の空 水鶏はとわに羽撃けり
西出 楓楽

柳匠逝く浪速の空がさみだれる
西脇 富美

師を慕う急な訣れに眩暈する
野村太茂津

涙拭くことも忘れて立ち竦む
波多野五楽庵

句会での優しお言葉身に染みる
浜本 ちよ

米寿の宴待たず旅立ち五月闇
春城 年代

追憶に刻む優しいおん笑顔
福井 桂香

水琴窟ひびけ彼岸の師のもとへ
福本 英子

八面玲瓏 浄土へ歩む若葉かけ
藤井一二三

巻頭言もつと読ませてほしいのに
藤田頂留子

柳友に招かれ旅立つ天の句座
藤村 べ女

地団太を踏ませる恩師の手の温み
藤原ヒサ子

天空へ慈眼飄々翔び立てり
芳地 狸村

あがめる師米寿を待たず神となる
坊農 柳宏

逝き給うまだまださよふが言えせん
細川 稚代

先達として西方浄土へ立ち給う
堀端 三男

新緑へ優しい笑顔包まれる
松原 寿子

肩の荷をおろして名譽主幹逝く
三輪 通彦

天国へ白いスーツのいい笑顔
宮口 克子

お話は西尾菜で蓮の句座
宮口 笛生

温顔にもう出逢えない八尾の街
宮崎シマ子

師を悼み五月の空は哭きやます
宮園射月芳

お浄土で今日も先生を囲む宴
宮西 弥生

川柳の巨星還らぬ旅へ立ち
森 三枝子

おだやかな遺影の髭が灯に揺れる
森脇 和子

冥途への道は闊歩をして欲しい
楊井 二南

天寿全う大きな星よべレー帽
山崎 君子

お父ちゃん大往生へ感無量
山下美津留

ゆらり来よ梵鐘ひびく真田庵
山田 久子

巨星逝く柳誌ふたたび読み返す
山地マツエ

手を振って旅立ち給う菊ぐるま
山本 義子

お写真の笑顔にありし日を偲ぶ
吉田 笑女

巨星墜ち水鶏庵また読み返す
吉村 一風

西尾 栞50句

一步出ずれば吾れ旅人となる心
人恋し人煩わし波の音

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

旅枕雨にしあれば雨の詩

二次会で土産の鹿の角がとれ

お互いに中毒ですなと酌きこぼし

若旦那女将が出る可他愛なし

義理がたい人に元日起こされる

元旦や酒禪一味の心知る

万引の哀れ子供のもの許り

あの晩の風邪よと女うれしそう

ハンドバッグ迷える心パチつかせ

最後の最後の味方は妻なりき

牛の瞳に人間何をあわてとる

虞や虞や汝を如何せむ四十八

意見する儂がまだまだ遊びたし

孫が来て碁石がたりぬ駒がない

挨拶のものをもらった声となり

二階から一日降りず詩人とか

張り替えた障子の中に母います

あほになつときなはれという母があり

命の恩人へいつしか賀状だけとなり

みかんの筋きれいにとつてくれた恋

言い負けて二階へ来れば冬の雨
六十の恋も指切りして別れ

寝ころんで大きく蛹も旅のもの

逝く春や壺には壺の憂いあり

少年のこぶし開けば甲虫

頭ほど叱らぬ父でありにけり

新幹線隣は何をする人ぞ

てつちりや路郎門下の生き残り

ひよこひよこ良寛さんになる心

異性無視そなたのしいことをする

空蟬や我七十の掌に

和顔愛語元旦の心しる

軟座車のコンパは楽しジャスミン茶

葉漬川柳漬の余生かな

大寺の鷓尾仰ぐとき歩を正す

魯山人の器にもつた茄子の色

金木犀 裏返っている庭の下駄

天平の藝尊し春の星

ようきいとときやと妹ついでに叱られる

朗報や山茶花咲いた今朝の晴

豊明殿妻と伺候の菊日和

白菊一本咄々語る老画伯

瀬祭の片肱枕子規の城

晴れた日の灯台孤高の美しき

伊達巻の後ろ姿へ湖は暮れ(新婚旅行)

百までも生きる努力をする八十路
紅白の梅凍てにけり夫婦星

塔

佐治千加子選



ライバルの塔へ近づくと石を積み
傾いた塔の上にも朝がある
あの塔を登りつめてる豆のつる
オウム教の塔が崩れる世紀末
五重の塔人住まぬから拜まれる
支えたい塔があるから生きられる
雨よ心してポトトタワーの灯がにじむ
母逝って少し傾く父の塔
雪の塔女人高野の冬が好き
オーデコロン男は枯れず塔に棲む
塔に来て羅漢と対話して帰る
淋しさをガラスの塔に埋めてみる
寄りかかる塔の柱にある温み
背伸びなどしない通天閣が好き
殿様の城より高い塔が建ち
一匹の蟻の歩幅で挑む塔
ピサの斜塔に似たビル悲し被災の地
春の風塔の匠の逝き給う
一つ積み二つ崩れて石の塔
秋の塔夕陽に返すものがある
父よ母よ同行二人五輪塔

希久子 富喜子 志重 凡々子 照 美つこ 寿美 達子 雄々 博友 ツネ 悦男 保州 佳雲 高夫 多賀子 章久 雅城 清芳 芳郎

塔のある街で孫らと鳩を追う
傷だらけの塔をいだいて生きて行く
石楠花をまといはんなり小さな塔
逆風に耐えゆるがなない父の塔
塔少しいびつに見えて病がち
金字塔に父の軍手が干してある
たどりつく塔が探せぬ古昔広
傾いた塔のルーツに酒がある
鉄塔に登り突然命乞い
異次元につきささってる塔の先
倒してはならない父の塔がゆれ
テレビ塔目印にして来いと言っ
鉄塔がみどりに光るみどりの日
直立不動の塔に男の野心積む
ぼちぼちと自分の塔を積み上げる
佳

一風 芳水 良江 俊路 あやめ 四郎 勇太郎 寿恵子 一花 あずき ちかし 富美子 姫女 彩子 ミツ子 重人 ふさ子 たず子 智加恵 あきら 旋風

旅慣れて財布は三つ持って出る
行けるあてのないに予約したくなる
旅先で描く風景を目が求め
妻に様書くも久しい旅だより
旅の宿お国説りの輪が弾む
西東 大差感じぬ旅の膳
信心とは別にジープン遍路旅
旅慣れて軽いカバンに持ち替える
かき捨てた旅の恥見る気の重さ
世界地図広げ漫遊しています
時刻表 机の上の旅に出る
遺されてまだ夢を追うひとり旅
心から笑える友と旅に出る
部屋割りの不満浮かないままの旅
旅に出て詩人になれず駅うどん
連休も家族ばらばら旅に出る
相宿の素姓がほぐれ灯が消えず
旅先の朝市 主婦の顔で見る
旅役者涙の裏の晴舞台
旅なれて道行く人に道聞かれ
お土産に旅の名残りを持ち帰り
弾まなくなつた手毬とフルムーン

勝 良江 姫女 忠雄 芳水 たもつ 勝美 富喜子 甚一 隆 倫子 武春 ひで 白光子 狸村 東雲 四郎 鉄治 とよ子 和歌子 正剣



旅

垂井千寿子選

土産話は時差ボケだった初渡航
旅に出た子がだんだんと丸くなる
プーゲンピリア兵士の涙忘れない
フルムンます行く先で採れない
旅の恥 掻き捨てたほど金が無い
一期一会やさしい旅の風に逢う
さいはての旅は逃亡者が似合う
孤独です出口を探す旅カバン
旅から旅へ自分一人を探すため
線路から外れた旅にあこがれる
仲直りしないで発った旅の悔い
旅慣れぬためか日本広く見え
ひとり旅ボクに合う風 合わぬ風
トネルが続く心の旅続く
終章の旅のプランを練り直す

旅終えて三日いつもの僕になる
一つずつ許して旅に出る準備
ひとり旅 許しなわたしに逢いたくて
旅先の宿までサリン従いてくる
人生が旅なら各停で行こう

人生は旅 花の道 風の道
旅先のはきは曝らぬ不文律
お浄土への旅路に花を植えておく
遍路旅 耳へ空しい嫁の愚痴

三男 旋風 英王子 保州 俊一花 京子 子 葉香 三重 清芳 虹汀 美代子 雄々 照 ちかし 芳郎 寿美 典子 あやめ 南奉 子 英子 土橋 螢

習慣に従う嫁がへつて来た
社訓には従いますと唱和する
子に従い円満ごっこしています
札東に従う兵も数のうち
添乗の旗へ従う観光地
振り向けば従う影のない孤独
方向音痴つまに従うほかはなし
言い付けに従ううちはいい息子
従いながら女主権をゆずらない
冷蔵庫のメモに従う妻の留守
新人に方言従いて来た人事
借金の手前従う事にする
しきたりに従い平和な里暮らし
妻とはね従うばかりで知らないものよ
老いて子に従うものど知りながら
ホイッスルに鉢巻の児等ついてくる
余りにも従順すぎて頼れない
夫唱婦随六十年を従いて来た
忍従の涙かくした小抽斗
あまりにも従順な子に不安抱き
従います退職金が出るまでは
親鳥について腰ふるアヒルの子

従 う

黒川紫香選



とよ子 保夫 志重 俊路 清美 カツ子 かず子 宵草 寿恵子 愛論 英王子 東雲 有一朗 照子 三男 ツネ 克治 多賀子 宵明 ちよ たもつ タキ

従えば風もやさしい貌になる
はいはいと言つてリモコンママが持ち
カナリアを従え捜査する怖さ
従わぬ足一本もない百足
取り巻きが落選までは従いて来る
姑に従い梅もラッキョも潰け終る
なろうことなら七人の敵従えて
忠実に従う犬が僕にある
従つていたら人生変わった
従つていれば幸せかも知れぬ
信じざる夫に従いてゆく安堵
忠実に親に従う動物よ
従つたふりして母は勝っている
サロンパス張つても従いてゆくつもり
車まで止め親ガモが従える

佳 従っているのは器の広い方
処方箋通り食後の薬のむ
面従腹背妻にお辞儀をしておこう
耳朶に惚れて貴男に従いてゆく
主治医には従うことに決めました

たず子 俊子 正劍 シマ子 寿美 勝己 照 ちかし ひで 三和 富喜子 英子 重人 あずき 日枝子 希久子 隆 不二 雄々

選挙カーに従うようにやき芋屋 田村 新造
笠置落ち主従共に濡れ給う

初歩教室

題一傘

吉岡美房

今回は相合傘の句が圧倒的に多かつたようです。「第一着想は捨てよ」と言われるように、新しい着想での句作りを期待しています。それでは添削句から発表します。

- （白杖傘さしかけた雨の駅）よし子
- （おしやれ傘陽の目も見ずに古くなり）よし子
- （派手すぎた日傘は陽の目見ないまま）三重子
- （雨も止み静かに傘をしめました）三重子
- （雨やんで傘一本が邪魔になり）侑里
- （先生に黄色い傘が見送られ）侑里
- （先生に愛しい者へ傘をさす）姫女
- （心から心へ傘をさしかける）姫女
- （傘で顔かくした頃の妻に惚れ）黎之助

- 今年こそ傘を楽しむ梅雨を待ち
- （去年の早 思い感謝の傘をさす）方子
- 鈍くさい男人脈傘にきる
- （実力の無さが人脈傘にきる）三重
- 雨上り女系家族の花の傘
- （雨上がり女系家族は傘の花）由紀子
- 待ち切れず新聞傘に軒つたう
- （新聞を傘に駆け出すにわか雨）君江
- 貸し傘でみやげ物屋は客確保
- （貸し傘でみやげ物屋に捕えられ）玲子
- 傘片手自転車こなす姥桜
- （傘もって片手自転車まだ元氣）一乗
- 傘傘に屋号記した時期もあり
- （傘傘に屋号記した時期もあり）因静子
- 四面楚歌それでも生きてる破れ傘
- （四面楚歌それでも生きてる破れ傘）鐘造
- 破れ傘舞台に花の彩となる
- （破れ傘舞台に決める破れ傘）とし子
- （定九郎舞台で決める破れ傘）克美
- 子報はずれ雨傘邪魔に扱われ
- （旅靴子報はずれた重い傘）旭
- にわか雨傘を持つてる誇らしき
- （俄雨皆を見かえず傘を持ち）タツエ
- まん開のさくら美し傘の下
- （傘さしてさくら吹雪をひとり占め）宏章
- 戻らない善意の傘に世相みる
- （雨降って善意の傘にある歓喜）

- 大きな私だけと貴方が傘になる
- （大きい私の傘はあなただけ）和歌子
- 一人だけ傘持って来た雨男
- （雨男自覚している傘を持ち）志重
- 雨男たんだ傘を持ち歩く
- （雨男でしようとう傘を持たされる）孝男
- 父母の傘海岳の思湧き出する
- （父母想うあまりに大き傘でした）トヨ子
- 母さんの傘歌声はねる赤い靴
- （迎え傘ママと一緒にねる靴）彩子
- 近頃は肩身のせまい黒い傘
- （傘立てに亡父が愛した黒い傘）辰男
- 傘になれ母の教えを胸に抱く
- （傘になる母の教えのむすかしさ）高栄
- 罪深き子にさしかける親の傘
- （罪の子を母は信じて傘をさす）ふさ子
- （どん底で母と歩いた傘がある）八重子
- （どん底の頃を支えた亡母の傘）仲弘子
- 可愛い傘がふらふらしつ歩いてる
- （お使いもうれいママと傘さして）まき子
- 傘を持つそんな長雨降りしきる
- （迎え傘あなた信じて待っている）まき子
- 五月雨が傘にはじける雨の朝
- （五月雨が迎える傘ではじける）郁子
- 忘れ傘逢えるチャンスまた出来た
- （傘忘れ逢える口実出来ました）朝子

雨のち晴れ傘は何処に忘れしぞ
忘れず持って帰れば他人の傘
忘れ癖傘傘と止んだ帰途
幸夫

千円の傘は不思議に忘れない
一閑
美寿子

いい方の傘からなくす悪い癖
不覚にも傘持って行き放つてくる
借りた傘なのに忘れて来た不覚
ブランドの傘置き忘れ落ちつかず
我が家では唯一ブランド傘忘れ
あの人と傘一本の楽しい日
一本の傘でうれしいほどの雨
一本の傘でうれしいほどの雨
持っているとかわず相合傘となる
相合い傘しとしと梅雨も又楽し
相傘で梅雨の長雨気にならず
落書きの傘のマークに名を並べ
落書きの相合傘で夢を見る
春雨に蛇の目が送る車まで
車まで送る蛇の目にある打算
蛇の目傘いまま舞妓に愛される
京の夜に溶けた舞妓の蛇の目傘
嬉しさに日傘くるくるまわし行く
日傘くるくるきつとい事あるらしい
絵日傘が物置小屋で淋しそつ
思ひ出とともに絵日傘忘れられ

ミツオ
幸夫
一閑
美寿子
ますみ
瑠美子
義
行子
義男
秀夫
忠男
ふうこ
日出子

絵日傘でむかしむかしの気風でる
（絵日傘のおんな夢二の風情見る）
核の傘日本安保今昔
うやむやで借りたまんまの核の傘
着想・表現ともに立派な句
傘さして喪服の人の淋しすぎ
傘貸して返らぬ予感ふとよぎる
会えぬまま傘さしかけてくれた人
顔見せずいらいらさせている日傘
嫁ぐ娘の荷物へ入れた蛇の目傘
傘の中二人一つの手を重ね
安心がほしくて傘を持って出る
カラフルなペラソル老いの目にまぶし
蛇の目傘買った故郷の城下町
傘がわりやむまで待とう縄のれん
相傘で歩きたい人他人の妻
入るなら丈夫でぬくい人の傘
破れ傘明日の天気を信じ切る
青空に抱かれて日傘輪を描く
久しぶり恋人と逢うジャンプ傘
下駄の音番傘うれし旅の宿
気に入りの傘を電車にプレセント
傘たたむ少年虹の声を聞く
相合いの傘は惚れてる方が濡れ
借りて来た傘だとわかる女傘
雨もよし傘の花咲く淀屋橋

俊一
真一
一典
幸次郎
ルイ子
輝雄
和子
木管
一壺
半量
あいや
太郎
剛治
美子
幸枝
芳水
タミ
ツネ
武春
かず子
かず子
正子

雨の日のデート一番好きな傘
相傘の噂うれし片想い
相傘のチャンスへ開くジャンプ傘
傘ほどのテントに耐えて水入らず
おいでやす蛇の目に似合う京言葉
も一つきせてあげたい傘地蔵
雨の日は楽しい色の傘を選ぶ
旅支度傘一本でまだ迷い
かばい合い風雨渡いだ夫婦傘
傘一つ雨が結びの神となる
父の傘なくして知った温かさ
失って偉大な傘と知らされる
花吹雪庇ってくれた女傘
蛇の目傘もつこれきりの雪切る
新婚の頃にはあつた迎え傘
駅凍てて母と待つた温い傘
相傘の思い出道は月あかり
傘一つ他人のまままで返される
傘と傘触れても嬉し好きな人

照
絢子
春枝
勝巳
君枝
ふゆ子
義子
文子
よしみ
好男
美津子
さち子
めぐみ
静子
彰
りつえ
幸子
キヨエ
碧

私の句

一本の傘にすがって梅雨に入る
傘たたみ悩みのつづき聞いてやる

題「力」 7月15日締切（9月号発表）
宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

老地ぬ壇

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

サークル棟

小林 一夫報

同性として聞く慰安婦の叫び
 バンザイを叫ぶと風が生臭い
 叫びたい日も溜息をついている
 いい妻を真似て絶叫したくなる
 叫び声あつちこつちで世紀末
 躓いた日から妥協の手を叩く
 速い空あなたは何をしていますか
 さりげなく核心をつく君はプロ
 どの花が母の蓮座よ踏み迷う
 かそけくもひとの指細き 黄昏
 内裏難世の塵ひぎに乗せたまう
 つぐないは生涯続く蝶結び
 春の雨一人芝居の日が続く
 足しても足してもわたしの髪に水滴たず
 やせ我慢重ねていると痩せてくる

ローズ川柳会

山崎 君子報

露のとう伸びて余震も遠くなり
 照る日曇る日心次第で雨になる

てる
 キク子

照るものと準備万端とのえて
 ガレキの中に嫉妬も欲も捨てたはず
 てるてる坊主明日地獄の無いように
 照る月に化身となつて舞う桜
 樂しさを探し求めてとぶ燕
 春ふたたびローズの庭に集う蝶
 日本に照らぬ日続く世となりぬ
 照るもよし雨もまたよし古都巡礼
 照る日曇る日狂つてみたい日もあらん
 暮参以外は会うこともなしあねいもと
 落書きの中にこぼれている希望
 照らされて嘘の剥がれる無言坂
 残照はおんなで生きる紅のいろ
 ふり返る照る日曇る日親娘坂
 一言が過ぎて気まずい義理の仲
 逆光の瀬田の夕照恋にまで

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

軽い捻挫わぬ杖のありがたさ
 百薬の長が毒にも変る羽目
 年金で一人暮しの侘しさよ
 洗脳の子等に恐怖の連続語
 気まぐれと見ゆる遊びに子の成長
 古都の春五重の塔も花吹雪
 足腰はついて行けない口達者
 円高と関係のない小銭入れ
 穏やかな耳で敵が近寄らぬ
 妻と娘がヒソヒソ話す台所
 コップ酒明日の元気を測つて

紀一 治幸 喜久亭 富士子 ちよ 朴竜 夕ミ 晴子 虹汀 高明 四郎

過ぎざれば夢も現もひと流れ
 一票は眼元涼しい人に入れ
 ふる里から石炭消えて炭住も
 村起し五ツ木の里も一億で
 運動会シルバームーンズ活躍し
 生かされて不義を重ねる神の罰

溝口町川柳会

小西 雄々報

農作業初音に草も緑増す
 色めくや大きな花芽君子蘭
 恐ろしい無色のガスが気にかかる
 バラ色の人生老いも夢描く
 好む色歳をとるほど派手になり
 色柄が好きでチョッピリおしゃれする
 華やかな色を着こなし若返る
 練り上げた嘘に多彩な色を塗る
 人生のロマンを追えば虹の色
 七色の声で稼いだ人もいる

はびきの市民川柳会

榎本 吐来報

青い空キャンパスにして描く夢
 出て行けとばかり掃除機うなり出す
 ちぎり絵の猪 豚と比べられ
 生きて行く恥を重ねて門構え
 祝日に日の丸のない軒並ぶ
 タレントが東に西に凱歌挙げ
 花の候いたわる時間あり余り
 マイベース春には春の花が咲く
 名人に画かれ縄文杉の嬉しそつ

さとみ 聡 えみこ 一壺 かつみ たけし 与呂志 重人 敏

惚けてもまだ女でず薄化粧
 記憶みな過去に戻して二度童
 掌の時は素早く過去となる
 古傷の一つが私を責めたてる
 過去形で書けば許して貰えそ
 衣摺れの音さらさらと細雪
 欲捨てて春の小川に似た余生
 逢うドラマ別れるドラマ時計
 名場面ラストを飾る花吹雪
 技ありヘラストシーンは二枚腰
 登り窯ラストの薪に抱く祈り
 ラストシーン印籠が出て締めくく
 選ばれた誇り球児の足揃う
 意地を捨て誇りも捨てて二度の職
 人情の厚さを誇る過疎が好き
 相槌を打って誇りを持ち上げる
 新居からちよつと誇らしげな便り

ほたる川柳同好会

井上 直次報

りつえ 金子 泰子 みつこ 扶美代 二南 利武 吐来 敦子 シマ子 忠宏 胡村 志洋 絢子 昇 金太 晋 辰子 方郎 祥風 清史 善守 英子 昭子 保子 福一 博史 吉太郎

庭の草引いてのびのび連休日
 金と地位なくてのびのび草の上
 空撮の大地の川はのびのびと
 のびのびと電車に乗れぬサリンガス
 のびのびになった言いわけ四苦八苦
 スマートな政治望んだ無党派層
 スマートでない人があつたかい
 不格好な男がスマートな服を買い
 スマートな遺言感謝と散骨と
 スマートな父の帽子が掛けたまま
 決勝点亀は遠いと思わない
 旅立った人遠くなり近くなり

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

眞郎 直次 馬洗 竹二 恭子 ただし 純次 一笛 喜美子 瀧小 明光 桂子 夢之助 向西 尚利 十四郎 美智子 弘浦 六浦 鹿太 紫香 定人 勇次郎

八尾市民川柳会 宮崎シマ子報
 タテ糸に添うヨコ糸が気まま言う
 ちっぽけな気ままと思ふ鯉のぼり
 晩鐘へ夢がたじろぐ気まま旅
 気ままです五枚こはぜの白い足袋
 告白はまだかコーヒー三杯目
 告白をしても抜けない薔薇の棘
 何も彼も告白させる森の精
 どきどきの告白だった妻だった
 ギャンブルの損が大きい言い出せず
 愛告白やつとほじけた柘榴の実
 外見でとかく優秀つけたがる
 母さんは比べずまるごと見てくれた
 父と母と比べられない深き愛
 ピストルとナイフを比べるのは止せう
 近頃は今は震度3くらい
 悔しくもあるミスコンの二位の顔
 急いでもどうにもならぬかたつむり

佳句地十選 (5月号から)

森田

年人 東雲 透度 頂留子 欣之 信博 洋 朝子 夕花 美幸 祥一 祥文 透太 ちえ 美佐子 美代子 正一 紫香 荒介 一風 嘉寿子 度 正坊

山家にて候花に埋もれる
 夫の絵に私の知らない橋がある
 散る時も優雅に舞える風を待つ
 菜の花は菜の花いろの雨を呼ぶ
 高原のひろがり天のおおらかに
 その時の科白は何時もお前にある
 手ののだけの幸せだからこぼさない
 焼け跡に寒い話が落ちている
 拍手鳴り止まず花百人百花
 来迎を信じた母のデスマスク

せつからでいつも貧乏くじを引く
満ち足りて花もなぜだか散り急ぐ
急展開ぼろりこぼした一言で
復興を急ぐシナリオが進まない
急がずとも三途の川は渡れます
急ぐからバス待つよりも歩こうよ
終点が近いぞ急ぐことはない
花筏流してあそぶ相聞歌
花吹雪遊び疲れた背なに舞う
遊ぶ金上手に工面して出かけ

富柳会

池

森子報

神様へ救つてほしい鈴を振り
私の猪の部分が動き出す
三浪で初めて落ちた目の鱗
一向に出ぬ春の芽よエデンの国思つ
犯罪は雨後の筍歎かれ
木偶の棒と思つた部下に救われる
蜘蛛の糸何時もトクがと限らない
春だ春だ春のタクトが芽吹かせる
不倫の友救つたはずが恨まれる
義援金物資でもない支え欲し
似顔絵で捜査の努力泥を吐く
口にしてひとりりの想い陽に当てる
鶯と共に祈ろう永久の春
救うのは美女と子供と決めている
返事した奴から先に救われる
救われて瓦礫の中で見た地獄
後悔をせぬようライブから救う

柳宏子 ますみ 春子 三男 和子 春堂 隆 弘直 シマ子 紅紫朗 扶美代 恒雄 紅月 宗一 晋 鐘造 昭子 アキ 方子 二三子 絹子 トシエ 昭水 柳太 智久 美代子

ご苦労さまグリコ事件をまだ捜す
すべり台小さな恋も芽生え出し
ほのぼのの明日輝かす桜の芽
好奇心けつまずいたりころんたり
草の根を踏まねばならぬ耕運機
新芽あふれて逢いたい人の多いこと
高槻川柳サークル卵の花 川島諷云児報

命綱山のこだまは知っていた
新しい命が宿る春便り
祈して山に飛び散る樹の命
わが命果てなばかなたに届く鐘ありや
命キラキラ包丁を研ぎすます
逆境に耐えて浮く日をしつと待つ
美人には浮いた噂がつきまとう
単細胞浮いた話に縁がなく
花びらの浮いた川面に季は移る
チューリップ浮世の嘘に慣れている
迷信が節目ふしめじやつて来る
迷信に縛る男の寒い背
鯛のあたま信じ老舗の灯がもえる
五右衛門の墓石を欠く博奕好き
大袈裟な迷信ポテトチップスと笑う
母はまだ意固地に嫌う北枕
お守りを母の枕にひそませる
忘れたいひとが心の底に棲む
老いるとはこう言う事か物忘れ
都合よく忘れる母を憎めない

命キラキラ包丁を研ぎすます
逆境に耐えて浮く日をしつと待つ
美人には浮いた噂がつきまとう
単細胞浮いた話に縁がなく
花びらの浮いた川面に季は移る
チューリップ浮世の嘘に慣れている
迷信が節目ふしめじやつて来る
迷信に縛る男の寒い背
鯛のあたま信じ老舗の灯がもえる
五右衛門の墓石を欠く博奕好き
大袈裟な迷信ポテトチップスと笑う
母はまだ意固地に嫌う北枕
お守りを母の枕にひそませる
忘れたいひとが心の底に棲む
老いるとはこう言う事か物忘れ
都合よく忘れる母を憎めない

伊勇 勇 維久子 花梢 岳人 森子 稲子 恵美子 重人 庸佑 萬的 上志子 しげお かおり マツエ 静江 白浜子 澄留吉 澄子 芳子 芳子 スミ子 伸子 節子

気まぐれな風に時どき泣かされる
此の酒は何かの根回しかも知れぬ
長らえた命に欲しい思いやり
本心が覗けるような大あくび
つばみから重い期待をかけられる
世が変る笑いのツボも又変る
家計簿を覗いてからの偏頭痛
僕の癖知って真似する影法師
陽当りの良すぎる坂でたたら踏む

川柳岩出 小倉 アサ報 原点到戻れば軽くなる悩み
早朝の風がわたしの生命抱く
どん底で起きた情けは染み透る
朗報も悩みも聞いた母の膝
隠してもため息だけは知っている
職ひいてなおも悩みの坂のぼる
喜びも悩みも乗せて行く電車
七転八起して来て今日がある
すずらも起きてきました箱の庭
八起き目をバネに雑草起き上がる
悩み事人それぞれ彩変えて
波起こすひと言そつと胃に溜める
日記にも書けぬ悩みを風は知る
動続て染めた性格認せもせず
子の悩み知らない親の多過ぎて
起き上がるはずのダルマが斜め向く
カナリアが思い悩んでいる捜査
友といて悩みをひとつ聞いている

原点到戻れば軽くなる悩み
早朝の風がわたしの生命抱く
どん底で起きた情けは染み透る
朗報も悩みも聞いた母の膝
隠してもため息だけは知っている
職ひいてなおも悩みの坂のぼる
喜びも悩みも乗せて行く電車
七転八起して来て今日がある
すずらも起きてきました箱の庭
八起き目をバネに雑草起き上がる
悩み事人それぞれ彩変えて
波起こすひと言そつと胃に溜める
日記にも書けぬ悩みを風は知る
動続て染めた性格認せもせず
子の悩み知らない親の多過ぎて
起き上がるはずのダルマが斜め向く
カナリアが思い悩んでいる捜査
友といて悩みをひとつ聞いている

よしみ あきら ふみ 克治 艶子 杜的 英一 武庫坊 瀧小 昌子 綾子 保子 和子 紳一郎 悦男 春子 重徳 精子 愛子 英子 アサ 智恵子 良一 正義 正直 千鶴子 幸子

もうひとりの悩み鏡の中にいる
ほろ苦い未練を捨てて朝を起き

忠雄
与呂志

川柳 さやま社

酒井

靖子報

飲み込みが遅くて平和な妻でいる
約束の山登らずに逝った夫

とよ子
恵美

千羽目の鶴に望みを賭けている
気の弱い鬼から言いわけばかり聞く

純子
とみ子

温い目で語るふたりの愛醒めず
心電図心の中も盗られそう

素水
つや子

お早うが届く隣の温い窓
解っていて孫の言いわけ聞いてやる

美智子
末野

一病を持ったどうしの和が温い
罹災地へいいわけもして花見酒

市三
ヒサ子

抜け道があるから苛立ち救われる
言い訳を覚えてからの平泳ぎ

和子
芳郎

父さんの背のぬくもり忘れな
風邪ひいて温もりくれた言葉尻

多美子
芳野

盗み聞きする気はないが足止まる
冷やめしを噛み親方の芸盗む

可住
靖子

意地一つ折ればこんな温い風
温もらぬうちにお札がわが家出る

富美
富美

富柳 会(前月分) 池

森子報

敗戦のこの一球に悔い残る
したたかな嘘がゆれてる耳飾り

紅月
紅紫朗

頑固者古希を迎えて丸くなり
古傷の一つが血を吹く事がある

恒雄
扶美代

合の手を入れて話の筋もつれ

冬虹

政治家の毒舌事によりけり
挨拶の途中でぼろりパチンコ球

宗一
勇

妬きすぎてもつれ始めた夫婦仲
アリバイがあっても解けぬもつれ糸

鐘造
晋

病む君に電話通じず遠花火
もつれた足に怪我もなかつた礼をい

アキ
方子

くすりに毒にもならず夫婦途
春つらら一直線に夢を追う

登子
絹子

春深し足のもつれに負けられぬ
好奇心旺盛なので忙しい

トシエ
昭水

枯枝に未練の葉しがみつ
目の毒と言うので余計見なくなる

智久
文次

帰りにくなくとこヒー飲んで
遺産分け隠し子現れなおもつれ

維久子
伊勇

薬にも毒にもならず隅に居る
夕焼けに愛がもつれる女坂

射月芳
岳人

おたがいにもつれてしまふ気の子感
鳴り止まぬ踏切の底にある

欣之
花梢

変化球ばかりを投げて飢えている
さくら色クイーンのような落花の舞

森子
花梢

今にいまといつか過ぎていた盛り
盛り場を薄い財布で通り抜け

栄
求芽

被災地の盛り場を見る昼の月
盛りを過ぎてさあこれからをまっとうに

武庫坊
年代

働き盛り国に捧げた暗い過去
盛って売る筈土までついている

波留吉
白漢子

燃え盛る炎を抱いて明日を待つ

瀧小

夜なべして育ち盛りの米を研ぐ
女盛り年の差なんか気にせず

百合子
芳子

天才と呑む珈琲はうまくない
裏表ないが機転の利かぬ部下

杜的
碩

少し見栄張って立ってる表門
表札で亡夫が睨みをきかせる

飛鳥
英一

B面にきれいな嘘を盛りつける
本物の天才だった芸の虫

ただし
庸佑

その道を外れ天才才行詰まる
虫捕りの天才もいる保育園

正坊
てる

慰めにならない言葉又並べ
地震にも倒れぬ古い桐箆筒

笑女
達子

訪ねたい古寺あり花季を見過
大それた事は思わぬ春風が吹く

水客

岸和田川柳会

田中 文時報

背景に惑わされても買えぬ家
登頂せず山を背景写真と

路子

カップルで銀盤に舞う名演技
背景がぼやけた選挙気にかかり

園子

円高を背景にする世界旅
背景にむかし遊んだ浜がない

朝一

背景の赤激情を盛りあげる
寒空にミニを乗しむ膝小僧

盛之

はたと膝打つこと増えた物忘れ
おまつりがめしより好きなお膝もと

金太

決断に迷い深爪してしまっ
深い傷負った心をバネにして

白光子

甚一

狸村

和重

敏光

敏光

敏光

敏光

敏光

敏光

敏光

深い空やはり出直すことにする
奥の深さしみしみ知った陶土いじり
口で言うほどの深傷とは見えぬ
平常は無沙汰祈願の絵馬奉じ
平常は関心のない嫁姑
平常に客を迎える妻の顔
何かあった平常と違ふ妻の顔
平常の言葉が出ない百十番
待ちわびて平常心が荒れてゆく
お祭りが済み平常になる暮し
平常心でやろう斬られ役
豊作も農機の借りに追いつけず
豊作と聞いて買ひ溜め悔いている
豊作へ納屋の案山子も大威張り
豊作を祝って農機売りに来る
豊作の分だけ腰のサロンパス
豊作を笛と太鼓ではやしたて

川柳塔鹿野みか月

土橋

グン吉 花水 花は無実を叫びだす
萬的 鯉のぼり生きてて夏を満喫す
柳宏子 跡を取る条件みんな整えて
弘子 生きている悪を取ったら生きられぬ
昭二 年取って母に似てきたと言われ
けい子 手に取るように娘の便りには書いてある
倫太郎 重い荷もふたりがしかと持って越す
倫子 感激は手を取り合って抱き合って
富志子 混浴へ紳士淑女も仮面取り
通彦 下取りには出せぬ緻密な機械です
一弥 取る物を取って切り捨て御免とは
文時 遊園地 私がかけた夢の橋
洋 楽園にしたい故郷へ樹を送る
信博 泥鰌つ児も鮎つ子もいる幼稚園
一齋 田園に姿を消した田植唄
さよ子 やすらぎの園は私の三帖間
浪速子 礼智信おだやかな顔してる園
螢報 曼陀羅や地球の園は花盛り
菅 牡丹園いのち洗濯して帰る
明美 賽銭がいる極楽の牡丹園
幸枝 老練さ勝てない人と喧嘩せず
喜与志 老練も一つ消しゴム持っている
隆子 肩を揉むやせた背中 に詫びている
陸風 本心を述べると椅子がきしみだす
富恵 本心を少し疑う美辞麗句
実満 本心のことか無口が手を挙げる
保子 地蔵半眼穏やかに笑み給う
三千代 宣子

南大阪川柳会

金井

文秋報

忠良 工場誘致村が真つ二つに割れる
汲香 打者心理見抜いた遊び球で釣る
ひろ子 余程肚立てたか起きて来ぬ老父
和歌子 万葉の里穏やかに桃が咲く
富久江 老練な演技で若い主役立て
八重子 揉めながらやつと糸口つかみ出す
久枝 一日を無事に果たした妻を揉む
弘子 穏やかな一日だった仕舞風呂
く子 本心しか持たぬ私の丸い鼻
智恵子 本心しか持たぬ私の丸い鼻
はるお 本心しか持たぬ私の丸い鼻
早苗 玉露揉む節くれ指に自負がある
孝男 即入院余程すんで居たらしい
節子 本心をばらばち見せて腹探る
かつ乃 ぬるいめの爛本心を小出しする
和子 二代目を揉まれて来いと突き放す
諷人 若葉マーク何時も気を揉む母が居る
きみ子 のど元まで来た本心が出てこない
螢 見回して本心吐けるとこと知る
他人の飯食って揉まれた日も昔
銀行も乗る老練な口車
父老いて昔ばなしが巧くなる
本心をのぞかせておく言葉尻

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

信治 信治
柳宏子 柳宏子
萬的 萬的
直子 直子
東雲 東雲
悟郎 悟郎
真砂 真砂
凡子 凡子
志華子 志華子
勝美 勝美
頂留子 頂留子
正博 正博
柳伸 柳伸
庸佑 庸佑
三男 三男
信博 信博
シメ子 シメ子
智久 智久
公一 公一
トミ子 トミ子
文江 文江
日枝子 日枝子
春枝 春枝
紫布 紫布
天雀 天雀
すみえ すみえ

雜草のような子にある未来像
 八十路にも未来図を描く画布がある
 孫達の未来は長いパズルかも
 子に未来塾へ塾へと追いやつて
 やさしさの垣根をこえて花吹雪
 竹とんぼ広いパンプーの中で舞う
 竹の園今日川柳の芽が伸びる
 海見える竹の館で春に酔い
 自然万歳僕の里には竹がある
 竹原へこんな素敵なお花の里
 しっかりと竹のはざまの藪椿
 公園も竹と話せる竹の街

三幸川柳教室

三宅

保州報

喜美子 操子 貞子 清彦 淑子 寿枝 八重美 美佐雄 節夫 正宏 房子 一路

いちご大福何か約束してたっけ
 指切りを信じて待った花暦
 約束の時間乳房が満ちてくる
 約束をせんでも春は来てくれる
 好きだから騙されたふりしてあげる
 濡れ衣をいつかは晴らしたい狐
 栄転と老いた母には言っておく
 最後まで騙し続ける愛もある
 騙されておこう波風立たぬなら
 低姿勢腰の角度に騙される

岩美川柳会

羽津川公乃報

和子 初子 さち子 正雄 章子 保州 みね 武春 高夫 めぐみ 照女 單車 美恵子 芳江 睦子 公乃 きみ子 嘉津江 忠良 孝男 大漁 螢 はお

子想だにしない女に噛みつかれ
 釈迦尊もこりこり顔の真理教
 こりこりの妻だが捨てぬ魔訶不思議
 苦勞する話で蕎麦がのびており
 人生の起伏ドラマに悔いがない
 倒れては立て立てては倒すドミン
 運不運積んだドラマの終電車
 勲一等苦を苦としない妻にやる
 定年に枷を外せば青い海
 噛みついた後の煙草の苦いこと
 なんにでも噛みつく金のない男
 酒のみに嫌いきつぱりと印を押す
 嫁姑のはざままで微熱とれませぬ
 こりこりの男の首輪はずす時
 鼻の下ガブリ噛みつく美人局
 五能線噛みつく客を一人乗せ
 標準語並べたつもり津軽弁
 苦勞して育てた猫が爪をとぐ

川柳クラブわたの花

片上

英一報

しげる 柳々 北歩 正徳 花匠 雅城 ツネ 祥子 生恵子 ふさふ 一光 井蛙 黙人 和香子 一花 花葉 花峯 五葉庵 シマ子 隆 幸枝 春子 君江 トシエ 明子 実希子 まさと

少年の版面は虹の彩ばかり
 激動の昭和史だった父母の墓

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

アサ 銀波

雪とけて山晴ればれとした素顔
 ドーランを落としたピエロ父の顔
 マスクする狂気素顔を見せられず
 信仰のヒステリー教祖の素顔みえ
 過疎守の母の素顔の深い皺
 化粧より素顔で契り五十年
 チンドン屋素顔じゃとても歩けない
 もう誰も素顔がいいと慰めず
 鬼検事ふと目にとめし野のすみれ

素顔からうかがいがい知れぬ闇の底
 酔うほどに仮面がずれてくる素顔
 子の動き目で追いがながら立話
 向こう岸雑魚雑魚なりに立向かう
 いい体調ただそれだけで春ごろ
 年寄りでは体調聞いてご挨拶
 雲走るみどりの原に風きさら
 でかい夢ゴビの砂漠に緑植え
 屋根下に命まだありただ折る
 夫の靴光らせ今日の無事祈る
 菊薫り絵馬の祈りも届きそう
 屋台酒みんな素顔の友ばかり

川柳塔おっぱい吟社 木村あきら報

英一 剛治 ミツ子 美津留 朝子 泰成 弘直 龍 友甫 ますみ 一風 鬼遊

夕焼と大連れ川岸散歩する
 此処までと線を引くのがむつかしい
 川柳高知 赤川 菊野報

故郷をビデオで送るゆうバック
 故郷の山に与作の唄がない
 名水に負けぬ故郷の水を汲む
 故郷はただ一本の白い道
 故郷にすべてを許す友がいる
 墓地までもみんな縁者にする故郷
 お喋りの雀か故郷をかけめぐる
 故郷のよきを出稼ぎから悟る
 出世した証 母校に寄贈する
 ふる里の便り仔牛の事も書き
 大都市を第二の故郷にしてしま
 ふる里に続く線路がさびている

中なみ子 はつ恵 恒子 憲一 たかし 幸泉 三郎 京子 敏子 暁耕 健二 扇立子 十面子 菊野

白髪でも伸びる間は未だ達者
 逢える日の愛の目盛りが伸びてくる
 伸びきって行く先迷う豆の蔓
 伸び切ったバナナが恋しい母の胸
 巣立つ日のようか空が青かった
 青くても若い意欲に賭けてみる
 石坂文学むさぼり読んだ青春譜
 一夏の稲の青さと対話する
 スタート位置に吹いてたころの青い風
 青い目の嫁が日本の四季に溶け
 青までになんと言わせる交差点
 青葉若葉の頃誕生日ありがとう
 生きてなお罪のくぼみへ青を溶く
 舌鼓やつと兎に勝てました
 滑らかな舌が男の骨を抜く
 毒舌を吐いて悔いている春の宵
 したたかな舌で墓穴を掘っている
 青空の下で煩惱持て余す

二南 さち子 紀美女 佐代子 淳太郎 賢二 三男 正博 輝子 好笑 晶子 紀久子 寿子 豊太 利治 まき子 稚代 克子

青い鳥探して渡る向こう岸
 みたされて人の命が軽くなる
 ハルバルと椰子海岸へ辿り着く
 言い訳に小さな嘘も少し入れ
 太刀打ちは出来ぬ舌を研いでいる
 長電話後ろで夫がぬが払い
 此処だけの話はスグに風に乗る
 まだ六十路明日の夢を温める
 留守電が浮世の風を吸って待つ
 角番を脱して広くなる土俵
 留守頼む犬にすっかりお世辞言う
 此の岸を越えれば過去が捨てられる
 菖蒲園花も化粧か水鏡
 焼跡に何時の日戻るアドバルン
 被災者に日毎に戻るあの笑顔

放任 正雪 あきら よしみ におり くに子 吟笑 マツエ ふみ ひかり マサエ いさむ 治延 チカエ 文仙

傷いくつ舐めて舌先丸くなる
 先頭に立つて青空見失う
 青年の夢は真直ぐ天に伸び
 全快の話 傷口には触れず
 全快を節目に結ぶ靴のひも
 退院で家族に誓う酒たばこ
 新緑の道全快の足で踏む
 全快の膳にうれしい鯛がのる
 手足伸ばして自由な日々を独り旅
 棒グラフ伸びてライバル意識する
 身の程を知らぬ器が背伸びする

めぐみ 英子 武春 金太 裕美 誠子 光代 文子 太茂津 呑天 和重

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

盃に花びらそえて酔うお酒
 最近の賑わう所 要注意
 新名所長居に桜バツと咲く
 宮仕え五十歩百歩のトラパーユ
 駅員の気持ちの良さに投書する
 正論が投書で生きる時もある
 老いてなお桜の色香追っている
 イカ焼きの香りも運ぶ通り抜け
 一通の投書が見せた人の味

川柳大坂 坊農 柳弘報 良花 太元 醉照 川童 一男 叭笑 美津留 鉄心 柳昌

善行の投書に朝のさわやかさ
人間のエゴが覗いている投書
投書する一字一字に怒り込め
投書からヒット商品誕生し
税務署にきつい投書が来たらしい
無軌道に遊んだツケをいま払い
無軌道ないじめが過ぎて死を招き
宴会のあとで軌道は酒まかせ
妻が敷く軌道で楽な運転手
父からの怒りがどこかおとろえる
林道にわだちくつきりなたね梅雨
ひたすらに軌道外さず父の貨車
シナリオと違ふ軌道を走ってる
恐いもの地震雷火事オウム
吊り橋を渡って妻の絵に帰る
年金を直撃〇・七五とは
毒薬を作って尊師なにする気
大志抱く日には軌道が狭すぎる
無党派の軌道に乗って知事の椅子

尼崎浜尾川柳會 前田いわお報

しげお 洛醉 金太 比呂志 笑風 笑子 末坊 河南子 一步 与呂志 和子 雅巢 まつお 推高 希久志 司 本蔭樺 重人 柳弘

雑草は踏まれて更に強くなる
耐えること路傍の草に教えられ
春草を食ってこぼれる牛の乳
子育てのお世話になった置き薬
世間話も置いた富山の薬売り
若草に寝ころび見てる飛行雲
錠剤のきれいな彩にだまされる
負け犬にならないように歯を磨く

城北川柳會 吐田 公一報

あの星が逝った母かと手を合わす
文明国まさかか歪んだ高速路
なにもかもやさしく見える星明り
お水取り火の粉かぶって春を待つ
哲学の世界の中に銀河系
日々怖い活断層の上に住む
おもいでが母にもあつた宝塚
独り酌く寂しさ慣れた春の宵
山の宿湯けむりがとくわだかまり
うちの母ゆつたりかまえずが無い
子離れが出来た振りする別れ際
平和なら宇宙で一番青い星
ゆつたりと雲の流れや日向ぼこ
鍋の湯気儲け話へ煮えつまる
春なのテロにサリンに花粉症
森羅万象春の仏の音がする
平凡な暮し見ている古時計
ぬるい湯が好きで安全圏にいる
美しい姉で歪んで見たくなる

一閑 まさ弘 すすみ 紫香 勇次郎 美智子 鹿太 陸子 政子 満津子 八重 史風 登美子 静子 秀夫 あい子 久留美 佐津乃 昭子 高栄 一枝 倫子 達子 あき子 典子 柳影

肩書と共に消え去る胃の痛み
道問えば知つていそいな葱坊主
思惑の通りに行かぬ掌をながめ
ひとひらの温もり欲しく旅に出る
唇が乾いて熱のない独り
宿命の星を求めて北の旅

堺川柳會 河内 月子報

傘寿過ぎてても可愛く紅をはく
結婚でもしようかと女夢を捨て
ごちやませの浪速女にある魅力
しなやかに女は意地を通します
結婚してから女怖くなり
紅のいろ死ぬまで女忘れない
朝シャンの娘ススイ肩で風
紅一点抜けて話が急におち
諦めの境地女の我を許し
すれ違ふ時に女の静電気
女房に日曜大工たのんでる
勝負師の裏は死んでも見せられぬ
粗食して今年の水着買っていく
サテイアンの粗食に幻覚がみえる
原点に戻り麦飯食べている
もつれ蝶うれしい返事くる予感
かぶと虫ずいぶん出世したもんだ
ナフタリン夫の服にたんと入れ
沈黙の春をフアーブル許さない
虫消えた次は人間かもしれぬ
図に乗ると正気の沙汰と思えない

白峰 春蘭 扇帆 トヨ子 とし子 公一 りつえ 菁風 勇太 かりん 柳宏子 梓 勝晴 春蘭 一三三 頂留子 トメ子 天笑 扶美代 外吉 泰子 みつこ 鬼遊 春香 元紀 ダン吉 二南

乗り継いでまだまだ遠い一人旅
 逆風に乗ると世間が面白い
 B面にかくした爪がのびてくる
 花びらの裏からつづきだすドラマ
 神さまが試してくれている裏目
 裏返すこともない葉脈透けてしま
 裏の裏読んで空振りしてしま
 裏窓を覗きストレス溜めている
 裏道を急ぎ工事にぶつつかる

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

退職後暫く昼は出歩かず
 腕組んでいては幸せつかめない
 いらぬこと喋って急所つかまれる
 急行が通り田圃は昼にする
 恋人をつかむ青春うれし泣き
 菜の花がまぶしすぎます昼の月
 幸せをつかむ花ことば捜す
 リハビリティつかむ力を試される
 幸せを確かにつかむ一つずつ
 春分の日から昼寝が許される
 一寸の油断で鬼につかまった
 やつとこさつかんだ椅子がまた揺れる
 泣きどころ掴んだあとを手をはなす
 誠実と明るさ彼女つかまえた
 昼下り美人の通る道を掃く
 金借りる話冷たい人になる
 仲人も補修が効かぬほど冷えた
 自己主張まだ足りませぬ昼の月

半銭 半 半
 昭子 昭子 昭子
 喜代子 喜代子 喜代子
 美子 美子 美子
 美代子 美代子 美代子
 射月房 射月房 射月房
 文 文 文

どう飾ってもつくろっても木偶はでく
 地球儀の裏に冷たいこせり合い
 期することあつて冷たい顔をする
 つかみ合う前に話し合いしようか
 幸運をつかむ両手はきれいです
 幸せをつかむ手だぞと自慢する

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

お前はめだか 鯨にはなれないよ
 川にめだかのいた頃母は亡くなった
 一匹のめだかに集う家族の目
 言い返す言葉を呑んで石を蹴る
 生き恥も狂えば軽く蹴つてみる
 妻の支えがあつて上手に椅子を蹴る
 おかしいぞ内緒が洩れてくる扉
 窓も扉も視野一面の震禍なお
 慟哭で閉まる火葬場の扉
 その扉開けると癖になる夜更け
 春の扉あけると媚薬置いてある
 教会の扉へ罪を消しにくる
 職安に集まる人の暗い服
 ひらめきがあつてあした生きられる
 ケラケラと笑いたくなる風はみどり
 思い出に揺れるポケットの秘密
 鯖の眼は還れぬ海の碧さ恋う
 チケットのもう一枚は捨てました
 赤が寂しいデンドロビウムとの対話
 内の茶が一番うまい旅帰り
 盃でつなく言葉に世辞を盛る

とみお 勝見 幸子 弘朗
 みほの 季芳 勝見 幸子
 キク子 一 磯 涉
 風云児 真柳 正一 紫香 義芳 正坊 伊三郎 武庫坊 鹿太 比ろ志 瀧小 澄子 正治 光穂 喜美子 正子 福一 白漢子

公園の仮設へ犬も遠回り
 気の弱い鬼でときどき不貞寝する
 幸福の木が枯れかけている珈琲館
 わかあゆ川柳会 松本はるみ報

空耳か夫の声がやわらかい
 こんなとき空耳でしたと逃げておき
 政治家は蜜に群がる蟻のよう
 蜜溜めて花はひたすら待っている
 空耳をうまく使つて三世代
 どっぷりと蜜にひたつている輩
 旅プラン楽しい夢を探さんか
 若さでず蜜の言葉に誘われる
 虫たちの口づけ待つて花の蜜
 蜜蜂が全国行脚の旅に出る
 蜜蜜々蝶々蝶々土手の春
 西宮北口川柳会 亀岡 哲子報

昌子 石舟 年代
 かつ子 聖子 好栄 ちよえ 恵美子 英子 鈴江 博利 清泉 白汀
 まさお 江美 哲子 いわゑ 萬的 諷云児 春蘭 文 富喜子 みつ子 澄子

コーヒタイム仕事の鬼と逢うている
逢うたびに愚痴言い女酔っている
夢で逢う母と優しい会話する
ロマンチックな出逢い別れはさりげなく
ボーイフレンドたくさん女王蜂になる
生きたかった命たくさん女王蜂に還る
人の思たたくさん受けて生きのびる
雑学で辞典たくさん持っている
たくさんさんの煩惱糧に生きている
言いたい事たくさんあるが貝になる
友だちがたくさんいっている五色豆
星の詩たくさん結めて山の駅
たくさんさんの助言にいつも救われる
声変りした子に席を譲られる
土曜日も休み学校好きになり
老人と言われたくないまだ女
災害地燕も巣作り苦労する
本場の事淡々と老日記
青春のサラダパバリパバリ音がする

川柳藤井寺

高田美代子報

佐江子 白溪子 絹子 石舟 美智子 涼子 正坊 正とし よし津 透太 義子 艶子 鹿太 由多香 ふじ子 トミエ 能子

思い切り悪く舌打ち止まらない
思い切り上げたコブシはおろせない
思い切り悪い男の二日酔い
思い切り捜査糾明オウム教
正面に立つと男の顔になる
正面に構えて世間狭くする
正面に映る鏡が気に入らず
正論がまかり通らぬ多数決
男なら後へは引かぬ正念場
正論を吐いてみながら避けられる
正面に背を向けてから雨続き
脚痛み正座の出来ぬ姫達磨
正の字がいくつか足りず涙呑む
クイズ狂の主婦正解に明け暮れる
午後雨で正直者が濡れてくる

岬川柳会

八十田洞庵報

二南 キミ子 六点 宗一 花梢 和樹 志洋 史郎 美房 正一 絹子 三郎 敬一 みよこ 吸江

合格をルーベで捜す地方版
合格を親孝行といはってる
薬局で野菜不足を飲んでる
ひやかしが黙って去ってゆく写生
なに不足ハルマゲドンで騒がしい
金とひま足りて常識不足気味
祝合格トップもびりも皆同じ
花泥棒恨むぞ苦労して盗った花
合唱に合わせて泳ぐ鯉のぼり
部屋のみ何が不足か甘えん坊
被災地に無情の雨がふりしきる
困らせた娘が母の日に花くれる

川柳ねやがわ

江口

悦子 正美 春江 庄六 いと 洞庵 度報 頂留子 菜月 ルイ子 勇太郎 シマ子 あやめ 文秋 冬葉 たもつ 弘直 かすみ 恵子 小路 日出子 時弘 洋 吉之助 良知 波留吉 権太 庸佑

お役所の規則でこども動かない
笑い声すこし聞こえて来た神戸
人生は各駅停車が楽しからう
池の鯉ゆつたり事件ないらしい
末っ子が働き出した日の安堵
すばらしい上役平のままで去り
紙コップ手に冗談は言いやすし
持ち変えてみても一人の荷の重さ
空いっぱい落書きする翼もつ

川柳後楽吟社

従野 健一報

母の膝おとぎの国へ子を誘う
にぎやかに生きて孤独の棺に入る
素晴らしい景観残している地球
あてにせぬ子供に金を貰いでる
巢立つ子の羽根は開くか破れぬか
道の花ボンとはじける喪が明ける
どん底で拾う温みよ人の和よ
あの頃は良かったなあと独り言
たまに会いどなたでしたかねと尋ね
耳よりに会話補聴器逃さない
うまいもの食う人句のものばかり
花びらと美学ひとつを議論する
春の夢書き足す鉛筆側におく
肩借れば優しい歩幅にしてくれる
人間不信つきあい酒はもうよそう
少年の目の高さまで樹が伸びる
フレッシュな朝が会社の門にある
旅仕度薬と焼酎忘れない

一風 英千子 一閑 とし子 藍子 博泉 光成 亜成 光成 正秀 義親 哲郎 吉則 幸子 美智子 秋季 吟平 青銅 文平 道博 博友 たけ志 健一 拓治 金吾 照路

天災に人災日本揺れ動き
うたてて春の陽ざしを添えて書く
火の始末しつかり頼むと連絡簿
頂点を究めた男にある魅力
一本道で迷っているのは策士
のんびりと悪妻もいる湯のけむり

川柳塔おとり 上田 俊路報

穴掘って蟬の抜けがら地に返す
逆縁の穴がなかなか埋められぬ
尺八は五つの穴で世に響く
ぼっかりとあく穴埋めるめぐり逢い
曇り後晴れの余生がありがたい
花曇り酒と踊りをせき立てる
円高のはなし曇りの日が続く
花ぐもり終着駅に人が待つ
アドバールン曇つた空が汽にいらぬ
背の高い子が先生と間違われ
学校で遊び塾では学んでる
仕送りは済んだが金は貯まらない
給食のカレー学校中におう

倉吉川柳会 谷口 次男報

大切な話になると外される
大切な親だ土蔵に入れておく
大切に鬼を遊ばせ生きている
今の今大切に息してまんねん
大切にすぎた息子役立たず
いのちよりお金の方が大切にだ

柳五郎 桃風 佐加恵 玉水 草風 鯨虎狼 千秋 崇 艶子 獎 余志身 真一 佳子 宏章 俊路 孝子 由多香 節子 幸子 山康 苦句 秋女 完司

お日様を大切に思いう曇り空
大切なもの少しずつ捨て年をとる
大切にすぎた置き場所探してる
大切なお方と言って押し上げる
大切な虎の子抱いて死んでいた
物忘れ首を振ったり叩いたり
合掌してから木魚叩かれる
叩かれて踏まれて人も伸びていく
ことさらに雨は貧しい屋根叩く
目の上の棚に昔が置いてある
これ以上叩くとエンマに告げてやる
百叩きくらいじゃすまぬ罪を抱く
ゲートボール玉の行く手が定まらぬ
善玉が寄ってたかっついていじめてる
目の玉の鱗おちてた花の下
埃っぽい棚から神をおろしてあげる
棚吊つてやっつてそのまま紐になる
叩いたら親でも告訴される世に

とつとり川柳会 武田 帆雀報

ウインクしたら八百屋大根添えてくれ
カーネーション一輪添えて母枕う
後で酒添える議員に味方する
付添いが邪魔で彼女と話せない
あの世迄貴女に添うてあげましょ
添え物の抽籤券は当たらない
添えぬなら日陰の女で通します
追伸にすばり本音が添えてある
定返へ自分史書いて花添える

独歩 天雀 美智子 秀峰 とみお よしえ 螢 次男 御前 荒介 幸苑 和枝 秋人 柳風 雄々 日枝子 石花菜 瑞枝 光枝 一多 粗粒 楊芝 喜与志 明美 帆雀 圭一郎

卯のような顔して角のある言葉
茹卵思い浮かべるコロンプス
海亀が涙をためて卵産む

卵を食いに青大将がやってくる
卵酒医者も飲んでる家伝薬
生卵女もそつと飲んでる

機械では出来ぬ卵が安過ぎる
失念のショックで卵三個食う
桜咲く車椅子止め独り愛で

蓮華咲きボチに嫁ぐ日打ち明ける
北国の炬燵へ早い花だより
若き日の苦勞話に花が咲く

草の根の運動やつと花が咲き
花が咲くまでに握手をするつもり
石楠花が咲いた便りを母にする

蕾から咲いて散るまで嘘を吐く
美しく咲いて多情な花になる

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

ミスマツチ迷彩服と鳥籠と
コウノ鳥ミドリ無精卵だと知らず逝く
飛び立った小鳥の温み手に残る
老いの愚を見てる鳥が啜わな
嫌われてカラス気儘に生きている
燕尾服着替えぬままに来たツバメ
夜鴉が啼いてこぼれた月華
もつ少し恥をかきたい古希の春
櫛の歯が欠けた時から惚けはじめ

和歌子 崇 輪多朗 螢 行男 しみ子 喬水 一京 よしお 茂 悦子 舍人 銀嶺 侑里 孝男 睦子 大漁 静生

豊中もくせい川柳会

田中正坊報

五月晴れ妻の貯金で屋根修理
サラリーマン男盛りを駆け抜ける
温厚と言われ鈍才とも言う男
雑巾を手縫いにしてる木綿針
婚礼の衣装を縫った玉の輿
針の座を承知で乗った針の自負
返し針おんなはきつく念を押す
叫んでも誰も助けに来てくれぬ
新緑の香りにむせる蚌茶屋
春の風邪マリオネットの紐弛む
一匹をもううて金魚鉢を買つ
病み上がり妻に内緒に買った酒
わがままを許しあつてる木と芽和え
ヌードには自信を持ってない美人
現場から届いた風が腥い
許す気で静かに番茶する音
本買うて目薬買うてリラの雨
緞の柄のくぼみに父の主義をみる

博史 吉太郎 慶子 英子 正坊 知香子 源一 紫香 一笛 明光 白溪子 重人 瀧小 武庫坊 真柳

新同人紹介

〒038
青森県北津軽郡板柳町大字横沢西里見5
電話0172-73-4839

諏訪柳々
—甲吉・五楽庵推薦

〒581

八尾市東山本町3-3-10
電話0729-98-6590

高橋夕花
—薫風・柳宏子・智子推薦

〒560

豊中市玉井町2-6-7
電話06-855-7206

湯浅馬洗
—薫風・直次推薦

〒536

大阪市城東区古市3-9-21-103
電話06-930-0061

玉置英子
—薫風・正坊・寿美子・直次推薦

〒665

宝塚市中山五月台3丁目8-116
電話0797-88-4911

嵯峨根保子
—薫風・鬼遊・直次推薦

〒560

豊中市上野西2-17-4
電話06-853-4300

月原方郎
—薫風・直次推薦

火山のように常に爆発を続ける路郎先生が長期に病臥されていても、社内外の助っ人による寄稿は多彩で、後進の我々にも教ええられることが多い。今回は中休みの意味で十号に亘って掲載された梅本塵山氏の「肱枕紙」を少しく引用してみる。七十余歳の筆者の体験に基づく人情風俗の変遷が興味深い。

☆相撲の横綱は多く有れども、明治年間の常陸山を第一に推すべし。梅ヶ谷は彼の好敵手にて、その体格技量に甲乙なく、兩人が場に登る時は竜虎の闘争もかくやと思われたり。太刀山は有名なれども、その立合きたなくして看客を聳せしむる癖ありし。

☆万歳を三唱するという事は、天皇の御即位式などに古く行われたが、江戸時代には一般に行われたる事無かりし也。然るに明治二十二年二月十一日帝国憲法が發布されて、翌十二日、上野公園に於て東京市民の大祝賀会を行ふこととなり、式場に天皇皇后両陛下の臨御を仰ぎたるが、その数日前に市内の各区役所より、当日車駕を奉迎する者は万歳を三唱

すべしと口達されたり。この口達を受けたる市民等は、万歳を三唱するとは如何なる事となすものかと、有志者を区役所に遣りて訊問させしに、吏員は先ず首頭取が「天皇皇后陛下」と発声する後につきて、一同が「万歳々々万々歳」と高唱する也と誨えたるを、立帰りて一同に通達したるが、万一その場に臨みて万歳を三唱する時、不都合ありては恐れ多しとて、数回発声の練習をなし、当日いよいよ上野公園の大仏前に一同整列して、両陛下御同列の御馬車の通御を拝し、予て練習せる如く万歳を三唱したれど、孰れも心臆して大声を御し得ず、不体裁を極めたり。これが近く万歳を三唱する事の始めなりし也。

☆明治六年の夏なりしが、ある日大驟雨中に東京の北方に当りて遠雷の如き大音響聞えたるに、世人は法螺山の東面の断崖の崩壊したるにて、世人は法螺貝の抜出したりと噂し、その翌日、法螺貝の黒雲に乗りて飛び去る凶を瓦版に印刷して、市中を売り歩きたり。これより後は、新聞の多く発行されしによりて

瓦版の読売というものは全く廃れたるが如し。おそらくこれが瓦版の最後なりしならん。

☆江戸時代には、市内各家の糞尿を近村の農家と特約して売買されたるもの也。これは子め一家に居住する人員を計え、一人の一年間の糞尿代金若干と定め、毎年年末に明年分の代金を前納したり。この糞尿代は大屋の所得となるものなれば、多数の貸屋を差配する大屋は、その所得莫大に及ぶなり。明治初年には一人一ヶ年の糞尿代およそ金一朱なりが同三十四五年頃には金一円四五十銭となれり。然るに大正の初年頃より、東京附近の農家にては糞尿を買取らざる故に、各家にて料金を出し、而して汲み取らす事となれり。

右の項目は短いものの中から選んだのだが江戸末期の消防、風呂屋の混浴、正月風景など百七項目もあり、明治を生きた人間の幅をうかがわせる。そして「世の人情風俗は如何に変遷するとも、四恩のみは一日も忘る可からざるものと念う」とあるのが筆者の感懐か。

この年、八月号にはじめて「不朽洞句稿」の路郎先生の作品が掲載になる。休火山路郎の復活近しと感じられることだ。

有限もよしとおもへり米の嵩
人並に女房も持った子も持った
そろばんの三桁四桁の人生か

本社 六月句会

六月六日(火)午後五時半
メンズフアッションセンター

晴天は三日と続かず、このまま梅雨入りを
思わせる六日夕刻、九十六名の参加により六
月句会は開催された。

はじめに五月十五日亡くなられた西尾栗名
譽主幹に一分間の黙祷御冥福をお祈りした。
お話は黒川紫香氏、川柳では先輩にあたる
西尾栗氏とは共に路郎門下生で長い間の親交
があり、お世話になったことや思い出などを
栗氏の温厚な人柄にふれながら、旅のエピソ
ードを交えて語られた。

また自身が遭遇された阪神大震災の体験談
として、幸い家族に怪我のなかったこと、水
道復活までの不便得た教訓などを話された。
柳友から安否を気遣うひと言の電話が大変う
れしかったとも言われた。

初出席は大野百合子さん、小林幸子さん。
月間賞は豊中市の田中正坊さんに輝く。

(司会)一岳人 (記名)射月芳・森子
(受付)射月芳・千歩・楓楽

席題「近所」 藤田頂留子選

近所雀アンテナひくくピンと張る
あれ以来気丈者やと誤解され
近所には甘い背中を見せている
復興へ近所の花も咲き初める
ご近所の目を読んでいる物干場
御近所のことを手に取るよう喋り
ご近所の主人と知らず口げんか
近所にはオカルト好きが居るのだが
すみませんの橋を渡っている近所
娘も二十歳近所ばつばつ静電気
近所では有名ですと自己紹介
顔馴染み駅の近所の縄のれん
御近所に千手観音様が棲む
ご近所をたよりこの地に腰を据え
隣からワイン一本何かある
少しずつ酸素が薄くなる近所
ご近所の噂も拾う万歩計
お隣が新築をして塗り直す
国際電話 隣と同じ声でくる
御近所の顔も立てとく門構え
近所からひと回りしてきた噂
震災後ご近所みんなうちとけて
お隣のピアノいいことあるらしい
豪邸の端にちよこんと僕の家
干す着近所に目立ちたくはない
子供もつとくに仲のよい近所
御近所がいいから越して来いと言う

楓 楽
あやめ
(奥)澄子
哲 子
吐 来
英 子
度 子
金 太
満 州
とし子
哲 夫
柳 弘
岳 人
弘 直
幸 子
雅 文
吐 来
東 雲
文 子
柳 宏 子
房 子
義 子
みつ子
金 太
憲 太郎
白 溪 子
とし子

交番へ近所のよしみ庭の花
近所には兄さんですと言っておく
ご近所のラッパが噂まき散らす
ご近所に住んで旦那をまだ知らず
住 佳
オクターブ下げて近所とおつき合い
パチンコも郵便局もある近所
町内の彦左で通る老父頑固
なめらかな舌に近所が気を許す
ご近所の情けに溶けてゆく誤解
人
近所とはほど良い距離のむずかしさ
背伸びして近所の背丈で舞うワルツ
天
方円に水を流している近所
軸
二三日会わぬが元気かと近所
兼題「集まる」 田中 薫選
集まれば露宮の歌が出る仲間
集まって酌めば軍歌が出る世代
もう世話をする者がない兵の会
流壺に夏が集まる登山帽
集めねばひとりの知恵はすぐ尽きる
なつかしいスタ―集まる映画村
集金へくどく聞かれ町会費
真っ黒に蟻集まっている怖さ
口実をつけて集まる飲み仲間

正 雄
希久子
志 洋
白 溪 子
たもつ
桂 香
柳 宏 子
雅 文
楓 云 児
欣 史 子
勇 太
森 子
頂 留 子
雅 代
三 男
良 知
度
希 久 子
狸 村
か す み
笛 生
百 合 子

男には集まる場所が決めてある
燃えつきた男が集う繩のれん
酒好きがよると出る間のない欠伸
集団を解くと分別取り戻す
集団の真ん中に居る黒い影
集まった中に信者がひとりいる
群衆の中で自分の顔がない
群衆と心安らぐ雑魚の中
親戚に格差が出来て集まらず
メダカ群れてもボスが決まらない
野次馬を集めて梯子車とどかない
タイヤのきしみ野次馬が湧いてくる
善人が寄ると読経の声がする
淋しげな顔も集まる古書の市
出来そうな欲を集めて生きている
集合の駅に笑顔の羅漢たち
集まりへ自慢話のないわたし
山の端に月が昇れば集まろう
ユーモアを集めてシャボン玉飛んだ
笑えない森に集まる裏の顔
泥人形集め孤独な夜という
茜雲ぼつくり寺の輪に入る
地下鉄の集合誰も承認せず
集まるとみんな河内のガキの顔
漁師町 猫の集まる場所がある
娘集めてボクの悪口言っている
安心だから集団にいるのです
人

上等の背広の方へ集まろう
晴生 金太 シマ子 路児 冬葉 章久 路児 金太 晴生

集まってきたのは頼りない男
天 地
臨海の闇捨て猫が群れをなす
軸
集まっつてのつべらぼうの顔である
兼題「悔しい」 奥山晴生選
九回の裏でくらった逆転打
10センチ中ならホームランだった
悔しさをわかってくれたてんこ盛り
くやしさを飛ばした汗の柔道着
一億円一字違いのジャンボくじ
おねしょした事を知ってる姉が居る
悔しくて雑魚も大河をさかのぼる
悔しいな隣の犬に吠えられる
敗因を語るコーヒー冷めたまま
くやしさが方向音痴試される
電子音そんなに嗤わなくてよい
妻のいうあんたそれで男なの
後悔はさせてくれたそん太鼓
悔しゅうて笑顔が続かない握手
悔しさをやり場に落ちていた椿
悔しさを一杯つめた袋刺る
切り返す言葉あとから湧いてくる
くやしさをふわりと風におじぎ草
悔しいがまだまだ遠い北の島
悔しさを糧に大きな虹をかく
悔しいが城を磨いて明け渡す

路児 風 欣史子 紫香 房子 諷云児 洋 菁風 寿美子 度 一風 みつ子 武庫坊 勇太 朝子 隆 澄子 森の 萬的 吐来 冬葉 章久 路児 金太 晴生

女人高野の里に悔しさおいてくる
悔しいとだけ書いてある日記帳
悔しいが愛想笑いをして別れ
父ちゃんに今日は負けとく給料日
悔しさに耐える涙は上を向く
割り切れぬ悔しい酒を冷やでのむ
窓際の椅子が悔しいほど固い
消しゴムの屑と悔しさだけ残り
ドクターストップ乾杯はウーロン茶
さわやかに笑い悔しさ引つ込める
悔恨の彩漆ませり茄子の花
佳
くやしいと言った時から負けになる
金でカタつけられている悔しさよ
ライバルに鼻の高さで負けている
悔しくて真紅のバラを火焙りに
笑う目の奥歯きりきり音がする
人
約束をするとき必ず雨になる
地
ローンだけ残った家の焼け跡だ
天
悔しさを溜めた背骨は曲らない
軸
匿名の電話ごときに背を斬られ
兼題「原色」 阿萬萬的選

丹吉 天笑 薰 諷云児 金太 柳弘 紫香 鹿太 洋敏 澄子 幸子 哲子 鬼遊 しげお 天笑 度 千歩 百合子 重人 いわゑ 稚代 幸子 諷云児 稚代 月子 勝美 笛生 重人 満州 希久子 月子 薫 美代子 シマ子 たず子 みつ子 とし子 希久子 英子 楓楽 晴生 義子

原色に抵抗があり京説り

一途な目娘まっかなトウシューズ

原色の琉球の舞いと優雅

原色を着こなすミスコンテスト

原色でママの怒った顔描かれ

原色を着て断ち切った迷い

仏像に残る原色謎を呼ぶ

三原色の一つ狂うてきた画像

原色の夫に少し飽きはじめ

原色を避けてひっそり生きてます

当分は原色が好きハワイはけ

お父ちゃんを語る政子の赤いべべ

天邪鬼 原色のまま生きてる

原色の街には夢が溢れてる

原色のままで挑戦する若さ

原色を着てカンカンの陽に負けず

まんじゅしゃげ燃え原色に暮を染め

原色の凶鑑の虫が綺麗すぎ

原色のチョゴリが泣いた永田町

原色の似合う悪女で憎めない

原色がぼやけ始めた記憶力

民族衣裳派手に並べてガード下

赤の似合う女で別れが言いやすい

原色にベレー八十路も軽やかに

原色の似合う女でよく笑う

原色の帆をばらまいて夏的大海

原色の街屈託のない若さ

魂が炎えて狂うかゴッホの黄

和田アキ子山田邦子の色が好き

一三三

洞庵

英王子

しげお

かすみ

照

みつ子

英子

洋

美代子

吸江

たもつ

吸江

路児

とし子

満津子

絹子

柳宏子

哲夫

楓

楽

史子

勝美

たず子

柳宏子

度

寿美子

重人

あやめ

鬼遊

住

原色で海を賑わす大漁旗

花火師の夢原色で描く夜空

原色にはかしの効かす母の刷毛

媚る気はない原色の金魚たち

原色の炎ウべは遠くなる

人

落慶法要 原色の幕風孕む

地

原色で戻す神戸の中華街

天

妥協せぬ原色で咲く花の意地

軸

原色の土着の踊り夜を徹し

兼題「ひととき」

高杉鬼遊選

小休止すこし人間らしくなる

ひとときをピエロは星を見て涙

仏壇と話すひととき気が和む

くつろぎの紫煙喫煙室の椅子

ほんのひとときピンクの風とすれ違ふ

真昼間主婦を忘れた絵三昧

夕焼けのひとときなんでも考えぬ

ひとときを下す将棋を指している

孫が来たひととき妻も若返り

近松に触れてひととき酔うてくる

孫の守りひととき持たす熱帯魚

コーヒータムふたりぐらしのひとときを

ひとときを只今背伸びしています

洋敏

度

源一

雅文

鬼遊

三男

紫香

希久子

萬的

美代子

萬的

一風

笛生

美代子

千歩

千歩

青風

一風

憲太郎

正雄

笛生

満州

弔問者去んで写真と二人きり

ひとときを休める羽根が濡れている

アホになるひととき眼鏡外しとく

ひとときの出会い何から話そうか

猫のしっぽに遊んでもらう昼下が

伎芸天の影揺れてひととき眩暈

孫と話すひととき今を忘れかけ

ひとときの夢をこの世で見えています

透明なひととき弥陀の手にふれる

ゴキブリを殺しひととき茶を淹れる

美術展しばし空中浮遊する

ひとときを声がかすれるほど喋り

六甲おろし今ひとときの至福です

ひとときの平和だろうか核とい

うめだ花月の椅子でひととき無にならう

乗り換えのひととき古い女と逢う

プラネタリアムひととき馬追いかける

ひとときをおろそかにして蹴躓き

住

喜寿米寿ひとときまつり上げられる

やすらぎのひとときオウムから逃れ

みな留守でゆつくり手紙書いてます

ひとときの我慢頭を下げておく

決断のひととき二回咳をする

人

ひとときは鉛玉ひとつとけるまで

嘘も方便ひととき妻を喜ばす

地

天

哲夫

勝美

しげお

トメ子

森子

薫

ルイ子

洋敏

たず子

岳人

桂香

満州

路児

ダン吉

楓

三男

いわゑ

重人

桂香

房子

月子

あやめ

しげお

とし子

とし子

風云児

客足の切れたひととき水を飲み

軸

甲吟を考えている通夜の席

柳宏子
鬼遊

兼題「地獄」 橋高薫風選

地獄から急に電話が来ぬように
活断層覗くと地獄まで見える

しげお
洋敏

情けとや地獄で会ったにぎり飯

たず子

地獄へも妻は迎えに来てくれる

シマ子

地獄にもきつと二人の蓮がある

シマ子

母さんが確かに地獄見たと言う

ダン吉

地獄みてから鬼にも仏にもなれる

楓楽

ひとさまの地獄で稼ぐ視聴率

天笑

退屈を知らぬ余生の地獄耳

吐来

蟻地獄だあれもこない昼下り

稚代

信教の自由にはまる蟻地獄

鬼遊

サテイアの隅に潜んでいる地獄

しげお

指紋消し安心ならぬ地獄待つ

東雲

ハルマゲドン自作自演という地獄

美房

地獄絵の真つ只中にいる尊師

鹿太

地獄から這い出て財を成した鬼

鹿太

地獄の鬼高笑いする黒い金

悟郎

北も南も地獄の日から五十年

みつ子

免疫が出来て地獄に棲みなれる

美代子

地獄から出て来たような寝ぐせ髪

冬葉

恋をした 地獄のはじめとも知らず

義子

心にも火を吐く地獄もついている

照

地獄見る覚悟は出来ているふたり
好きだけど地獄の果てまでとはいわぬゆ澄

庸佑
子

地獄でもきつとアリアを歌うから

寿美子

地獄への道とは知らずひた走る

庸佑

酔いが醒めると元の地獄に寝ています

幸子

矢印を地獄の方へ向けたがり

洋

いつまでも地獄であらう苦はない

茜

きれいな道行けば地獄につきあたり

弘直

墓地買うて地獄の鬼に笑われる

章久

抜き足さし足地獄にひびかないように

とし子

鬼ある日悲しい顔もする地獄

萬的

人間の舌で捨て場のない地獄

昭子

戦争の地獄は知らぬオウム論

義子

満ち足りた心の隅になお地獄

みつ子

食虫花きれいに咲いている地獄

度

下界には極楽地獄 観覧車

洋

地獄で仏 極楽で鬼に逢う

正坊

極楽と地獄見分けぬしゃれこつべ

薫風

(清記一希久子)

川柳研究年度賞決まる

(正賞)

名水が売れる地球が病んでいる

安田和楽志

(準賞)

逆縁の何時まで押せる車椅子

川崎 桓

第13回 夜市川柳大会

とき 7月30日(日) 午後零時半開場

ところ 堺市総合福祉会館5階大研修室

兼題と選者(各題2句)

「沈む」 土橋はるお選

「引く」 原田北涯選

「おまけ」 門谷たず子選

「大変」 田中正坊選

「忘れる」 西村昭治選

「船」 高橋夕花選

「あつさり」 河内天笑選

「奪う」 板野美子選

「好き」 小島蘭幸選

「下手」 新家完司選

※出句締切午後1時半・投句拝辞

会費 2000円(軽食・粗品・作品集)

※天・地・人と佳作に呈賞

懇親宴 午後6時から居酒屋・犬吉御殿

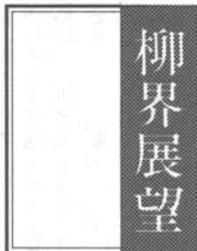
※ベストテンご招待宴

なお、宿泊予定者は早目に河内天笑へ

連絡先 〒593 堺市掘上緑町2丁16-3

☎ 0722-78-4706

柳界展覧



★NHK学園川柳大会の大
会大賞受賞作品から選ばれ
る平成6年度の文部大臣奨
励賞は、18名の選考委員に
よる選考の結果、昨年11月
の全国大会で大賞を得た次
の句に決定した。

罪晴れた人へ太陽ふりそ
そぐ 酒井 ちゑ

★ふあうすと川柳社は5月
号で平成6年度年間賞を發
表した。ふあうすと賞は、
山本桜子・西川けんじ・木
原鶴子・土田欣之・岡本炸
二の5氏、紋太賞は、みと
せりつ子・永田曉風・坂井
半升の3氏。

★よみうり時事川柳選者は
4月20日より広瀬反省氏か
ら柏原幻四郎氏に交替

★柳新京都社は平成7年
度(第十回)誌上秀作競詠
句会を開催。7月5日締切
課題と選者は、生きるⅡ外
山あきら・一戸涼子・村井
見也子、雑詠Ⅱ柴田午朗・
興事業団

★五呂八生誕百年記念全国
川柳大会は9月23日午前11
時から小樽市住吉神社句碑
前で記念祭を行った後、同
市ニュー三幸で記念川柳祭
を開く。宿題は一部(雑詠
2句吟・3者共選、二部は
課題「扉」2句吟・3者共
選)。一部締切は8月10日、
大会費1500円・懇親会
費5000円・投句料1500
円。投句先は〒047小樽市
石山町3-25・五呂八川祭
事務局松田竹生、主催北
海道川柳連盟

池ヶ谷とよ
★第5回「太平記の里」全
国川柳大会は9月10日、太
田市社会教育総合センター
で開く。第一部(当日参加)
の課題は、エネルギー・大
騒ぎ・伸びる・墨・ふれあ
い・油断・明日・つなぐ・
恩恵(各題2句)、参加費
2000円。第二部(郵送
円)橋高薫風序文、2年

参加者)は7月31日締切で
課題は、舞う(2句・10氏
共選)、参加費1000円
連絡先は〒373 太田市浜町
2番35号・太田市文化振
興事業団

前に死去した故人の作品か
ら珠玉の540句を収録。
■句集『蟹の足』梅崎流星
(A5判218頁・価2000
円)岸本吟一序文、蝕
の月・蟬の殻・水餅・殉教
の海・蟹の足の5章
■『冬木立』瀬戸まさよ・
B6判164頁(川柳塔・
朝日なになわ柳壇・eiの会
などの入選句337句を収
録。橋高薫風・片岡つとむ
ら11氏がエッセーを寄稿。
頒価1000円)

■『川柳シャンソニエ』上
野多恵子(B6判152頁
ウイメンズブックスストア松
香堂書店刊・定価1442
円)坪内稔典・磯野いさむ
序文。369句を収録。

■透太川柳第二句集『風の
あと』田中透太(B6判7
6頁・230句収録・頒価
1000円・5月1日刊)

■『みちづれ』松永すすむ
遺句集(B6判48頁・橋
死去、66歳。

▽出版△

▽計報△

高薫風序文

▽同人消息△

■木村あきら氏(理事・香
川県)は5月3日の憲法記
念日に地方自治功労者とし
て知事表彰を受けた。同氏
は昭和52年には自治大臣表
彰も受けている。

■村田善保氏(同人・弘前
市)5月9日、肺炎のため
死去、66歳。

暑中お見舞い申し上げます

平成7年 盛夏

おかげさまで300号を迎えました。

記念大会へのご参加をお待ちしています。

日 時 平成7年8月6日(日)

会 場 JA会館(JR和歌山駅前)

事前投句 「海」 牛尾緑良選

(7月15日締切、出席者に限る)

兼題と選者(各題2句)

「続 く」 河内天笑選

「耐 える」 中村重治選

「ハンカチ」 森中恵美子選

「 山 」 田中好啓選

「 歌 」 橘高薫風選

(投句拝辞)

会 費 1500円

懇 親 宴 3500円(要予約)

川柳塔わかやま吟社

事務局 〒641 和歌山市紀三井寺111-2

牛尾緑良方

暑中御見舞

熊本川柳会

鶴田謹爾 有働芳仙 遠山夏生 北川一進 高野宵草 永田俊子 宇野照代 大川幸子 岩切康子

暑中御見舞い

申し上げます

川柳クラブ

わたの花

高杉鬼遊 川崎友甫 宮崎弘直 服部春子 片上英一 平川幸枝 松本実希子 松葉君江 小沢泰成 宮崎シマ子 田中トシエ 二瓶道子 鷺見章 稲山隆 生島ますみ 吉村一風 山下美津留 内田龍 高橋明子 大内朝子 井上しのぶ 牧戸きみ子 田中花子 村上剛治 村上ミツ子 神原まさと

暑中お見舞い申し上げます

井橋上高 湯浅直風 月原一郎 一瀬善史 池田清史 江口秋守 岡本光郎 奥村幸之助 岡村一安 北村正之 木下万助 日下恭子 黒崎洋子 近藤保子 嵯峨瀧保 酒井龍保 滝中史 滝田史 玉置英史 富永桂子 富江桂子 古川純子 古川喜美子 藤原桂子 松本たけ子 松山昭子 椋山祥子 森川紫水 吉井同

ほたる川柳同好会

毎月第2火曜日午後1時から豊中市螢池公民館にて毎回薫風先生の御指導を受けております。 申込み・お問合せは 06-841-5265 井上まで

暑中お見舞申し上げます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-01 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

暑中お見舞申し上げます

八尾市民川柳会

会員一同

暑中お見舞申し上げます

川柳若葉の会

吉田あずき	山内香住	宮崎シマ子	宮崎弘直	宮本欣史子	堀江光子	中島田実子	椎江清芳	黒田能子	大福留吉	指宿千枝子	橘高薫風
-------	------	-------	------	-------	------	-------	------	------	------	-------	------

暑中お見舞申し上げます

平成7年 盛夏

いずも川柳会

事務局 〒693 出雲市大津町大曲2097

TEL 0853-22-2179

川柳大阪

部長

暑中御見舞い申し上げます

大阪市交通局互助組合文化部川柳部

高木信醉	田村良花	四宮醉照	塩満敏	齋藤三十四	佐藤須賀夫	河嶋一男	小林義明	児島与呂志	小坂雅計	川端一步	川内叭笑	川田和子	井上たもつ	岩井本蔭棒	浅田河南子	安孫子我勝	田宮義司
坊農柳弘	藤田雅	福崎しげお	長谷川司	橋本雅巢	狭間希久志	西岡洛醉	西尾たつお	鍋島一介	手崎川童	椿敦彦	玉置重人	田中笑風	武田青道	竹内醉舟	高村親章	高浜俊明	高須賀金太
		岡本天平	中原比呂志	石橋美子	大野勝治	芳鉄心	横川推高	松本哲夫	山本柳昌	山田清子	山田かよこ	山下美津留	山口末坊	山口雅万	森村美花	森松まつお	森田太元

暑中御見舞

高槻川柳サークル卯の花 一同

暑中お伺い申し上げます

長	富	笠	奥	松	竹	藤	川	小	松	辻	阿	黒	正
浜	山	嶋	山	川	内	村	島	池	川		萬	川	本
澄	ル	恵	美	芳	花	ノ	諷	し	杜	白	萬	紫	水
子	イ	美	智	子	代	女	云	げ	的	溪	的	香	客
	子	子	子	子	子		児	お		子			

高須賀金太

森川京

長谷川呂万

井齋一齋

内田一弥

寺田甚一

古野ひで

島崎富志子

福浦勝晴

芳地狸村

藪野ケイ子

柿花昭二

村垣鹿太郎

三輪通彦

林春恵

田中文時

原さよ子

岩佐ダン吉

岸和田川柳会

暑中お見舞
申し上げます

暑中御見舞

申し上げます

城北川柳会

連絡先

〒675-01 加古川市平岡町新在家二〇〇六―八

吐田公一

電話(〇七九四)二二一三六八一

暑中御見舞

サークル 檸檬

もくせい川柳会

三	満	松	榊	星	春	辻	玉	滝	田	田	栗	北	岸	木	岡	江	一	安	黒	橘
宅	仲	本	本	野	城	川	置	北	中	中	原	山	田	村	本	口	瀬	藤	川	高
つ	き	た	落	登	武	慶	英	博	正	富	悟	知	一	吉	明	福	寿	紫	薫	
え	く	だ	児	子	庫	子	子	史	坊	子	郎	香	笛	太	光	一	美	香	風	
子	子	し			坊												子			

定例会句会 毎月第3月曜日 豊中市立中央公民館

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

事務局および投句先

〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子

木	菊	亀	門	小	小	奥	奥	上	秋	黒
村	池	岡	谷	倉	熊	山	田	田	元	川
貴	ト	哲	た		江	美	み	佳	て	紫
代	ミ	子	ず	藍	美	智	つ	秋	る	香
子	エ		子		子	子	子			
吉	山	山	丸	牧	藤	春	春	林	西	黒
田	本	崎	山	渕	村	城	城		口	田
笑	義	君	よ	富	ノ	武	年	は	い	能
女	子	子	し	喜	女	庫	代	つ	わ	子
			津	子		坊		絵	ゑ	

竹原川柳会

〒725 広島県竹原市竹原町4535-5

小島蘭幸方

暑中お見舞い申し上げます

平成七年 盛夏

会 監 会

計 査 長

山古古岩藤古石岡三森岩時小
内田田本解谷原本宅井本広島
ほ房比太文静節淑清不菁笑一蘭
か呂子虚晴風夫子水朽居子路幸
一同子

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔おおとり

会長 小林由多香

会員一同

納涼は丹波篠山

デカンショ祭りへ

8月17・18日

川柳ささやま社

暑中お見舞い

申し上げます

はびきの市民川柳会

安芸田 泰子
芦田 絢子
内田 さとみ
榎本 吐来
川田 晋
酒井 一壺
清水 利武
塩満 敏
徳山 みつこ
西山 りつえ
山本 たけし
吉原 辰子

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 塔 社

主 幹
理 事 長
副 主 幹
副 理 事 長
常 任 理 事

橘 高 薫 風
西 田 柳 宏 子
小 出 智 子
板 尾 岳 人
河 内 天 笑
岩 佐 ダン 吉
榎 本 吐 来
奥 田 み つ 子
川 島 諷 云 児
河 内 月 子
小 池 し げ お
田 中 正 坊
高 須 賀 金 太

高 杉 鬼 遊
宮 口 笛 生
西 口 い わ ゑ
西 出 楓 楽
春 城 武 庫 坊
宮 崎 シ マ 子
宮 園 射 月 芳
山 下 美 津 留
吉 岡 美 房

川柳塔社常任理事会

7 月 各 地 句 会 案 内

句会名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	6日(木)午後1時から 猫・触れる・晒す・種	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼崎 いくしま	7日(金)午後1時から 吊る・机・雑詠(A・B)	尼崎市中小企業センター 阪神尼崎駅北東5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳塔 まつえ	8日(土)午後1時から 溺れる・言葉・地球	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
西宮北口 川柳会	8日(土)午後1時半から 自販機・踏む・速い・自由吟	なるお文化ホール 阪神鳴尾駅から徒歩10分 〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子
川柳塔 わかやま	9日(日)午後1時から ビール・両手・揃う	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川柳会	9日(日)午後6時から 汗・浴びる・予言・明日	やお8周年記念 八尾文化会館 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
ほたる 川柳 同好会	11日(火)午後1時から 海・バランス・書く	豊中市立釜池公民館 阪急釜池駅西へ150米 〒560 豊中市釜池中町3-10-28 井上直次
岸和田 川柳会	15日(土)午後1時半から 必死・舞台・便利・方法	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地理村
川柳 ねやがわ	16日(日) 正午から 金魚・野菜・隅・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時から 遊ぶ・ガラス・人柄・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木) 正午から 粘る・背中・溢れる・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
南大阪 川柳会	21日(金)午後6時から 威勢・気配り・上物・誓う	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
東大阪市 川柳 同好会	22日(土)午後6時から 胸・ちぐはぐ・揃う・魔女	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
京都 塔の会	27日(木)午後1時から 蚊・奢る・無事	京都府南労働セゾルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル 都倉求芽
富柳会	27日(木)午後1時から 割る・切り替え・自由吟	富田林中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
はびきの 市川柳 民会	30日(日)午後1時から 詫びる・キャンプ・料理・懐	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★「濡れて来し少女が匂ふ
巴里祭」―季語ともなつて
いる「巴里祭」の代表句。

川柳では「パリ祭河を渡つ
た銀狐 森田栄一」がある。

七月十四日を巴里祭と呼び
はじめたのは、ルネ・クレ
ールの映画「七月十四日」

(一九三二)を日本の映画
配給会社が「巴里祭」と名
づけてからのことである。

映画の影響力は大きい。

★七月十四日は、フランス
の人民が王制を倒して、共
和国を建てた革命の記念日

である。一九八九年のこの
日、パリの市民はバステイ
ーユ監獄を襲つて囚人を解
放した。そこから革命が発
展し、共和国が成立する。

ところが、「巴里祭」とい
う言葉には、革命を示唆す
るニュアンスは全くない。

思えば絶対主義的天皇制下
の当時は、「革命」という
言葉さえ、検閲によつて伏
せ字となつていた。

★フランスには、もう一つ
の革命記念日がある。一八
四八年二月にパリ市民が蜂
起し、王制を倒して共和制

をしき、その影響はヨーロ
ッパ全土に及んだ。ポード
レルは「二月二十四日は

人類にとつての偉大な日で
ある」と記している。

★この革命を権力の内側か
ら観察したトックヴィルの
『回想録』によると、国王

ルイ・フィリップは王座に
とどまるために「民衆にあ
えて立ち向かわず、民衆を

退席させること。憲法の文
面は変えず、その精神を遠
ざげること」を考えていた

という。いつの時代も権力
者の思考は変わらない。加
藤周一の『夕陽安語』の記

述に拠つた。

(正)

ひとこと

本社句会の分煙を喜ぶ

お気付きですか。この二月から

く聞こえ、快適な句会になりました。

本社句会の会場が分煙になりました。当時、私は脇取をやつていま

が、同じ会場の受付周辺となりました。たたん、「わあ、空気がきれい

や」。最後部の席で会計の処理を

さがれている吐来さんなどの顔も、句友から「ダン吉さん、煙が少な

しくかり見ることができました。

おかげで当日は喉や目の痛みもももらつたことを報告しておきま

なく、心なしか参加者の呼名もよ

す。 岩佐タン吉

☆「ドーン ドーン」と腹 人を感動させるのであろう。んなに頑張らないでポチポ

の底まで響く和太鼓のリズ ☆目的に向かつて懸命に打 ちゆこつ」と振り返ること

ム、鍛えに鍛えた若者の筋 込む一途さは尊い。確かに も必要だと、しきりに自分

肉が桴(ばち)と共に躍動 「精神一到何事か成らざら に言い聞かせている。

する「鬼太鼓座(おんでこ ン」も大切で、気の持ちよ うでエネルギーを引き出し

ざ)」の舞台上に感動した。 彼等は毎日三十キロから四 人を奮い立たせることも多

十キロのマラソンを欠かさ ないという。太鼓は強靱な がある。「事が成就しない

(み)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（9月号）」

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

作品募集

9月号発表 (7月15日締切)

川柳塔 (8句)	橋高薫風選
水煙抄 (8句)	高杉鬼遊選
渺湖抄 (3句)	小出智子選
茴香の花 (3句)	西出楓葉選
吟「雨」	羽津川公乃選
課題吟「若い」	小林一天選
「仕立てる」	有働芳仙選

初歩教室「力」(3句) 吉岡美房担当

川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄は誌友(誌代半年分前納者)茴香の花欄は女性に限ります。

10月号 課題吟「ユニーク」「ことば」「損なう」
初歩教室「影」

路郎忌 本社7月句会

と き 7月7日(金) 午後5時半
と ころ メンズファッションセンター3F
中央区内本町1-1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角
おはなし
兼 題 「蹴る」
「こんど」
「体験」
「わたし」
「賭け」
席 題 1 題 当日発表
◎各題2句以内
会 費 500円

橋高薫風選
杉森節子選
田中正坊選
山下美津留選
松原寿子選
西田柳宏子選

本社8月句会 7日(月) 予定

兼 題 「受ける」「意外」「部分」
「とことん」「残念」

夜市川柳募集

第2回「風」 新家 完司選
ハガキに3句 7月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課 題 「笑う」 河内 天笑選
ハガキに3句 7月10日締切
投句先
〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発 表 7月22日(土) 午前11時5分から
ラジオ第1放送(予定)

西日本文字放送作品募集

課 題 「波」 橋高 薫風選
ハガキに3句 7月15日締切
投句先
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

〒545

定 価 六 百 円 (送料84円)
半 年 分 四 千 円 (送料共)
一 年 分 七 千 九 百 円 (同)
平 成 七 年 七 月 一 日 発 行

編 集 兼 発 行 人 橋 高 薫
印 刷 所 藤 原 童 心 社
大 阪 市 阿 倍 野 区 三 明 町 二 一 〇 一 六
ウ エ ム ラ 第 2 ビ ル 2 〇 2 号 室

発 行 所 川 柳 塔 社
電 話 (〇六) 一 六 九 一 四 番
振 替 〇 〇 九 八 〇 一 五 一 三 三 六 八 番



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマン



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7
(06) 941-8018

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

TJ 豊津住宅株式会社

本 社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊 津 店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14
TEL (06) 330-0006(代)
FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166(代)
FAX (06) 388-6886